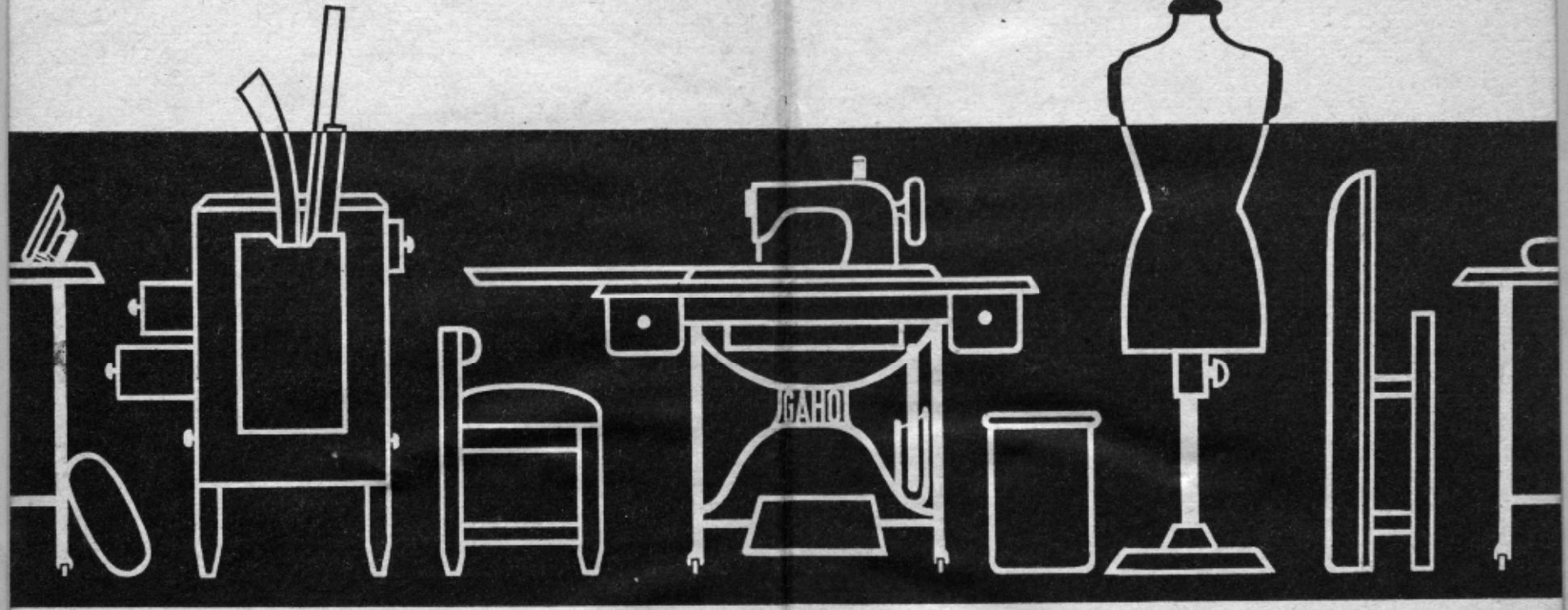
家庭洋裁入門講座

大妻コタカ著

附・洋裝語辭典


GAHO

593.31
089-2

家庭洋裁入門講座

大妻コタカ著

婦人画報社刊

大阪府立図書館
3621
大阪府立図書館
3621

ギャザーとシャーリングを生かしたデザイン

レースとコードを生かしたデザイン

ステッチを生かしたデザイン

6 トッパー
7 ツーピース
8 ワンピース
9 ブラウス
10 ツーピース
11 ワンピース
12 コードのある半コート
13 胸明きヘループを使ったワンピース

斜め布とバインデングを生かしたデザイン

はしがき

さいきん、私はある誌上でアメリカの有名なデザイナーが、"The best dressed women are those who make their own dresses"（美しく着こなしている婦人はかならずその服を自らの手で作つている）と述べているのを讀み、一日も早く日本の女性もこうなりたいものだとつくづく考えさせられました。専門家にたよらず、自分の服が自分の手で美しく仕立られたら、どんなに愉快でしよう。老いも若きも、都會農村の別なく、洋服はすでに私達の日常生活になくてはならぬ必需品の一つになつてしまいました。昔は和裁の習得が、女性にぜひとも必要なこととして求められました。しかし今日では、洋裁がこれに代り、嫁入道具としてのミシンは、世間の常識とさえなつてきたのです。洋裁は誰もが學ばなければならない。そして誰にでも習熟できる簡單な技術でしかありません。私は多年この道の教育にたずさわり、「あらゆる女性が洋裁を學び、自らの手で個性を生かして美しい服を作り上げる」ことを念願としてまいりました。私はこの念願の達成にいくらかでも役立てばと思い、友人にすすめられるまま、あえてこの筆をとつた次第です。

近頃街の書店に見受けられる洋裁書が、かならずしも初心者に親しめるものでなく、またモードを追つた繪畫的な美しさはあつても、非實際的なものが多く、洋裁全般特に縫い方に關する良書がほとんど見あたらない點にかんがみ、スタイル、デザイン、製圖、裁斷の方面は他にゆずり、もつぱら縫い方の方面から、實際にそくしたわかりやすい洋裁參考書を書きあげようと、半年あまりの歳月を費しました。洋裁に關してまつたく白紙の狀態にある人を對象とし、出來るだけたくさんの挿圖と、くどいくらいの說明とにより、理解しやすいようにつとめたつもりであります。洋裁の勉强にこれから入られる人には、よき入門書として、またすでに習得された方にもよき伴侶として、十二分に活用されることを望んでやみません。

さいごに、この仕事を終始熱心に御手つだい下さつた藤井正、小林久子兩先生に、ふかく感謝の意を表します。

昭和二十四年一月

大妻コタカ

目　次

■はしがき……(1)
■口　　絵……(1)
ギャザーとシャーリングを生かしたデザイン……(1)
(1) サアー・ドレス (2) ブラウス (3) イブニング・ドレス
(4) ブラウス (5) ワンピース・ドレス
レースとコードを生かしたデザイン……(2)
(6) コードのある半コート (7) 背明きへループを使つたワンピース
(8) ワンピース・ドレス (9) ワンピース・ドレス
ステッチを生かしたデザイン……(3)
(10) ブラウス (11) ワンピース・ドレス (12) ツーピース・ドレス
(13) トッパー
斜め布とバイディングを生かしたデザイン……(4)
(14) バイヤス・テープを使つたボレロ (15) バイヤステープを生かしたツーピース (16) 斜め縞を生かしたワンピース (17) 袴明きとポケットにバインディングしたワンピース (18) チエックの布を生かしたブラウス
第1章　布地について……(1)
1・毛織物……(2)
2・絹織物……(3)
3・麻織物……(4)
4・綿織物……(5)
5・人造繊維織物……(6)
第2章　洋裁用具……(7)
第3章　ミシンの使用法と修理法……(18)
1・ミシンの種類……(18)
2・各部の名稱……(18)
3・使用についての注意……(20)
4・日常の手入れ……(20)
5・注油法……(20)
6・シャトルの分解掃除……(21)

7・運轉法……(23)
8・布地に對する針と糸および各部の釣合……(23)
9・基礎練習……(23)
10・附屬器具……(28)

第4章　寸法の計り方……(30)

1・計る順序とその要領……(30)
2・標準寸法とメヂヤーテーブル……(31)

第5章　補正法（其の一・原型）……(33)

1・原型の肩があなたの肩より外へ出た時……(33)
2・原型の肩があなたの肩より狭い場合……(34)
3・肩先より前中心線へ皺のよる場合……(35)
4・袖刳にゆるみが出來て首へ向つて皺のよる場合……(36)
5・原型が前下りになる場合……(37)
6・脇下に皺が出來て前がすつと下る場合……(38)
7・原型がウエスト・ラインの中央で引つぱり上げられる場合……(39)
8・後身頃の補正法……(41)

第6章　既成型紙の應用法……(42)

1圖・ブラウスやスカート丈を調整するには……(42)
2圖・袖丈を調整するには……(43)
3圖・ズボンを調整するには……(43)
4圖・サーキュラー・スカートを短くするには……(43)
5圖・カラーを調整するには……(44)
6圖・袖刳を調整するには……(44)
7圖・袖を大きくするには……(44)
8圖・ウエストラインとヒップラインを大きくするには……(45)
9圖・ヒップラインだけを大きくする場合……(46)
10圖・腹部を大きくするには……(46)
11圖・ヒップサイズを大きくするには……(47)
12圖・スカートが前下りになるのは……(47)

第7章　型紙のマークを布地に轉寫する方法……(48)

1～2圖・切りしつけによる方法……(48)

3圖（A）・ルレットを用いる場合……(49)
（B）・マグネシヤ・チョークを用いる場合……(49)
4圖・チョークを用いる場合……(50)
5圖・しるしをつけ終つたときは……(50)

第8章　身體に合つた服を作るには……(51)

第9章　補正法（その二・假縫）……(54)

第10章　ステッチ……(58)

1・ベースティング・ステッチ……(58)
2・ランニング・ステッチ……(60)
3・バック・ステッチ……(62)
4・スリップ・ステッチ……(63)
5・オーバーキヤスティング・ステッチ……(64)
6・オーバーハンディング・ステッチ……(64)
7・パッディング・ステッチ……(64)

第11章　縫代の仕末（29種）……(66)

第12章　裾口の仕末（14種）……(78)

第13章　襞の作り方（7圖）……(84)

第14章　襞布と裾の飾り襞……(87)

1圖・フロウンス（飾り襞）をつけるには……(87)
2圖・ラツフルの作り方……(87)
3圖・サーキュラー・ラッフルのつけ方……(88)
4圖・バイヤス・テープを用いる場合……(88)
5圖・衿を飾る場合……(89)

第15章　角の作り方各種（5圖）……(90)

第16章　バインディング……(93)

1圖・バイヤス・テープを作る場合……(93)
2圖・一重玉緣……(93)
3圖・二重玉緣……(94)

4圖・スカラップの布端にバインディングする場合……(94)
5圖・スカラップにパイピングする場合……(95)

第17章　見返しのつけ方種々……(96)

1圖・スカラップへつける場合……(96)
2圖・ヘムに見返しをつける場合……(96)
3圖・角に見返しをつける場合……(96)
4圖・パイピングで見返しもかねる場合……(97)

第18章　タックとダーツ　(12圖)……(98)

第19章　ギャザーとシャーリング……(102)

1・シャーリング……(102)
2・ギャザー……(102)

第20章　明きの仕末……(105)

1・ドレスの脇明き……(105)
2・スカートの脇明き……(107)
3・肩明きの作り方……(110)

第21章　ファスナーの附け方……(111)

1・プレン・スィーム・オープニング……(111)
2・ファスナーを縫目の中へかくす方法……(111)
3・袖口につける方法……(113)
4・とりはずしの出來るファスナーの附け方……(113)
5・ポケットにつける場合……(115)

第22章　前明きの作り方……(117)

1・まわしづけ……(117)
2・片玉縁仕立……(118)
3・兩玉縁仕立……(120)
4・V型ネックライン……(122)
5・卵型ネックライン……(122)
6・角　衿……(123)

第23章　ベルト及びベルト通しの作り方……(124)

第24章　ループ（5個）……(127)

第25章　袖について……(130)

1圖・袖のつけ方……(130)
2圖・パットの作り方……(131)
3圖・肩芯の作り方……(132)
4圖・汗よけの作り方……(132)
5圖・袖口の作り方……(133)

第26章　釦の附け方及び釦穴の作り方……(135)

釦のつけ方……(135)
1圖・スナップのつけ方……(135)
2圖・フレンチ・タックの作り方……(135)
3圖・スリップの吊紐通しの作り方……(136)
4圖・エンブロイダー・アイレットの作り方……(137)
5圖・重しのつけ方……(137)
6圖・鉤ホックのつけ方……(138)
7圖・四つ目釦位置の定め方とつけ方……(138)
8圖・補強釦のつけ方……(139)
9圖・飾り釦のつけ方……(140)
10圖・スレッド・ループとリンクボタン……(140)
11圖・くるみ釦の作り方……(141)
12圖・バックルを布で包む場合……(142)
釦　穴……(142)
1圖・ボタンホール及びボタンの位置をきめるには……(142)
2圖・見返しをつける場合のボタンホールの作り方……(143)
3圖・見返し布なしのボタンホールの作り方……(144)
4圖・パイプを用いるボタンホールの作り方……(144)
5圖・穴かがり……(145)

第27章　ポケットの作り方……(147)

1・貼つけポケット……(147)
2・囲蓋ポケット……(147)

3・玉縁ポケット ……(149)
4・箱ポケット ……(150)

第28章　レース及びトリミングと刺繍その他 ……(153)

1・レースについて ……(153)
2・ヂグザグ（ZIG—ZAG）・トリミング ……(153)
3・リック・ラック ……(154)
4・バー・フアゴティング ……(154)
5・紐を入れたトリミング・バンド ……(154)
6・刺繍その他 ……(155)

附　録　洋裁用語選 ……(159)

口絵・扉……宮　内　　裕

家庭洋裁入門講座

第1章　布地について

繊維工業の多角的な進歩や、資材の不足などによつて、衣服に用いられる布の質も非常に複雑となつてきましたので、たつた一枚の布地を選定するにも、相當の知識をそなえていなければなりません。もちろん、いまのような環境におかれている私たちにとつて、自ら選定して買い求めるということは、なかなか困難で、特殊な一部の人を除いてはゆるされないことでしよう。けれども、一應の常識として知つていなければならない事柄を簡單にのべてみることにいたしました。

もともと、衣服を選定する場合に必要な條件は、まず保健と衛生、整容および經濟の三點であります。衣服を保健・衛生の上からみて大切な事柄は、地質の構成及び繊維の種類などで、それぞれその用途によつて要求は異なつてまいりますが、地質の保溫性、通氣性、吸濕性および吸水性などその性能を十分調べた上で、最も適當なものを選ぶようにしなければなりません。また衣服の整容は、私たちの人格の外觀的表現でありますから、私たちは、いたずらに流行にとらわれないで、まず、私たち自身の個性を生かすということに主眼をおき、次に趣味や嗜好に應じたものを選ぶことが大切です。次に、衣服を經濟的な方面からみてみましよう。それには、價格と耐久力という、二つの點から考えることが出來ます。一般に、安價を希望するのは當然なことですが、どんなに安くても耐久力の乏しいものは、實用的價値がありません。ですから、耐久力に富み、比較的安價でもあることが、何よりの條件となるわけです。

以上は、實際に洋服地を購入する際に必要な注意事項をのべてみましたが、次に基礎的な練習などをする場合の布地についてのべてみましよう。

始めて學ぼうとする人たちにとつて、古い材料を用いるということは、

何か張合いのない氣がすると思いますが、今日のような時代に、新しい材料を入手するのは、なかなか容易なことではありませんし、また練習にはその必要がないと思います。洋裁練習の布地を選ぶ場合は、爪で容易に折目がつけられ、しつけをしなくても要所々々をピンでとめておけばよいような、糸目のつんだ布地があれば、どんなものでもよいのです。このような條件のものとしては木綿地が第一番です。ことに、初心者にとつて一番扱い易いのが、この木綿地なのです。さて、古い布地を利用する場合、鏡になつているものは、一度水に通して薄い糊をかけ、鏡をのばしてからがよろしいでしょう。とくに新しい布は、そうじて洗うと縮みますし、たくさんの糊がついていて、布目が曲つていたりしますから、縫う前に、水を通すなり、そのほか布に應じた整理が必要であつて、新しい布と古い布とを一しよに使う場合など絶對に忘れないようにしなければなりません。

1・毛　織　物

毛織物とは、羊毛およびその代用となる繊維によつて、織られたもので、高級品は非常に繊細な毛を原料としており、手觸り、外觀などにその重點をおいているため、必ずしも實用的ではありません。現在、私たちで入手出來るもの、あるいは、現在皆さんの家庭にあるものは殆んどがスフ・木綿・絹などとの混織だと思います。このようなウール地（毛織物）を扱う場合には、あらかじめその混入されているものの割合や、縮む度合などを出來るだけ調べておかなければなりません。

すべての織物原料の鑑別法には、物理的と、化學的との二つ方法があります。物理的には、きわめて簡單に、繊維の外觀および觀感、そのほか長さ、太さ、形狀、强さなどによつて、その種類を決定することが出來ますが、もしも正確を必要とする場合には、顯微鏡によつて、繊維を擴大して檢査いたします。化學的な鑑別方法としては、動植物性繊維のどういう割合かをみる燃燒法と、藥品處理法とがありますが、家庭で出來る簡單な方法は、物理的方法と燃燒法とを併用すればよろしいでしょう。

ふつうのオーバーおよび洋服地としては、ふくらみのある、輕量なものを上等品としております。下等品は手觸りが硬く、重量が大きく、反毛や木綿などを多量に混ぜてあります。燃燒法の試驗をしてみるのでしたら、

地質のよこ糸およびたて糸をほぐしてそれぞれ燃燒してみます。この場合に羊毛や絹の動物性繊維は、毛髮や膠を燒くような臭氣をはなち、ほとんど糸または織物の形のまゝの灰を殘します。

さて、毛織物は、仕立てにかゝる前に、スポンヂ（地のし）しなければなりません。以前は、專門の仕立屋さんに持つてゆけばやつてくれましたが、家庭で出來る簡單な方法を申し上げてみましよう。まず、大きなテーブルを用意して、この上に布地を一枚にしてひろげます。その上に温めした布を重ね、これを捲きこんでそのまゝ一晩おきます。そして、翌日アイロンをかけるのです。この場合、アイロンはあまり熱しないように、また必ず温した布をあてて、その上からプレスするようにしなければなりません。そして、アイロンをかけながら布目を整え、耳のつれなどもなおします。たいていの毛織物は、以上のようにして地のしが出來ますが、シフォン・ベルベットなどは、毛が脆やすいため、絶對にアイロンを直接かけてはいけません。プレスの必要がある場合は、藥罐の湯氣などを利用したりして、蒸氣をあてる程度にとゞめておきます。

2・絹　織　物

我が國にもつともめぐまれている絹は、婦人服に最適のものです。情緒たつぷりなドレープやフレヤーなどは、絹でなければその味わいを表現することはできません。しかし、現在は僅かな配給以外には、市販にあまり見受けられませんし、ありましても相當高價なものでしよう。

純絹は、動物性繊維ですから、燃燒試驗を行いますと、毛織物と同じに溶けるように小さな灰の塊りとなつて、ちようど、人間の毛を燃した時のような臭いがします。

絹物の地のしは、鏡布を使わずに、裏から直接アイロンをかけてけつこうです。布地によつて多少は違いますが、裏から乾いた布をあてゝアイロンをかければ、さしつかえありません。また、黒地物は、直接アイロンをあてますと、生地が光つて、みにくくなりますから、かならず、白の晒布を使用してください。アイロンをかける場合、布の長さにむかつてアイロンをおしますと、力が入りすぎて、生地が伸びたり、アイロンの角のあたりが出たりしますから、必ず布を左右に往復しながら、上からおさえるよ

うにして、かけなければなりません。アイロンをかけ終りましたら、一時間ぐらい冷やしましてから、裁つのが安心です。湿みのある間は、生地に狂いが出る心配があるのです。

絹物の中で、特別違つた方法をとらねばならないのは、ジョーゼットとクレープ・デシンです。ジョーゼットは、たて糸、よこ糸共に、よりの強い糸で織つてありますから非常によく縮みます。これをいつぱいにのばしてしまつたり、また反對に縮むだけ縮めてしまつたりしては布の持ち味を失つてしまい、結局は、使えないものになつてしまいますから、よほど注意する必要があります。一番よい方法は、その布地の中で、幅のもつともつまつている部分に合せて、虫ピンで平らに張り、霧をかけて、乾くまでそのまゝにしておきます。こうしますと、布地が平らになつて、工合よく裁つことができます。しかし、これは容易なことではありません。簡單な方法としては、まず布の裏を出し、熱い目のアイロンを、上からおさえつけるようにして巾の狭いところに合せながら、丁寧に、一様にかけてまいります。まだらにかけますと、あとで狂いが出ますから、注意してください。次に移るときは、必ずアイロンを浮かせて、布地をこすらないようにすることと、こうした生地にはピンでとめておかない限り、決して湿りを與えてはいけません。こうして、地詰めのアイロンが終りましたら、耳伸しのアイロンをかけます。耳伸しの方法は、耳だけにアイロンをのせて、曲線を描くようにしながら、強く引きますと、耳のつれが相當に直ります。これでもまだ駄目の場合には、切りこみを入れるよりほかに仕方がありません。

クレープ・デシンは、よこ糸のよりが強いため幅の縮む性質がありますから、專門家にたのんで湯のしをするのがよいでしょう。それほど上等でないものでしたら、四つ折りにして、二枚のあいだに固く絞つた湿り布を一枚入れ、さらに上側に湿り布を一枚のせて、熱い目のアイロンを上から滑すようにしてかけます。すると地の目がつまるだけつまつて、完全な地のしができますから、裏地に使用しても後で狂いのでるようなことはないでしょう。

3・麻　織　物

麻織物とは、亜麻、苧麻(ちよま)、ラミー、大麻などの糸を用いた織物の總稱で、その特長は、地質堅牢で、彈力性に富み、ほかのどの繊維よりも傳熱性が大きいために涼しいのです。そのため主として夏の洋服地に使用されます。麻織物には交織や擬麻加工品が多く、巧みに作られたものが

ありますから、真否の選別には、特に注意が必要です。

麻織物は、長い柔い繊維で織られているリンネルが一番丈夫です。しかしリンネットといつて、たてに擬麻加工したガス糸、よこに亜麻又は苧麻の紡績糸を用いた平織物で、リンネルの模擬品がありますが、これはリンネルにくらべて張力が弱く、毛ば立ちやすいために、外觀を損じやすく、そのうえ、耐久力も劣り、あまり經濟的ではありません。これを調べる場合は、生地の裏から、指を濡らしてあてゝみてください。その時、すぐ表へ湿りがあらわれるようなものでしたら大丈夫です。

麻織物の地のしは、木綿などと同じように水につけ、縮めてから、アイロンを十分に熱して、表側から少し湿つているうちにかけるのがよいのです。しかし、色物はちがいます。色物は水につけずに、霧を吹く程度にして、アイロンをかけるのです。

4・綿　織　物

綿織物は、經濟的な立場からみて、まず第一に安價である。そして實用的である點において、他のいずれの織物よりもまさるでしよう。綿織物は糸の番手、すなわち、太さが平均し、また地合の相當密なものが、外觀もよく、耐久力においても一番です。粗惡なものほど糸が不均一で、組織があらく、外觀、觸感、耐久力においても劣ります。これらの粗惡品には、必要以上に糊を多くつけ、一時的にその缺點を補つたものがありますが、このような地質は、とくに早く弱まり、耐久力はずうつと劣つてきます。現在私たちに入手出來るものは、すべてスフと人絹の交織で、純綿といつても二、三割は必ず混織されております。

白綿布類は、漂白法が不完全なため、地質の弱つたものがありますからお求めの時は繊維のたて・よこを解いてみて、その地質の强さを簡單に調べてみた方がよろしいでしよう。

木綿物は、それほど丁寧な地のしをする必要はありませんが、多量に糊がついて、縫いにくいものや、一度洗うと極度に縮むものがありますから前もつて水につけ、少し柔む程度にして引き上げ、適當に折り畳んで、張

板のようなものの上で、おさえつけて水をきり、そのまゝ蔭干しにいたします。そして、すつかり乾ききらぬうちにアイロンを裏表からかけますと、布が縮むだけ縮んで、しなやかになり、縫いよくもなります。また縫い狂いもしないようになります。

5・人造繊維織物

人造繊維織物とは各種の人造絹糸やスフをたて・よこに用いて造つた織物です。多くは、絹織物の代用として造られています。例えば人絹羽二重、人絹縮緬、人絹紗、人絹ジョーゼットなどであります。絹織物にくらべて、皺のよりやすいこと、重いこと、肌觸りが冷たくて保溫性が少ないことなどで劣つております。それに絹の高尚な光澤に比べると、人絹は頗烈な光りがありますが、近ごろでは大いに改良されました。

スフ糸をたて・よこに用いた織物には綿織物また毛織物の代用品が多くあります。人絹とスフでは人絹の方が丈夫で、光澤はスフの方がありません。人絹、スフ共に水につけると硬くなりますから、霧をまんべんなく吹いてアイロンをかけるようにしてください。

第2章　洋裁用具

どんな仕事に限らず、一つの仕事をきちんと仕上げるには、それに必要な道具をそろえておかなければなりません。洋服裁縫の作業においても、手際よく、しかも能率的な仕事をしてゆくためには、それぞれ適當な用具と共に注意ぶかい態度がなにより必要です。

現在、店頭にある、いろいろの目新しい洋裁用具は、すいぶんあなた方の目をひくことと思います。けれどもこういうぜいたくな用具の揃つていなかつた時代にも、現代に劣らない素晴らしい作品が澤山作られていたことを考えてみてください。道具を揃えるということは、決して、高價でぜいたくな用具を揃えるという意味ではありません。それは仕事をするのに使いよい道具を整えるということなのです。手頃な、よく使いならされた道具があれば、きつと、思う存分な心地よい仕事が出來るに相違ありません。わざわざ買わなくても、現在お家にあるもので十分間に合わせるように、工夫してゆきましよう。そして、基礎的な事がらをしつかりのみこんでのち、その時々の必要に應じて揃えてゆくというのが賢明であり、また樂しみでもあろうと思います。

次に、用具の名稱をあげ、その用途や優劣の見分け方、その他それに準ずる必要な事がらについて簡單にのべてみましよう。

1・指　ぬ　き

指ぬきは、仕事をはやく容易にするために、手縫いには必ず用いなければなりません。金屬製のものと皮製のものとがありますが、指ぬきは針と指ぬきとがよく聞れなければなりませんから、ウール地などの厚地には金屬製のものがよいと思いますが、絹物などには皮製のものでも差支えありません。また、指ぬきの表面の穴は、あまり深いと針のメドが折れやすく反對に淺すぎますと針が滑ります。中は 7～8 粍ぐらいで、指にはめて少しきついくらいのものを適當とします。

2・鋏

大小いろいろありますが、裁ち鋏と握り鋏の二種類あればよろしいでしよう。

そのうちの裁ち鋏（羅紗鋏）について申上げてみましよう。すべての鋏は、よく切れるものでなければいけませんが、特に裁ち鋏はお求めになる

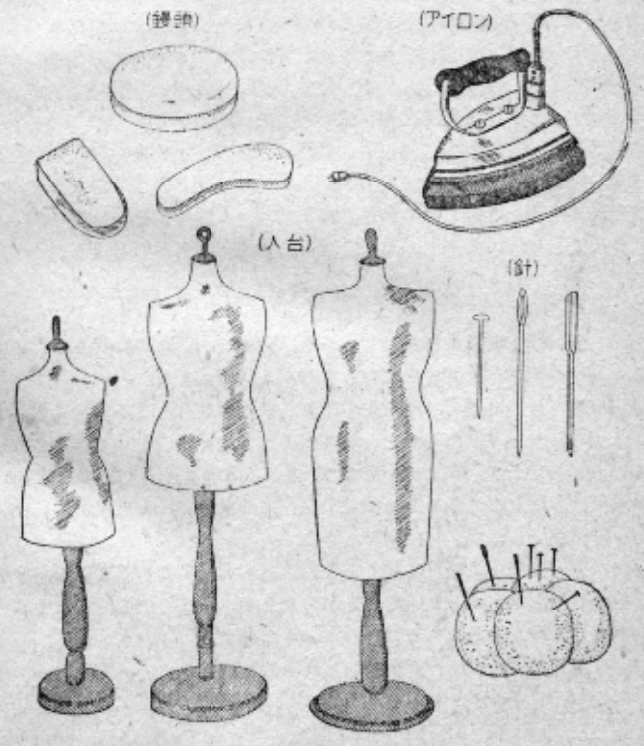
時にはよく注意して下さい。裁ち鋏の握りは、両方同じ大きさのでも結構ですが、出來得れば、專門家の用いるもののように握りが、圓のように曲つているものがよいのです。これは裁斷臺に布をひろげたままで、持上げなくても鋏が使えるように工夫されたものなのです。高價なものでなくても、布地の裁斷以外に用いなければ、一生でも使えるものなのです。鋏を見分けることはむずかしいものですが、簡單な鑑別法としては、まず刃先の眞直ぐなものを手に取り、空切りしてみます。力を入れずに刃と刃を合せてみて、途中でひつかゝらずに、先までずうつと軟かく合うものがよいのです。また、ラシャを二枚重ねて、それが調子よく切れ、その裁ち目が

上下とも少しもずれないもの、また、日本紙を濡らして、それを切つてみて、その切れ目が毛ば立たずに切れるものが、切れ味のよい鋏です。

近頃は、外見は立派に見えても、すぐに切れの止まるものや、ちよつと落したくらいで折れるような粗悪な品が、かなり出ておりますから、注意してお求め下さい。軟かくて、動きやすい布地を、鋏の先を多く使つて裁つ場合は、鋏で布をくわえ、手前に引くようにして刃先を下に、握りの位置を上にして布を持ち上げずに切るとよいのです。

鋏の手入れとしては、刃の裏から刃先の方へ、油雑巾で必ず毎日一回拭きます。そして、時々ネジのところに極く少量の油をさして下さい。

次に、握り鋏（日本鋏）ですが、これは長さ 12 糎くらいを適當とし、あまり重くないものを選びます。糸を切つたり、あるいは縫目をほどいた



り、小さな切り込みなどをする場合に、なかなか便利なものですから、必ず用意しておくのがよいでしょう。

このほか、贅沢になりますが、ピンキング・シェヤーズがあれば、これにこしたことはありません。これは縫目の始末をするときなど、布のほつれをふせぐために、ギザギザに布を切るのに用いるものですが、現在、日本にはあまりないようですし、あつても相當高價なものでしょう。

3・ピ　　ン

揃えなければならない諸道具の中で、一番小さく、そしてもつとも重要なものは、ピンであります。專門家は、これを上手に利用することによつて、仕事の能率を高め、そして立派に仕上げます。

シンチュー製と、鐵製との二種類ありますが、縫針のように先は細く尖つたもので、目の細かな薄地にでも跡がつかないものでなければなりません。シンチュー製のものは曲つても折れず、また手にさしても化膿しません。いつぜんに、木綿用として用います。絹ものなどにも結構ですが、鐵製のものの方が、より細くて布に穴があきません。

用途としては、型紙をとるとき、假縫いのとき、または立體裁斷のときなどに、特針として用います。番號が大きくなるほど、太くなります。1番は極く細く短いので、餘り使用されません。4番は假縫い一般に用います。たゞし、ラシャ地用としては、5〜6番がよろしいでしょう。

4・メージャー

（A） **物　指**　50糎と20糎の二本あれば便利です。この目盛りは、インチとセンチの兩方がきざまれているものがよいでしょう。

（B） **巻　尺**　身體の寸法をとつたり、曲線の長さを計る場合に用います。ふつう、テープ狀のものと、携帶用として金屬製のケースに入つているものとがあります。長さは、1米50糎と2米のものとがあります。

普通には、以上の二つでよいのですが、次のカーブ尺と角尺があれば、なお一層便利でしょう。

（C） **カーブ尺**　曲線を、早く正確に、しかも綺麗にひくことが出來ます。目盛りのあるものとないものとがありますが、なくても結構ですから一本用意しておくとたいへん都合のよいものです。

（D） **角　尺**　これは、直角をあらわすのに用います。

5・糸

糸を買う場合は、商標の知れたものを選ぶようにしなければなりません。糸にはカタン糸、羽二重糸、絹糸、穴糸、しつけ糸などがありますから、まずカタン糸から説明いたしましょう。

（A） **カタン糸**　カタン糸には、4番から120番まであります。地質によつて、それぞれの太さに注意して用いなければなりません。4番は、主として勞働着などを縫う場合に用います。釦をつける場合や、釦穴をかがるときなどは、太い丈夫なものでなければなりませんから、8番を主として用います。20番、30番は、ボイル、ネインスークなどの薄地木綿の釦スナップつけ、または木綿の千鳥縫いや、丈夫に止めるところなどに用います。40番は、近頃出廻つていないようですが、これは30番の代用にいたします。50番、60番は木綿や地厚な絹のしつけ、また、一般の木綿類の縫糸に用います。80番はネインスーク、ボイル、一般木綿の薄物などの縫糸、ピローヒの切りしつけ、一般木綿、絹などのしつけ用にいたします。100番はオーガンジー、薄寒冷紗などの縫糸に、120番は特殊な薄もの、例えばレース、チユールなどの縫糸に用います。

（B） **羽二重糸**　羽二重糸は、ウール、シルクなどの縫糸、それからかがり糸として用いられます。絹糸は主として和裁用のものですが、細口と太口とがあり、兩方ともに、絹もののワイシャツの穴かがりや、絹もののドレス、ブラウスのスナップつけ、釦つけ、ループ、袖つけ、その他のまつり、千鳥がけをする場合に用います。

（C） **穴　糸**　穴糸は、絹糸の極く太いもので、ラシヤ・コートの釦つけ、穴かがり、ループなどに用います。

（D） **しつけ糸**　しつけ糸には白モとゾベがあります。白モは洋裁用のしつけ糸で、普通の木綿糸のさらしてないものです。これは普通のしつけ糸よりも毛ばがあり、撚りがもどろうとする性質があります。この性質を利用して、ラシヤもののしつけに多く用いられます。木綿物、絹物にも地の目の粗いものには用いますが、オーガンジー、ボイル、ジョーゼット、クレープデシンなどには、布が負けますから使つてはいけません。

（E） **糸の色**　糸の色は、濃色の布には同色、または少々濃い目の色、薄色の布には、同色または少々薄目の色を用います。

6・ル　レ　ッ　ト

これは點線器です。または西洋ベラともいつて、金屬性の齒車に木製の柄がついているものと、齒の薄い金屬性のケースに入つているポケット用のものとがあります。齒先きが丸くなつているもので、輪の直徑は2糎く

らいのものを適當とします。

用途は和裁用のヘラと大體同じで、デザイン線を入れたり、あるいは型紙から他の型紙に寫しとる時、または裏の縫目を入れる場合などに用います。洗濯を多くするものは、破れやすくなるため、なるべく使わない方がよいでしょう。布地によつて力の入れ方を加減することに注意し、進んではもどり、という調子で用います。たゞし、絹、縮子地の場合は、絹糸がルレット歯にからみつき、布地を傷めますから、絹物には絶對に用いてはなりません。

7・チ　ャ　コ

テーラード・チョーク（チヤコ）には、白、赤、青の三種があります。主として白を用いますが、白では見えないというような時には、他の色を用います。ポプリン、絹セルのような擦りの強い織物は、チョークがなかなか消えませんから、なるべく使用しない方がよいでしょう。いつも薄くけずつておかなければなりません。けずるには、兩面でなくて片面だけけずります。そして人差指と親指とでつかみ、先きを使わずに、元を使うようにし進んではもどり、という調子で用います。

お求めになる時は、軟かくて、よくつくものを選び、砂などの混ざつているものはさけなければなりません。

8・針

針には、ミシン針と手縫い針とがあります。

（A）**ミシン針**　ミシン針の太さは12種類あつて、手縫い針と反對に數字の若い番號のものほど細くなつております。

針と布との釣合いは、大體において絹物には9番、普通の木綿や薄地の毛織には11番、厚地木綿や毛織物には14番、地厚ラシヤには16番を用います。

（B）**手縫い針**　手縫い針にも、縫い針とかがり針とが必要です。手縫い用には、一般にメリケン針を用います。メリケン針とは、針穴が細長いので、針の細い割合に太い糸も通り、糸を傷めることも少なく、また針先きが鋭敏なので針の通りがらくなのです。仕事の細かい部分ほど、短い針を用いた方がらくに出來ますが、針の長いのは洋山縫えて、時間、勞力共に經濟です。これはギヤザリング、オーバーキヤスティング、あるいは假縫いの時など特に感じます。

小さい番號から申しますと、4番はオーバー・コートの釦つけ、6番は白

モを通して切りしつけや、一般ラシヤものの押さえしつけ、ボタンつけ、穴かがり、まる留めなどに用います。7、8番は最も必要で、スナップつけ、穴かがり、薄物のまつり、シェアリング、ギヤザリング、千鳥がけなどに用います。9番は極く薄ものを扱う場合に用いられますが、これは國產の絹くけ針を使用するのもよいでしょう。

かがり針は、縫い針よりも目の大きな、長目のものがよいと思います。太い糸で刺繍をしたり、靴下の修理などをする場合に便利です。

現在はあまり見受けられませんので、御參考までに記しておきますが、縫い針に專門家の使う「ミリナーズ針」というのがありました。これはメリケン針よりも長く、大きさは1番から9番くらいまであり、初心者には扱い易いものです。

9・目　　打

目打の用途は非常に廣く、しつけをとる時、合じるしをする時、角を縫い表に出す時、釦穴の芯にする糸をよる時、ギャザーのいせ加減に注意しながらミシンをかける時、釦穴、鳩目穴の丸みを整える時など、細かい部分の仕事をする時に用います。

使用の際、とくに注意することは、目打ちの刄先きに必ず人差指をのせ危險がないように注意いたします。

10・毛　抜　き

切りしつけや、置しつけの糸を抜き取る時に用います。刄の喰い違わぬ幅の廣い彈力性のあるものがよいでしょう。

11・鳩　目　穴

釦穴の止まりやリボン通しの穴をあける時などに用います。

穴の直徑は、大きいもので3粍、ないし4粍、小さいものでは2粍くらいのものがあります。鳩目穴は、槌で叩いて使用される方が多いようですが、上から叩かなくても、おさえて廻せば切れるようなものを選んで下さい。

12・の　　み

のみは、平目打、穴切りともいわれております。三種類あつて、シヤツ穴用には9粍巾のものがあり、背廣の釦穴用には1.5糎、オーバーの釦穴用には2.2糎巾のものと、大體この三通りです。

用途としては、釦穴をあけたり、ほどきものをする場合、毛皮を切る時、釦、スナップを取る時などに用いられます。スナップを取る場合、鋏を使いますと、布地を傷めることがありますが、この平目打で、スナップの金具のところにかゝつている糸を二箇所だけ先きにこすり、裏返しにして殘りの二箇所を切りますと、絶對に失敗はありません。これをお求めになるときは、刄先きのなるべく薄いものを選んで下さい。9 粍巾のものも、一つ用意しておきますと、ひじように便利です。

13・アイロン

アイロンには、電氣、瓦斯、炭火、蒸氣の四種類がありますが、一般には、電氣アイロンが多く使用されております。アイロンは、洋服の仕上げには、なくてはならないものです。木綿、絹、薄地毛織などには、4 ポンドを、厚地ラシヤなどには、5 ポンドくらいを用います。家庭用としては 4 ポンドが適當でしよう。

14・羽子板

この羽子板を毛織物の仕上げのときに使用いたしますと、こてずれが取れ、濕氣も早くとれます。使用法は、アイロンをかけて、濕り氣のあるうちに、すぐ羽子板でおさえるのです。

15・ブラッシュ

ブラッシュは、仕上げのとき、糸屑や塵を拂つたりするのに用います。また羽子板の代りにして、「こてずれ」を取る役もいたします。

16・塵取り箒

仕上げ用ブラッシュでとれない塵を拂います。

17・水ブラッシュ

アイロンで布を縮めるときや、縫い目を割つたりする場合に用います。こゝで水ブラッシュを使うときの水の量ですが、サージ、セル類は澤山水をあたえると布が軟かくなり過ぎ、乾かすためにアイロンを熱くしすぎ、こがしやすいものですから注意しなければいけません。すべて薄地のものは水量を少なくして、早く乾かさなければなりませんから、ブラッシュを輕くもつて、布の上をなでる程度にいたします。厚地ものには十分水をあたえませんとアイロンがきゝませんから、地質により加減するのです。ま

た水がつきますと、シミになるような性質の布地があります。毛織物には比較的少ないのですが、絹物には特にこの點で注意する必要があります。「こてずれ」というのがありますが、これの簡單な直し方は、まず服地の上に濕つた布をのせ、さらに乾いた布をのせ、上からアイロンをかけて、蒸すようにしますと、たいていの場合は直ります。

18・アイロン・ボード

アイロン臺は、地のしや、仕上げ用のためには大きいのがよく、これは簡單に作れますから、一つ備えておくのが理想的です。出來ないときは、帶芯の厚地のもの、毛布の毛の切れたものなどを、裁ち臺の上にのせて、代用にしても結構ですが、裁ち臺が薄いと、そりかえるおそれがありますから注意して下さい。

19・仕上げ馬

袖マンや、大小の圓座をかねたもので、胸部や背部や腰部の比較的平らな箇所をあてるものと、袖やズボンなどに適する細長い臺とが、組合わせられているものです。

20・袖マン

袖山のいせを消すとき、袖の縫目を割るとき、それから袖の仕上げをするときなどに使用いたします。

21・圓座（饅頭）

直徑 22.3 糎のものと、15 糎のものと二通りあります。大きい方は婦人服用として適當で、主としてしつけ用に使います。また、これをテーラードのものの仕上げに多く用います。小圓座は子供服用に使います。

22・肩マン

袖つけのとき、肩の丸みをつけるときなどに用います。

23・腕マン

袖口が通るくらいの太さで、細い縫目を割るとき、しつけをかけるときなどに使用されます。

24・霧吹き

圓のようなものが一般向きで、使いよいものですが、口の取りかえられ

るものなら、いつそう便利でしよう。

25・型　紙　用　紙

ハトロン紙、模造紙、方眼紙などいろいろありますが、包装紙や新聞紙などを利用した方が経済的でしよう。たゞし、原型を製置する場合には、少し厚目の紙の方が、移動などするときに便利かと思います。

26・ミ　シ　ン

ミシンは、洋裁になくてはならないものですが、洋服はミシンでなければ出來ないように考えるのは誤りと思います。外國でも上等のものは、わざわざ手縫い仕立にするくらいで、高級なものほど手縫いの部分が多いのです。ミシンの使用法および修理法は、別にミシンの項にかゝげましたから参考にしてください。

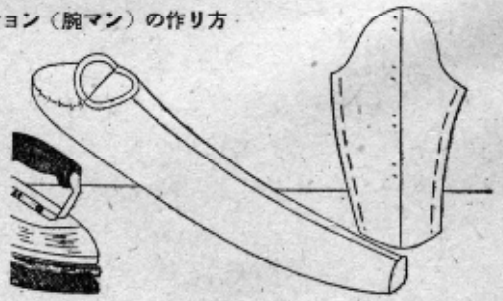
以上で、用具のだいたいの説明は終りましたが、ご自分で作れ、しかも合理的な、アイロン・ボード、スリーブ・クッション（腕マン）、テーラード・クッション（圓座）の作り方をつけ加えておきましよう。

アイロン・ボードの作り方

アイロン・ボードは、幅35糎から40糎、長さは70糎から80糎位の板に、厚み1糎くらいの芯を入れ、丈夫な布を被せて、まわりを鋲で打ちつければよろしいのですが、中には十分の綿か、若しくは布きれ、おが屑などをつめこみ、表面は軟かな布地を用いて、すべすべしたものにしなければなりません。張り布は糊のついていないモスリン地が、一番よいでしよう。使い古したトルコ・タオルで張るのもよい思いつきです。そして張り布は、時々洗濯の出來るように、簡單にほどけるように縫いつけておくのも一つの案です。

スリーブ・クッション（腕マン）の作り方

スリーブ・クッションを作るには、まず標準型の袖型を選び、これに縦のタックを取ります（圖参照）。次にモスリン地を用いて、この型紙で袖を作るのですが

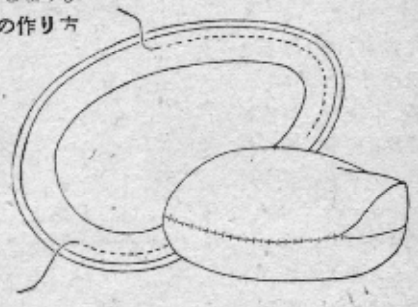


スリーブ・クッション

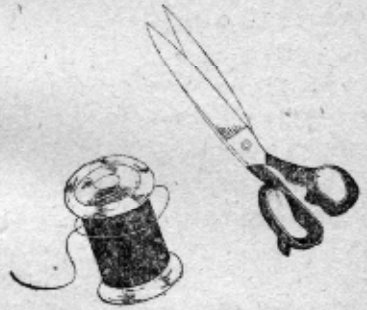
この場合注意しなければならないことは、型紙の出來上り線よりも、ちよつと深めに縫うことです。出來上りましたら、一方の端をふさぎ、つめ綿、布屑、あるいはおが屑をぎつしりつめこみ、かたくして、兩端に丸みをもたせるようにして蓋をいたします。

テーラード・クッションの作り方

テーラード・クッションは、まずモスリン地で長さ30糎の楕圓形の二枚の布地をとり、中表にして、一方の端をあけておき、縫い合せます。つめ終りましたらあいている口をからげておきます。



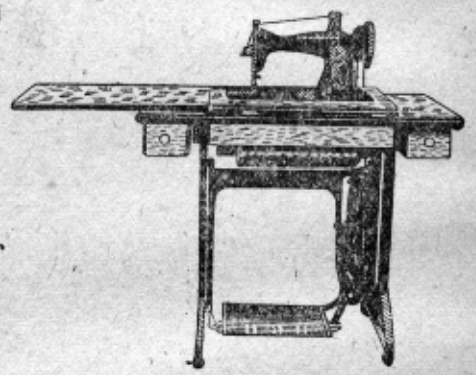
テーラード・クッション



第3章　ミシンの使用法と修理法

1・ミシンの種類

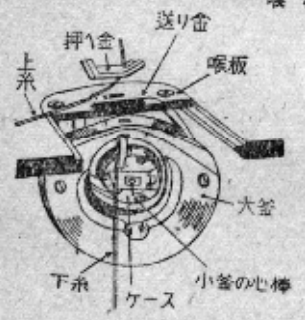
近頃、街を歩いていると、すいぶんいろいろの新しいミシンの名稱を見うけますが、もし、お求めになるのでしたら、やはり昔から名の知れたもの、例えば、外國製ならシンガー、ノーマン、パスクパナなど。また和製では、三菱、蛇の目、朝日、パイン、ブラザーコントロールなどが、比較的當りはずれがなく、安心して使えるのではないでしようか。現在、内外地向けに、各會社がこぞつて製作している機種は、何といつても十五種系統のものが多く、このうち83型が家庭用として大部分を占めております。一般的なものとしては、このほか46型、70型、88型、103型などがありそれぞれ機械の構造によつて、一長一短をまぬかれません。



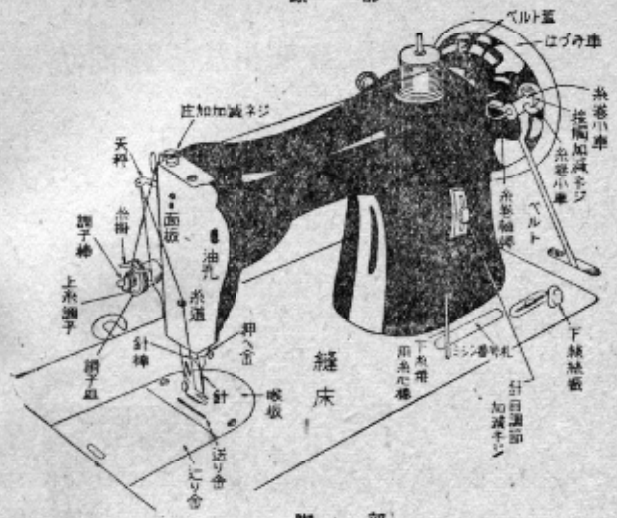
2・各部の名稱（圖參照）

各部の名稱は、圖をみておぼえてください。

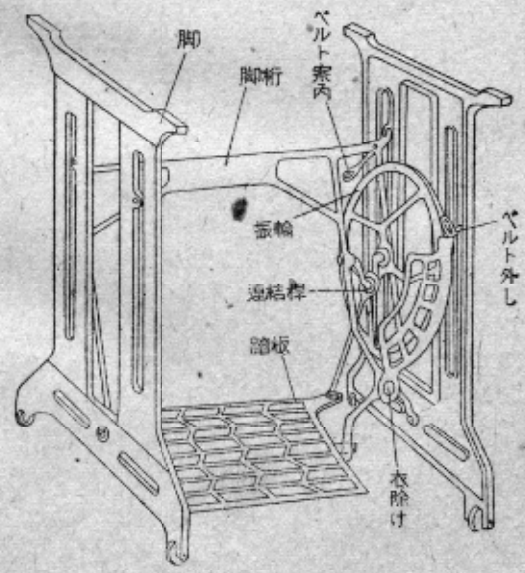
喉板と釜



頭　部



脚　部



3・使用についての注意

ミシンは、まことに精巧をきわめた重寶な機械です。洋裁においては、これを100パーセントに利用することが、すなわち成功への秘決だといえましょう。そしてこれを活用すること、つまり皆さんがいかに機械の各部分に關する正確な知識を持つているか、そして周到な注意をしているかにかゝつていることは、申すまでもありません。

使用に際して、まず考えなければならないのは採光です。機械をおく場所は、窓際のような明るいところを選びましょう。もちろん必要なら夜間の仕事に備えて、電燈の位置をも考慮しなければなりません。針先の部分へ、よく光の當ることが、いずれの場合においても絶對條件なのですが、といつて餘り陽當りがよすぎたり、雨の降りこむような場所は避けなくてはなりません。次に、腰掛けですが、出來るだけ掛け心地のよい、少し高目のものを選ぶようにして下さい。

4・日常の手入れ

機械類の壽命を延ばす最上の方法は、日常の十分な手入れにあるのです。ミシンにとつて、塵の溜まることは、一番の禁物です。常に油雑布で表側、裏側、脚部とよく拭い、きれいにしておきます。ベルトは、新しいうちは伸びやすいものですから、時々長さをしらべ、年に一、二回は動物性の油で拭きこむとよいのです。

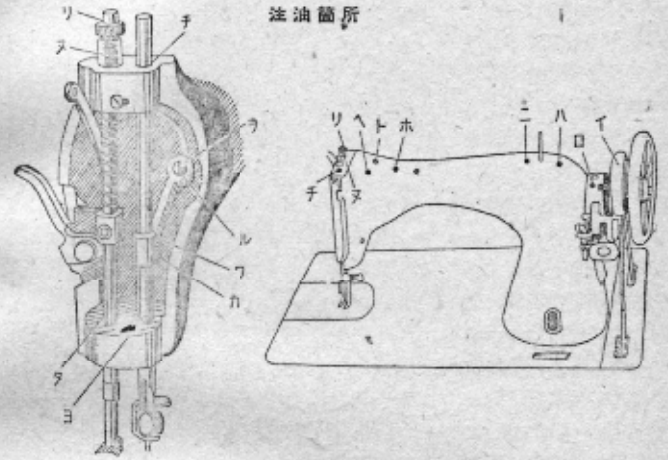
〔注意〕分解掃除は必要なとき以外に、あまり度々行うことは、かえつてネヂの頭を損じたりしてよくありません。

5・注　油　法

摩擦する部分に、注油することは、他のすべての機械と同樣です。注油の時期や回數については、はげしく使用するものは一日一回、そうでない

ものは、使用毎に注油すればよろしいでしよう。もちろん、ミシンに注油する油は、かならずミシン油でなければなりません。良質のミシン油の特長は、白スピンドル油といい、鑛物性で適度の揮發性があり、油がきれても、そのあとに塵などが殘りませんし、分子が細かいので機械の摩滅を早めるようなこともありません。そして、よいものほど無色に近く、さらさらした感じがいたします。注油をする部分は、圖に示しておきましたから

注油箇所

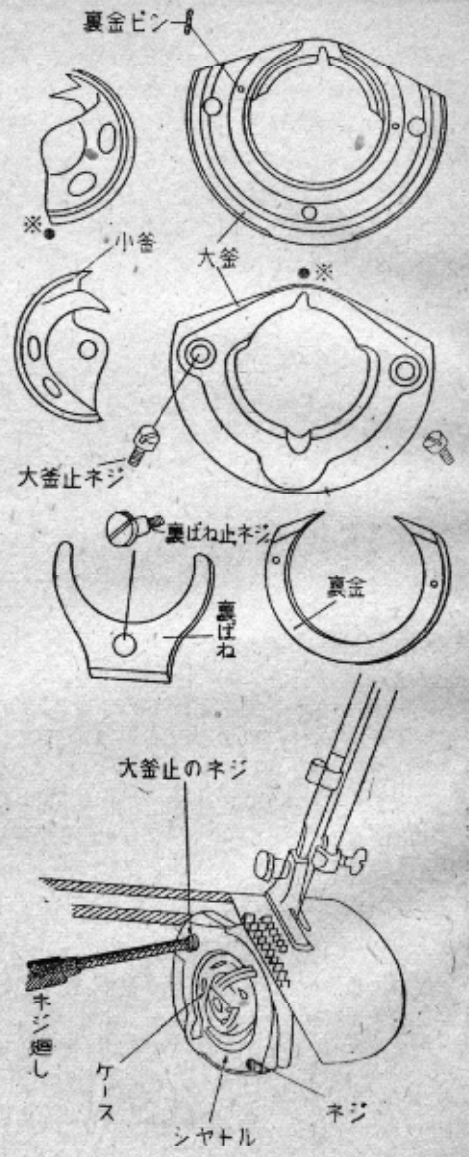


無駄のないように、一、二滴ずつたらしてください。頭の裏側へさすときは、ベルトを外して向うへ倒し、ハズミ車を動かしながら、摩擦部全部にさします。（ベルトはベルト外しのバネを左の方に向けて、足踏みすればすぐ外れます。こうして、ベルトは輪の外側にしておきますと、かけるときも順轉させれば自然にかゝります）脚部の方も、ミシンを運轉しながら摩擦部をみて注油いたします。

6・シャトルの分解掃除

お掃除の一番大切なところは、シャトルです。こゝに糸ゲバさまつたり布塵がたまつたりしますと、高い雑音がして、ミシンが重くなり、いろいろな故障の原因となります。なお、糊氣の濃厚あるものや、毛の散るようなものを縫つた後は、必ず、分解掃除をしてください。お釜を外すときはついでに送り金の部分も、ネヂを外して塵をとつておきます。お釜の取り外しは、十分氣をつけませんと、三日月の先端を傷め、縫目飛びや上糸切

れの故障をおこします。外し方は、頭部を倒し、針を上げて二本の大釜止めのネヂを外せば大釜と小釜が一緒にとれます。大釜の裏側に、裏ばね（三日月押え）で裏金（三日月）がつけてありますからこのネヂを外して、油雑布できれいに拭きます。掃除がすんで元通りに組立てる場合は、部分品番號が印されている方を外側にして、裏金をとりつけ小釜を入れます。小釜を入れるのには、先ず左手の人差指を心棒にあて、圖に示した※印の部分を合せて入れますと簡單にはいります。大釜と小釜が、組立てられましたら、元通りに取りつけますが、はずみ車を動かして何處にも當りのないように、きちんと入れなければなりません。ネヂを締める場合は、左右共、手でしまるところまでいれ、次にネヂ廻しで締めこみます。兩方平均に締めませんと、平らに入りませんから注意してください。なお、大釜の溝には、油をさして滑りをよくします。



7・運　轉　法

いよいよ縫方に入るわけですが、初心者はまず足踏みの練習から始めることにいたしましょう。

ミシンをかけるときの姿勢は、眼が針の正面に向う位置に、正しく足をそろえてかけます。それから右手で、はずみ車を手前へ廻し、運動を起した踏板に合せて、爪先と踵で交互に動かします。慣れないうちは、とかく逆廻りしやすく、本縫いをしても糸を切つたりしますから、十分練習の必要があります。

運轉を中止する場合は、天秤が一番上にあがつているときに止めます。この習慣をつけておきますと、本縫いに入つてからも、糸が針から抜けてしまうようなことはありません。

こうして、空縫いの練習が出來ましたら、試驗的な材料で、基礎練習をいたします。この場合、布地と針と糸との關係、および布地とミシン各部の釣合を、次にかゝげておきます表を參照して用意して下さい。

8・布地に對する針と糸および各部の釣合

布地に合つた正しい大きさの針と糸、そして糸目の長さ、すなわち針目の數を、研究することは大切なことです。手縫いでも、ミシン縫いでも適當な大きさの針と糸とを選べば、仕事は容易であり、その上美しく出來上るわけです。ですから、手元には、一通りの針と糸とは備えておくようにして下さい。そして仕事にかゝる前は、必ずこの表を參照することにいたしましょう。

（A）　目のつんだ厚地のものを手縫いするときは、あまり太い針は用いないことです。また細すぎますと、針折れがいたしますから、少し細目のものを選び、指ぬきをよく利用して、怪我のないようにして下さい。

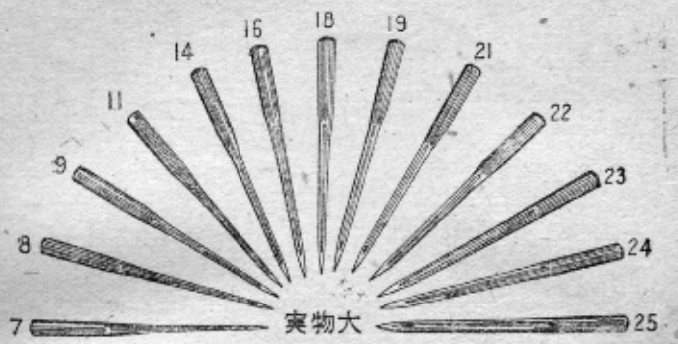
（B）　ごく薄地のものは、紙と一緒にして縫えば、すつと樂に縫えるのですが、紙が厚すぎますと後で紙をとり去るとき、糸まで切れてしまうおそれがありますから、新聞紙、ハトロン紙程度のものを用いて下さい。

9・基　礎　練　習

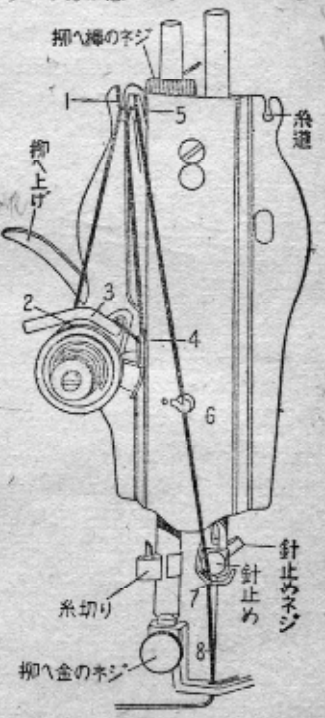
（A）　針のつけ方　はずみ車を手前に廻して、針棒が上にあがりきつた時止めて、針止めのネヂをゆるめ、ミシン針の面の平らな方を内側に向け針棒の溝にきちんと入れ、ネヂを固く締めます。丸針（工業用）の場合は針溝の長い方を外側にします。針をつけましたら、はずみ車をまわし、少

布地の種類	ミシン糸	ミシン針	針目数(1inch)	縫目調子	送り金高さ	押え力加減ネジ	かがり糸	ふちかがり糸	しつけ糸	穴	糸	しつけ(けい)糸
冬服外套等の厚ウール地	太目羽二重糸	11、14番	12	粗強目	1.7～2.5mm	強目	羽二重糸	メリケン8番	日本綿糸	穴	糸	メリケン7番
薄手ウール地、厚地綿物	中又は細目羽二重糸	9、11番	12～14	普通	1.2～1.5mm	中	羽二重糸	メリケン8番	日本綿糸	穴	糸	メリケン7番
薄ウール地、レーヨン、普通綿物	細目羽二重糸	9番	14	粗強目	0.8～1mm	粗強目	羽二重糸	メリケン9番	カタン糸80番ノ	糸通ノ	糸	メリケン7番
シイフオン、レース等薄地綿物	極細羽二重糸	9番	18	弱目	0.7～0.9mm	弱目	羽二重糸	メリケン9番	ノ	糸通	糸	メリケン8番
厚いふとん皮地、防水地、天鵞絨、ズック地、カンバス地	カタン糸20番	16番	10	強目	1.7～2.5mm	強目	カタン糸30番	メリケン7番	カタン糸50番	糸通	糸	メリケン6番
目のつんだ厚地	カタン糸30、50番	14番	10	粗強目	1.5～2mm	粗強目	カタン糸50番	メリケン8番	カタン糸50番 木綿糸	糸通	糸	メリケン7番
厚目の格子織、綾掛用の布地（比較的目のあらいもの）	カタン糸50番	14番	12	粗強目	1.7～2.5mm	粗強目	カタン糸50番	メリケン8番	カタン糸50番 木綿糸	糸通	糸	メリケン6番
一般の洋服木綿地（更紗、ギンガム、ポプリン、リンネル）	カタン糸50～80番	11番	14	普通	1.2～1.5mm	中	カタン糸50、80番 羽二重糸	メリケン7番	カタン糸80番 木綿糸	糸通	糸	メリケン7番
ボイル、オーガンジー等夏服用の薄地	カタン糸60～100番	9番	18～20	弱目	0.7mm後	弱目	カタン糸120番 羽二重糸	細くけい糸	木綿しつけ糸	糸通	糸	細くけい糸
レース、ネット地	カタン糸120番	9番	25	弱目	0.7～1.0位	弱目	細カタン糸60番	細くけい糸	木綿しつけ糸	糸通	糸	細くけい糸

しずつ針棒を下げ、喉板の針落穴の眞中に針が下りるかを調べます。少し



でも針落穴の周圍に觸れるのは、針のとりつけ方が悪いか、または針が悪いのです。近頃は、針の粗惡品が非常に多く、ミシンの故障は、針質によることが多いようですから、針を購入する際は、十分に注意いたしましょう。針の實物大を、圖に示しておきましたから、番號と大きさを覺えておかれると便利でしょう。針の標準全長は3糎、または3糎9粍、めど先の寸法は3粍ないし4粍とされています。



を購入する場合に注意しなければならないこと

（1）全長およびめど先の寸法が、正しいかどうか？

（2）針孔は、十分磨かれているか？

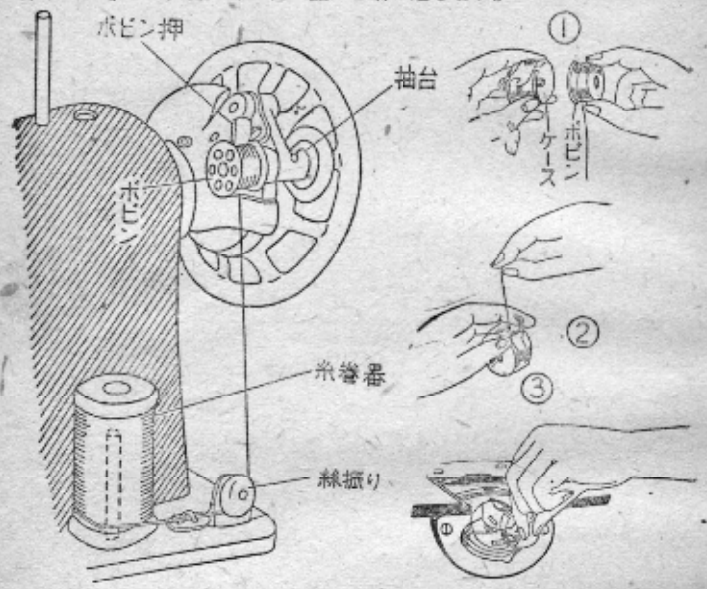
（3）平面部にまだらはないか？

（4）糸溝が淺すぎはしないか？

これらの點に落度がありますと、いずれも事故の原因となり、作業能率は半減、或は零となつてしまいます。

（B） **上糸のかけ方** 圖のように、糸巻きから出る糸は、（1）肩の糸道より、（2）調子皿の間に入れて、手前に

引出し、(3) 太い針の糸掛を通して、(4) スプリングの手鈎の中をくぐり、(5) 天秤の糸孔へ向う側から通し、(6) 面板の糸道の中を抜けて、(7) 糸棒糸掛に導かれ、(8) 針の孔に左から右へ通します。



(C) **下糸の捲き方** 下糸を捲く場合は、まず、はずみ車を左手でおさえて、外側の運動止めのネヂを手前に廻し、針棒の運動を止めておきます。糸巻きから引出した糸は、ボビンに上から下へと、四、五回手で捲き、糸捲器の軸棒にボビンを差し込み、一廻りさせますと、軸棒の凸部がボビンの凹部にかゝります。それをそのまゝ軸蓋を押し下げ、ミシンを運轉すれば、自然に糸振りが左右に運動して、平均に糸が捲かれます。糸が七、八分通り捲かれますと、自然に、ゴム輪がはずみ車から離れるようになつています。糸捲器具のない場合は、目打ちを利用してもよいでしょう。この際に氣をつけなければならないことは、平均に、そしてやゝ少な目に捲くということです。いつぱい捲きすぎますと、下糸切れの原因になりますから注意して下さい。

下糸が捲けましたら、ケースにボビンを入れます。

(1) 圖のように右手にボビンの糸端が、上から摘めるように摘み、左手にケースをもつて、ボビンをはめこみます。

(2) そして、ケースの切込みから、調子バネの下をくぐらせて、ケースの孔から下糸を引き出します。

(3) 次は、シヤトルへケースを入れます。ケースの中央のバネを起こして、ケースを下向きにしてもボビンが落ちないように、左手で摘み、針棒を高く上げて、强く奥へ入れてからバネをはなします。はずみ車を動かしても落ちないように、きちんと入りましたら、下糸は垂らしたまゝにして上り板を閉じます。下糸を上へ引き出すには、左手で上糸をもち、右手ではずみ車を一回轉しますと、下糸が上糸に引つかけられ、上糸と一緒に喉板の孔から出ます。上に出た下糸は、押え金の二叉の間を通して、向う側へ摘えます。糸の用意が出來ましたら、各部すなわち押え金の加減、スプリングの彈力、上糸と下糸の調子、および針目などの具合をよく調べます。

(D) **縫目の調子** 縫目の調子は圖に示しました。

(1) 完全な縫目で、上糸と下糸との交叉が、布の厚みの中間で行われています。

完全な縫目

(2) 上糸の調子がきつすぎる場合ですから、上糸加減ネヂを左に廻してゆるめます。

不完全な縫目

(3) 下糸の調子が强すぎるのですから、上糸加減ネヂを右に廻して、上糸を强くしてみます。これでもまだ直らないときは、ケースの糸調子ネヂをゆるめて下さい。

不完全な縫目

なお、押え金は、厚地ものの場合はきつく、薄地ものの時は、少しゆるめにいたします。

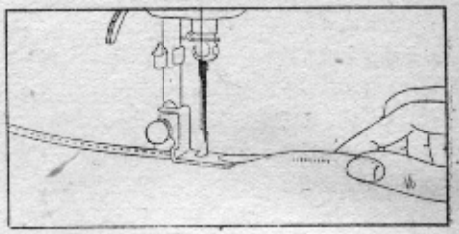
(E) **縫方練習** 調節がすみましたら、布地に直線を引き、この上を正しく縫つてゆく練習をいたします。これが十分のみこめたら、こんどは線を引かずに、眞直ぐに縫つてゆく練習をして下さい。この場合、押え金の巾を利用するとよいでしよう。

次に、直角に曲る練習をするのですが、曲ろうとするところで、必ず針を布にさしておきます。そして押え金を上げ、布を動かして方向を變えます。こうすれば、簡單に直角をあらわすことが出來ます。

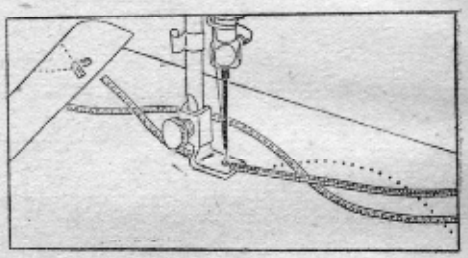
その次は、曲線縫いの練習をします。この要領はなかなかむずかしいものですから、十分練習して、足踏みの早さと布の動かし具合をよくのみこ

んで下さい。こゝまでが、第一段階です。この後は、練習次第で、思いのまゝの線が自由に縫えるようになるでしょう。

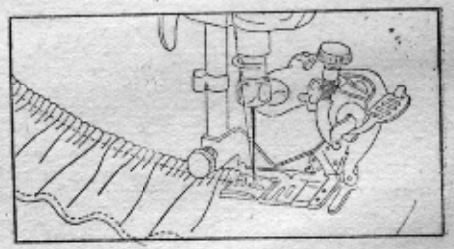
さて、第二段階の練習は、布を二、三枚重ねて縫う練習をします。この場合、送り金と押え金のために、針の進むにつれて、上側の布が手前にずれてきますから、下側の布を心持ち引き加減にして縫うとよろしいでしょう。このほか、地質を變えて、それぞれの布地による調節具合の要領をのみこんでください。



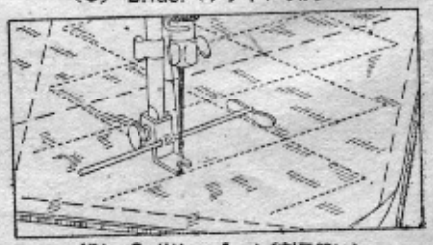
(A) Hemar（三つ巻き）



(B) Gathering foot（ひだよせ）



(C) Brider（ブライドづけ）

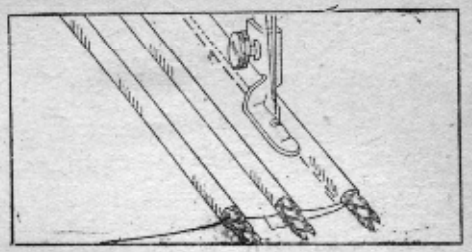


(D) Quilting foot（刺子縫い）

10・附屬器具

最近は、ミシンも大へん進歩して、機械の構造などにいろいろ改良工夫がなされて種々の附屬器具などがついております。現在あるものでは（A）Hemer（三つ巻き）（B）Gathering foot（ひだよせ）（C）Brider（ブライドづけ）（D）Quilting foot,（E）Cording foot などでしょう。

これらのものは、みな簡單に取り換えられ、仕事が容易にしかもきれいに出來ますから、最大限に利用することです。手をはぶいたりしては、決して美しい出來上りを望めるものではありません。



(E) Cording toof（紐づけ）

第4章　寸法の計り方

どんなにすばらしいデザインであつても、着ている人の身體によく合つていなければ、決して美しい服とはいわれません。締まるべきところはきちつと締め、しかも適度の餘裕をもつた服、こういう理想的な服を仕立て上げるには、なにより正確に計つた寸法というものが、一番の基礎になるのです。正確な寸法は、常に一定でなければならないので、計る度ごとに違つてくるようでは、いけないのです。計る時には氣取らず、ごく自然なポーズで計ることが大切です。

1・計る順序とその要領

（1）　胸圍（BUST）　兩手は下げ、お乳のちようど上を計ります。始めぎゆつと締めて、手をゆるめ、もどつたところを計るのです。

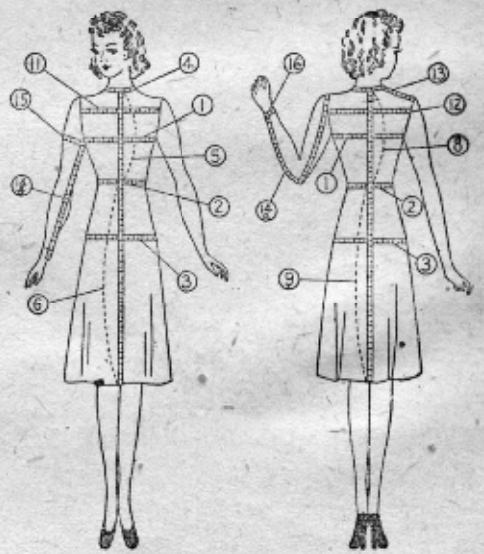
（2）　胴圍（WAST）（1）の場合より少し締めぎみにして計ります。

（3）　腰圍（HIP）　腰の一番出張つたところを、すこしゆるめにして計ります。

（4）　頸圍（NEKC）頸のつけ根を一廻りして計ります。

（5）　ブラウス前中心線（BLOUSE CENTER FRONT）頸のつけ根からウエストライン（胴圍を計つた線）までを計ります。これが即ち背丈です。

（6）　スカート前中心線（SKIRT CENTER FRONT）ウエストラインから、自分の希望するスカート丈を計るのです。この時、床から裾の線までも計つておいて下さい。



（7）　前中心全線即ち(5)と(6)の合計（TOTAL FRONT LENGTH）

（8）　ブラウス後中心線（BLOUSE CENTER BACK）(5)の場合と同様、後の頸つけ根からウエストラインまでを計ります。

（9）　スカート後中心線（SKIRT CENTER BACK）

（10）　後中心全線（TOTAL BACK LENGTH）

（11）　胸幅（WIDTH OF CHEST）　腕のつけ根からつけ根まで、一番廣いところを計ります。製圖上の胸幅は、これに一割くらいのゆとりをとります。

（12）　背幅（WIDTH ACROSS BACK）後の腕つけ根からつけ根までを計り（11）と同様一割くらいのゆとりをとつて製圖上の背幅とします。

（13）　肩幅（LENGTH OF SHOULDER）頸のつけ根から、肩の尖端までを計ります。

（14）　袖丈（SLEEVE）

（a）　外側（Outer length）　腕を輕く曲げて、肩尖端から肘を通つて手頸まで。

2・標準寸法とメヂヤーテーブル

Name _____　　*age* _____

1	BUST	86	12	WIDTH ACROSS BACK	34
2	WAST	70	13	LENGTH OF SHOULDER	12.5
3	HIP	96	14(a)	SLEEVE outer（肩尖より肘まで）	34.5
4	NECK	38		（肘より手頸まで）	22.5
5	BLOUSE CENTER FRONT	34		全　長	57
6	SKIRT CENTER FRONT	35	14(b)	SLEEVE inner（腋下2糎より肘まで）	23.5
7	TOTAL FRONT LENGTH	99		（肘より手頸まで）	22.5
8	BLOUSE CENTER BACK	38		全　長	46
9	SKIRT CENTER BACK	65	15	AROUND UPPER ARM	28
10	TOTAL BACK LENGTH	103	16	AROUND WRIST	15
11	WIDTH OF CHEST	35			

（b）　內側（Inner length）腕をのばして、つけ根（腋下）2糎下より手頸まで。

大妻圖

(15) 腕廻り (AROUND UPPER ARM) 腕を下して、つけ根より少し下のあたりを計ります。パフ・スリーブの場合など、長さに應じて必要なところを計るのです。

(16) 手頸廻り (AROUND WRIST) 手頸の骨のところを計ります。

★寸法は、糎を單位にいたします。以上の計り方はアメリカの專門家が用いている計り方と、その順序です。一應、知つておいていたゞいた方がよいと思いましたので、名稱など英語の方も書いてみました。計り終りましたら、このような表を作り書きこんでおかれるのがよいと思います。

第5章 補正法 (其の一)

原型

原型は、その人の寸法を計り、それを割り出して製圖いたしますから、だいたいは體にあつているものですが、なお一層、正確を期するために、一應しらべてみる必要があります。そして原型は、どんなスタイルの洋服にしても、下着を作る場合でも、デザインの基礎になる最も大切なものですから、愼重に補正して下さい。

あなたが、ご自分の原型を作る場合には、まず普通のハトロン紙のような紙で作り、それを補正して後、厚紙に寫し、ていねいにお使いになればデザインの度に、製圖する手數がはぶけて便利です。

近頃は、ブラウス、ドレス、ジヤケットなど、ほとんど肩臺が用いられておりますが、肩臺を使われる場合は、肩の上から合わすことを忘れてはなりません。

1・原型の肩があなたの肩より外に出た場合

(1) 原型に接ぎ代を加えて裁ち、前身頃と後身頃の肩と脇を綴じて、平身の原型を體に合わせます。この場合肩幅が胸幅にくらべてせまい場合は、圖にみられるような皺が出來、袖刳上部は肩先より外に出ますから、第2圖以下に示したような方法で、調整してゆかなければなりません。

(2) 袖刳の中央を横に5粍切りこみ、こゝから肩幅の1/2のところまで、斜めに切り開き、下に厚紙を置いて、ピンで止めます。

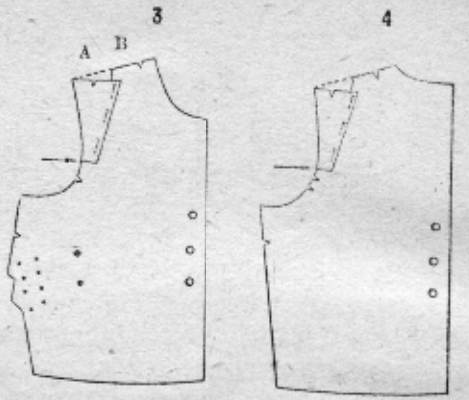
(3) 次に矢印で示した角の頂點を軸にして、袖口の内側へ必要なだけ(肩先さに出た

1

2

分）廻し、位置をきめてから、ピンで止め、動かないようにします。最後にAとBとを結んで、肩の線を引きなおします。

（4） 原型の後身頃も、前身頃と同じだけ動かしてピンで止め、肩の線を訂正します。



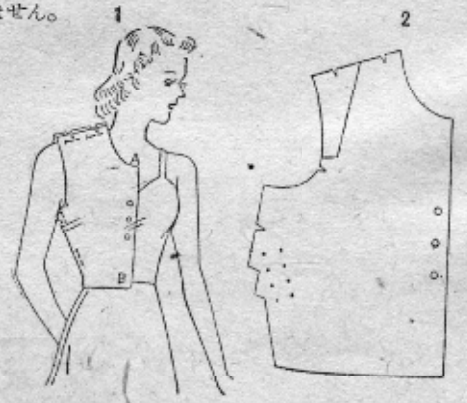
2・原型の肩があなたの肩より狭い場合

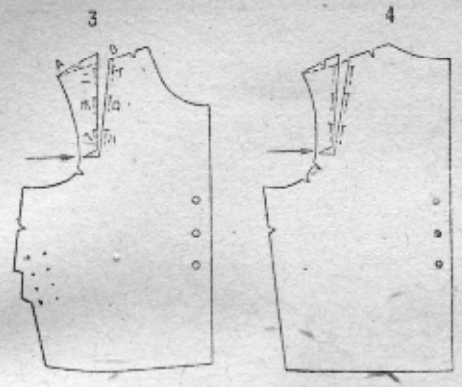
（1） 胸幅にくらべて肩幅が狭い場合は、型紙の前中心線を、身體の中心に合わせますと、肩の尖端は圖のように出てしまいます。

（2） この場合も、袖刳の外側から切りこみを入れ、肩の中央へ斜めに切り開きます。型紙は厚紙の上にのせて、先にイ、ロ、ハの部分だけピンで止めます。

（3） 矢印で示した角を軸にして、上部を開きながら、必要なだけ外側へ廻し、ニ、ホ、ヘの部分をピンで厚紙に止めます。そして肩の線を引き直し、A、B線外に出た部分を切りとります。

（4） 肩幅を同じにするために、後身頃も前身頃と同じだけ、開かなければなりません。





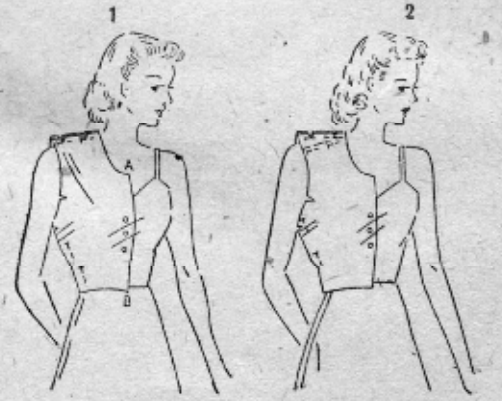
3・肩先きより前中心線へ皺が出來た場合

（1） 肩が張つている場合、前中心線を身體の中心におきますと、圖のような皺が出來ますから、第二圖以下に示したように調整しなければなりません。

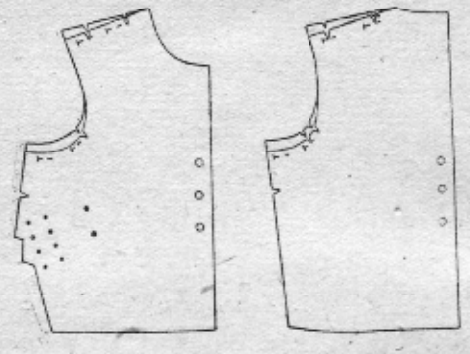
（2） 肩の合わせ目のところへ適當に紙を足して、肩の線を上げ、袖刳をゆるめます。

（3） 圖に示してありますように、袖刳の下部も同じだけ足します。そうしませんと、袖刳が大きくなりすぎるからです。

（4） 後身頃も前身頃のように、調整いたします。もし袖刳を大きくする必要がありましたら、袖下に補足する部分を加減して下さい。



3　　4



4・袖刳にゆるみが出來て首へむかつて皺のよる場合

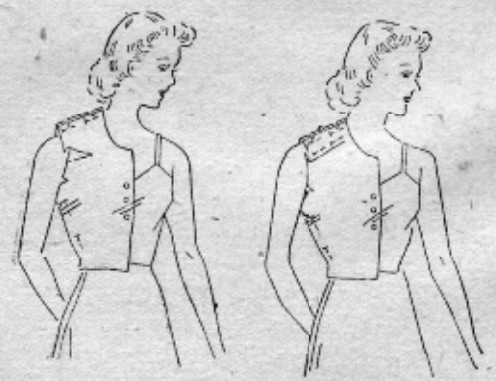
（1） 特になで肩の人ですと、原型は圖のように、袖刳にゆるみが出來ます。この調整は簡單に出來ます。

（2） 肩からほぼ袖刳の 1/3 位下つたところで、首の方へ向つてだんだん淺く、ダーツを取つてみます。若し袖刳が少しきつくなるようでしたら胸幅の位置から脇下に向つて、ほんの少し切り下げます。

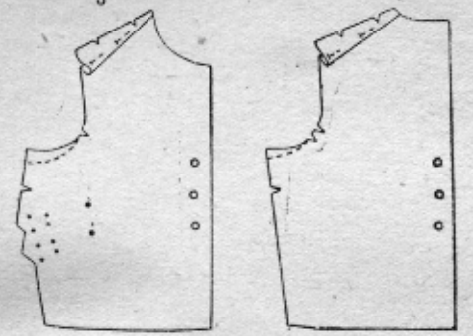
（3） 肩の線に從つて、袖刳を調整いたします。

（4） 後身頃も、前と同じだけ直します。以上のように補正しますと、

1　　2



3　　4



袖刳は大きくなりますから、袖の方の袖附廻りも、大きくしなければなりません。

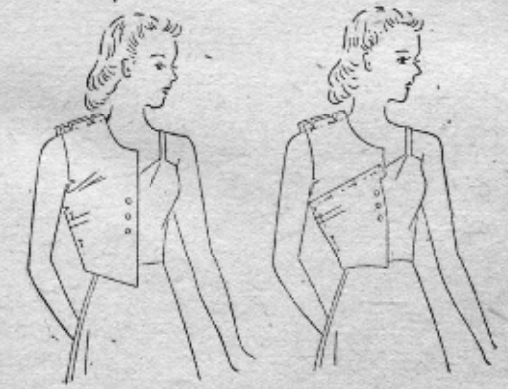
5・原型が前下りになる場合

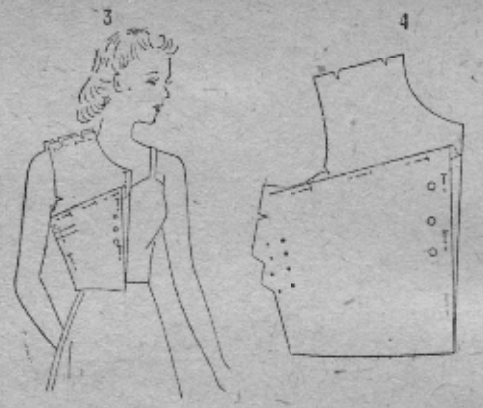
（1） 胸のふくらみが、比較的少ない人は、原型が圖のように前が下ります。

（2） 袖下をほどいて、胸の一番高いところを通る線上に、ダーツをとります。

（3） これでも前が下るようでしたら、ウエストの上で、脇から前中心の方へ少しづつ增して、ダーツを取り、ピンで止めます。

1　　2



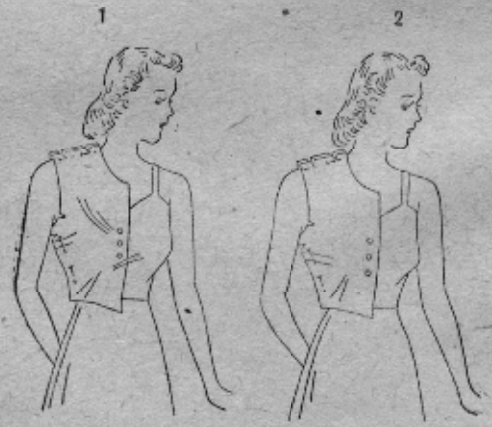


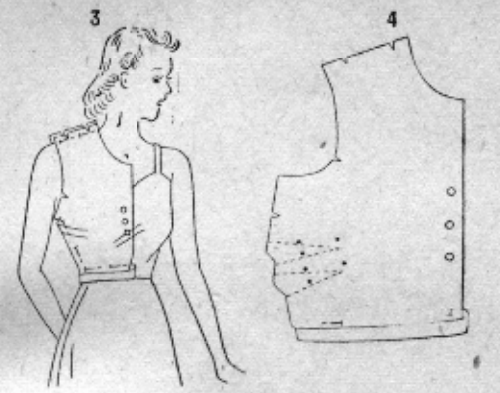
（4） これは脇下と、ウエストラインの上で取つた、ダーツの位置を示しております。

6・脇下に皺が出來て前がずつと下る場合

（1） 胸が扁平な人は、圖にみられるような皺が出來て、原型は前がぐつと下つてしまいます。このような場合は、前身頃を次のように調整して下さい。

（2）、（3） この皺は、脇下からだんだん多くして、斜めにダーツを取ればなくなります。このようなダーツをとつたときは、前中心線を眞直ぐ





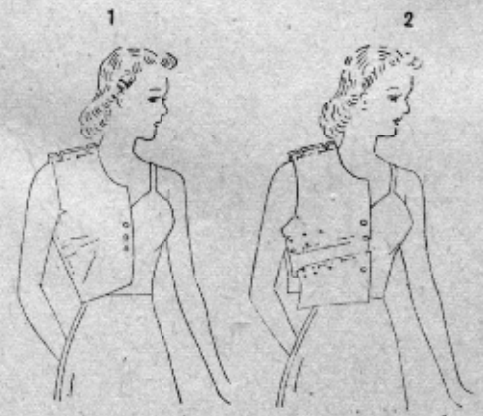
に、引き直さなければなりません。

（4） これは修整された原型を示しました。

7・原型がウエストラインの中央で引つぱり上げられる場合

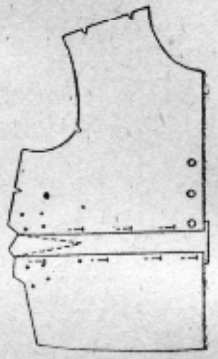
（1） お乳が大きく、とくに胸の高い人は、胸齊をとつても、原型は圖のように、前上りになります。

（2） 袖下のピンをとつて、原型をはずし、バストラインを横に切り開きます。こゝに紙を足して、ウエストラインがウエストに、ぴつたり合うようにします。



3

4



（3） 出來ましたら、補下を再び止めるのですが、このときダーツを一つ增しておきます。このふやされたダーツによつて、乳の部分にゆとりがつくわけです。

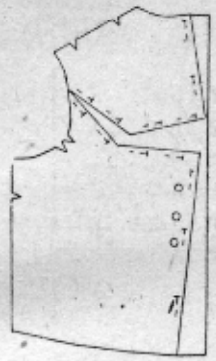
（4） この圖は、修整された前身頃および新しく作るダーツの位置を示したものです。この場合、部分的に極端なふくらみが、出來るようでしたら、肩にとつてもよろしいのです。

以上の、5、6、7 の三つの補正は前身頃だけでよろしい場合です。

1

2

3



4

8・後身頃の補正法

（1） 肩胛骨の出た背の丸い人は、後身頃の原型が、圖のように後中心が上り、皺が出ます。これを補正するには、丈と幅を足さなければなりません。

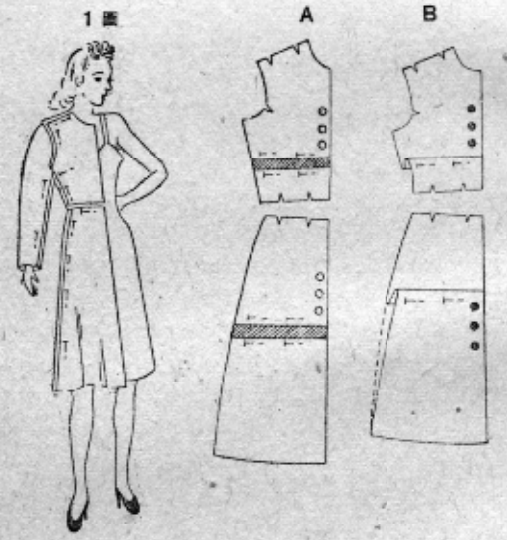
（2） 圖のように切り開き、後衿刳とウエストに出來るゆるみは、ダーツで取り去つて下さい。

（3）、（4） 補正された原型は、圖のようになります。首廻りと腰廻りのゆるみは、小さなダーツを澤山とり、胴廻りにもギャザー又はダーツをとつて、調整するのもよいでしよう。

第6章　既成型紙の應用法

近頃は、いろいろな婦人雜誌に、標準寸法によつて、割り出された型紙がついておりますから、ここでそれを使用して、あなたが洋服を作られるときの補正法を、のべてみることにいたしましよう。

まず型紙は良質の軟かい紙に寫し、それに接ぎ代を加えて切り取り、そしてピンで接ぎ合せ身體につけてみますと、調整しなければならない個所がよくわかりますから、これから說明する方法によつて直してゆきます。



1 圖・ブラウスやスカート丈を調整するには

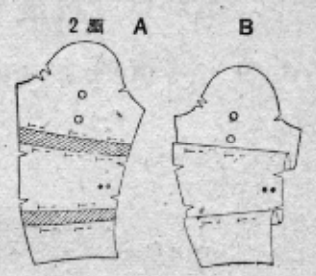
（A）まず長くする場合、ブラウスはウエストラインの上5糎～7糎のところを切つて、必要なだけ開いて間に紙を足します。スカートの場合はウエストラインとヘムラインの中間を切り、必要な長さの半分だけ足してあとの半分は裾の方へ足すのです。

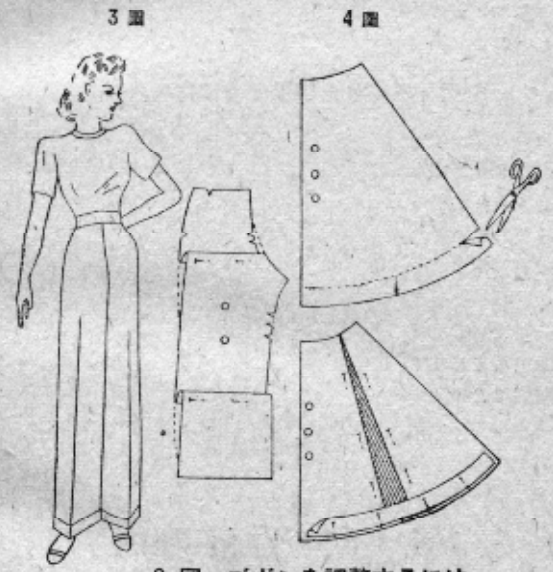
（B）短くするには、長くする場合と同じ個所に、タックをとればよいのです。スカートでは、やはり眞中で、不要な分の半分だけタックを取りあとの半分は裾で切りすてます。

2 圖・袖丈を調整するには

（A）封線から上下各〻中央部を切つて、必要な長さだけ足します。

（B）短くするには、同じ個所に、タックを取ればよいのです。





3 圖・ズボンを調整するには

短くするには股上の中央と、膝の部分とにタックを取り、長くするにはそこへ適當に足すのです。

4 圖・サーキュラー・スカートを短くするには

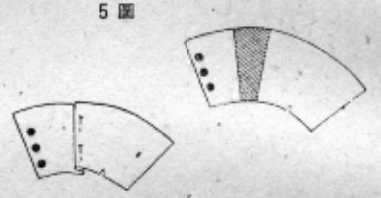
裾を必要な分だけ切り取り、次に圖に示したように、中央をウエストラインのすぐ下まで切りこみ、前に切り取つた紙を、裾の部分にあて、この

長さだけ開くのです。この場合胴廻りの長さは、そのまゝにしておくことに注意して下さい。長くする場合は、單に裾に必要な分だけ足せばよいのですから簡單です。

5 圖・カラーを調整するには

ネックラインの長さを變えれば、カラーもこれに合わさなければなりません。大きくするには、後中心より1/3前によつたところを切り開き、必要なだけ足します。縮める場合には、同じところへタックをとればよろしいのです。

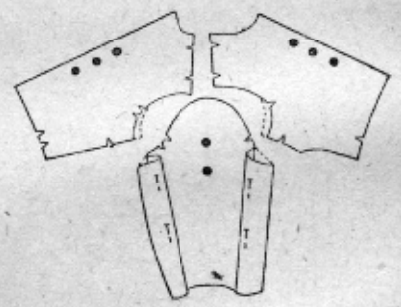
5 圖



6 圖・袖刳りを調整するには

腕のごく細い人は、袖刳を縮めなければなりませんが、この場合ゆるみすぎる分だけつまんでおき、そのままはずして、袖刳寸法をはかり直し、再び袖を製圖するのが、一番よい方法ですが、簡單な方法としては前後の袖の縫目で、半分ずつタックを取り、身頃の袖刳には、袖で取つたゞけ足すのです。

6 圖



7 圖・袖を大きくするには

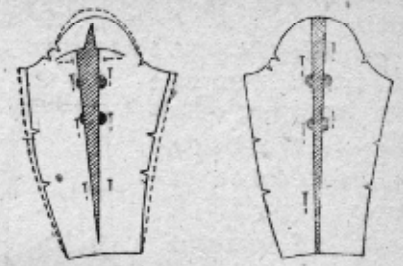
（A） 袖の型紙は、普通身頃の型紙の、袖刳寸法から割出して製圖するもので、その袖刳寸法は實際に腕附廻りを計つて、4 糎ほどゆるみを加えておくのですが、もしも足りなければ、袖山の中央から、眞直ぐ下に切つて、手首のところはそのまゝにして、袖刳を必要なだけ開いて、間に紙を足します。

（B） 又は圖のように、端をそれぞれ5粍ほどずつ殘して、中央部を切り開き、はじめに元の型を寫して、中央の線をしるしておきます。次に袖

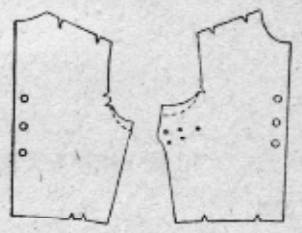
丈線のところで、中央の線から左右へ等しく、必要なだけ開きます。この場合、袖山のところがつれて、もちあがつてきますから、タックをとつて落着かせておきます。そしてこの型を寫し、袖山のところで元の線へ、自然にむすんでおきます。

（C） 以上のようにして袖を大きくした場合は、身頃の袖刳も、袖に足しただけ切り取つて、調節することを忘れないで下さい。

7 圖 A B



C



8 圖

8 圖・ウエストラインとヒップラインを大きくするには

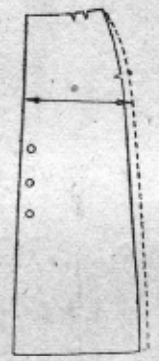
この場合は、圖のように袖刳の一番深いところを、裾まで眞直ぐに切り開き、必要なだけ開いて、間に紙を足します。

9 圖・ヒップラインだけを大きくする場合

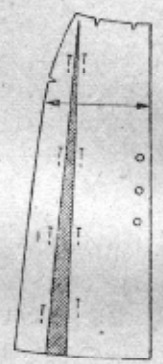
（A） 脇線を出してひろくする場合はヒップのところへ必要なだけ足して、この幅を、そのまゝ裾までもつてゆきます。ウエストラインは、元の線につくように、だんだん少なくしてゆきます。

（B） もう一つの方法は、裾からウエストまで$\frac{W}{4}$巾のところを切りこみ、ヒップのところで、必要なだけひろげます。

9圖 A



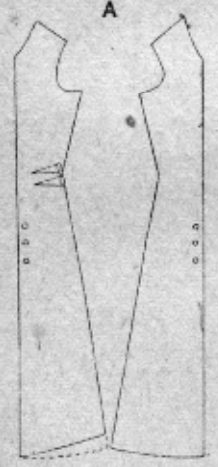
B



10 圖・腹部を大きくするには

10圖

A



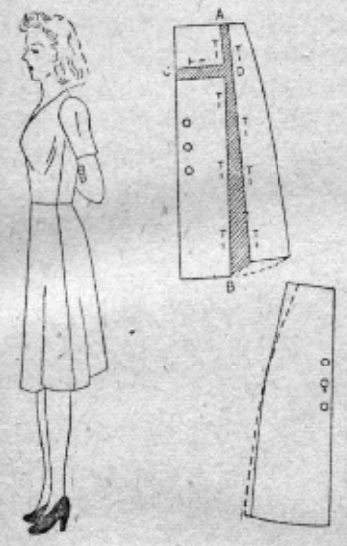
B

（A） バイヤスで裁つときは別として、腹部には普通4糎～5糎のゆるみを入れて、製圖するのですが、もしもきつかつた場合は、ウエストラインに、切換えのないワンピースでしたら、ウエストラインより、2糎位上のところで、脇の縫目が眞直ぐ下るように、十分なダーツをとり、このダーツ分を裾に足して、裾線が水平になるように、訂正いたします。

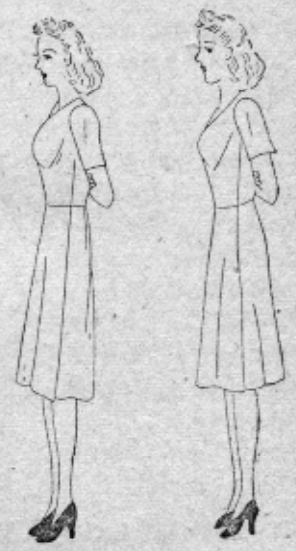
（B） ウエストラインに、切りかえのあるワンピースやツーピースでは

點線で示してあるように、前のウエストラインで、必要な長さの半分を下げ、スカートの裾前に半分足します。

11 圖



12 圖



11 圖・ヒップサイズを大きくするには

圖のように、縦にA～Bへ切りこみを入れ、次にヒップラインをC～Dと切り開き、間に紙を足します。そして元のウエストラインと、訂正したヒップラインとを結び、この線を裾の方へ延長しておき、必要な裾巾をしるしして、ウエストラインから裾まで、自然の曲線で仕上げます。

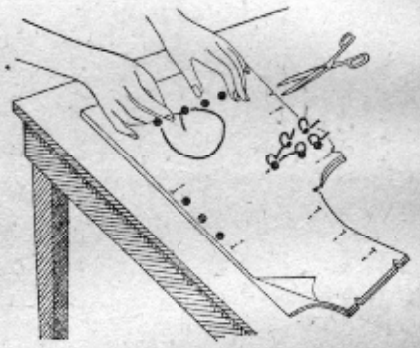
12 圖・スカートが前下りになるのは

圖の右のように、スカートが前の方へ引つぱられるようでしたら、脇の縫目が眞直ぐ下るまで、後中央を上げればよいのです。

第7章　型紙のマークを布地へ轉寫する方法

しるしをつけるには、簡單な方法がいろいろありますが、布地にかなつた、そしてあなたのやりやすい方法を、お選びになつて下さい。これにはゆき屆いた注意と、正確さとが大切です。鮮明なマークをしるしておくことは、ダーツ、ポケット及びボタンの位置、その他細かい部分が、全體的に調和のとれたもので、あるかどうかを見るのに、好都合であり、また仕事にかゝつて、無駄な時間がはぶけます。色チョークは、三種類も揃えておけばあらゆる場合に間に合います。ただし、よりの強い糸で織つた、サージのような布地は、チョークがなかなか消えませんから、しるしをつけるときに、注意しなければなりません。

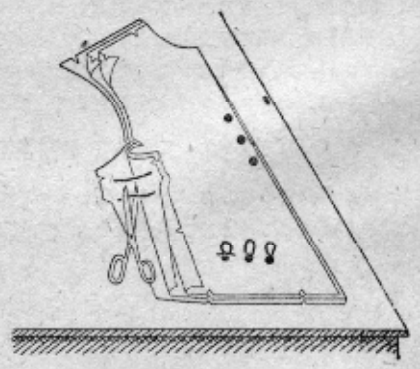
1圖



1～2圖・切りしつけによる方法

これはヘラ、ルレットなどのきかない毛織物のしるし附けに用いられる方法です。まず用布を中表に重ねて、縫代分を加えてチョークでしるしをつけ、布を裁ち切ります。型紙は、全部しるしをつけてしまつてから、取り去るのです。はじめ原型通り輪郭をしるします。しつけ糸は二重にして、曲り角とか、曲線のような個所は小針に、脇や裾など

2圖



直線的なところには、間隔荒あけて、すくう針目は3粍ほどにして、しつけをかけます。

次にポケット、ダーツ及びボタン穴など、要所要所に、マークをつけます。これも型紙のしるしの穴より重ねてある二枚の布地を小さくすくい、輪を殘して糸を切ります。この輪は二枚の布を開いて、糸を切るときの餘ゆうですから、布地の厚さによつて、適宜に大きさを加減して下さい。

全部の穴に、このテーラーズ・タックが仕終りましたら、縫目の中央を切り、次に上側の布を左手で少し持ち上げ、第2圖のように間の糸を切ります。糸端が長いと、しつけがとれやすいですから、短く切り落して、糸の上をかるく手でたゝいて、糸と布とをなじませておきます。またアイロンをかけておくのもよいと思います。

3圖・(A)　ルレットを用いる場合

ルレットを用いるのは、綿地の場合に限られております。絹ものなどに用いますと、布を傷めますから、使用しないようにして下さい。

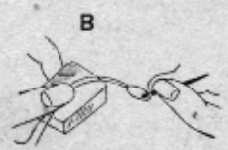
(B)　マグネシヤ・チョークを用いる場合

これは、現在あまり見受けませんが、このマグネシヤ・チョークを用いる、ごく簡單な方法を一つご紹介いたしましよう。

しつけ糸をマグネシヤ・チョークの上へ、圖のように親指でおさえて通し、糸に色をつけます。これで穴から一針縫いますと、一度に二枚の布へ、しるしがつくといつた方法です。

3圖　A

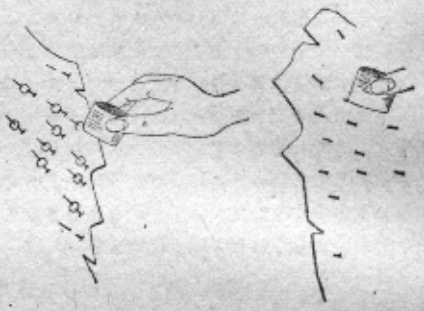
B



4 圖・チョークを用いる場合

輪郭線を引くのは、とくにむずかしいことはありませんが、型紙内のマークを轉寫するときは、まず穴から、ピンで縫い止めいたします。そしてピンの上から、チョークでマークし、裏返して同様にマークしますと、兩方の布にしるしがつきますから、ピンを抜き取ります。

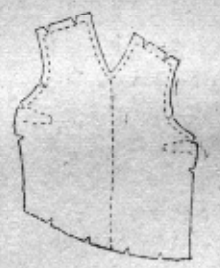
4圖 (表) (裏)



5 圖・しるしをつけ終つたときは

以上のような方法（第1圖〜第4圖）で、しるしがつきましたら、型紙を取り去つて、前後の中心線と袖割、衿割その他曲線部のバイヤスエッヂには、一枚ずつ假縫いを、ほどこしておきます。

5圖

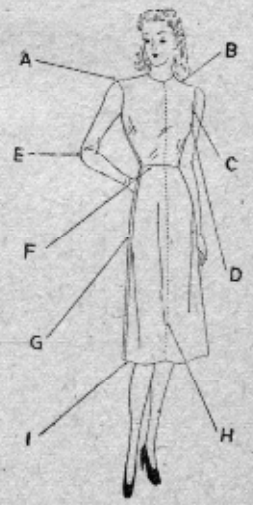


第8章　身體に合つた服を作るには

一般に洋裁をする人が、きつすぎもせず、ゆるすぎもしないで、身體によく合つた服を、作り上げるということは、なかなか容易なことではありません。これは身體に合わせる專門家の所謂コツといつたものが、一般の人には知られていないからなのです。それで皆さんが、どんな點に注意すればよろしいかを、圖に示してみることにしました。

これらの諸點は、特殊な型の服をのぞいて、大ていの服に、あてはまるごく基本的なものばかりです。服が身體に合つたものでなければならないことは、いうまでもありません。そこで身體の均整がとれている人ならばそれでよいとしても、普通身體の缺點を十分に補つて、その人の個性を、生かさなくてはなりません。又どんなふうに身體を動かしても、無理がゆかず、眞直ぐに立つた場合、どこにも皺が、出ないようでなければなりません。

もしあなたの身體が、標準型と大きな距りがあつて、均整がとれていない場合、貴重な布地を、無駄にしないためにも、いきなり上等な布地で始めずに、更生生地で、平常着として、一度試驗的に、身體に合つたものを、作つてみるのもよい方法だと思います。



まず身體に合わせて製圖した型紙は（補正法・其の一）をよく勉强して、その上で檢討して下さい。これを基本にして、作り上げた服は、假縫いのあと着てみて（補正法・其の二）を參照しながら補正します。この場合下着は、その服にふさわしいものを、正しく着ることが大切です。そして肩や脇の明きを綴じて、自然の姿勢で、全身の映るような、鏡の前に立つてみます。

★假縫いの場合、本縫いに必要な縫代だけつけて裁つてしまいますと、補正したい場合に不足することがありますから、餘分の縫

代をとつておかなければなりません。次に圖について、説明いたします。

（A） 袖山は、肩の先端にピツタリと、つかなければなりません。そして腕を下げたときには、袖も眞直ぐに下り；布目は直線になるわけであります。

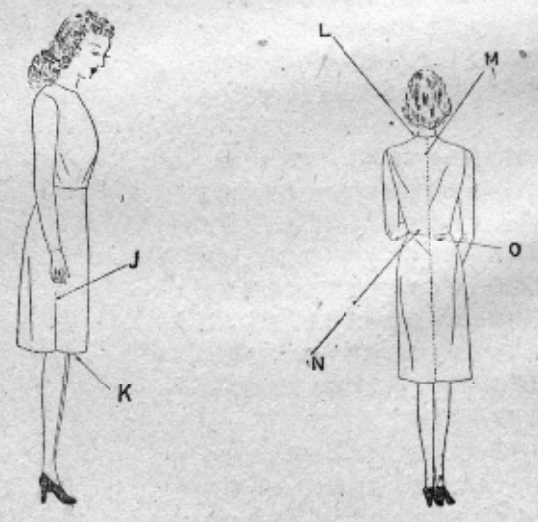
（B） 肩の縫目は、肩端の中央から首にかけて、直線となりますが、これはその人の型（なで肩、怒り肩及び肥滿）により、少しずつ位置が變ります。

（C） 袖下は、腋下にピツタリと、つかねばなりません。袖刳を大きくしすぎますと、腕を十分上げられなくなります。

（D） 胸のふくらみは、柔かな線を描くようにするのです。これはなかなかむずかしく、ゆるすぎても、きつく張りすぎても、見苦しいものになりますから、注意いたしましよう。胸の線は、ドレスの生命でありますから、「乳型」を使用するときにも、この點に、よく氣をつけなければなりません。

（E） 肘のところは、腕を曲げてみて、なほ輕いゆるみが、上膊部に殘るようにしておかなくてはなりません。ダーツをとる場合も、この點に注意いたしましよう。

（F） 型紙の上に、しるしされたウエストラインは、腰骨の上にきつち



りとこなければいけません。

（G） ヒップの廻りも腰かけて無理のゆかないように、十分なといつても多すぎないように、ゆとりをもたせておきます。

（H） 服の正面の中心線は、バイヤスの場合をのぞいて、布目を平行させて、直線を描くようにして下さい。

（I） 裾の線は、特殊な型の服は別として、前後水平な線を保たねばなりません。

（J） 脇の縫目は、袖下の中央から、裾にかけて、垂直に正しく、前後の中間にあるかどうかをしらべてみます。

（K） 次に横向きになつてみて、裾の線が、前後水平になつているか、どうかも、しらべてみた方がよいでしよう。

（L） 後衿刳は、首にきつちりと、合つていますか、よく見て下さい。

（M） 背中の線は、前にかゞんでみて、きつくないように、そして直立した場合、皺の出來ないようにして下さい。

（N） ブラウスの丈は、ウエストラインの、長短によつて調節し、デザインその他各部とのバランスをとつて下さい。

（O） スカートの、後ウエスト線の下に、横皺が出來ていないかどうかをしらべて下さい。

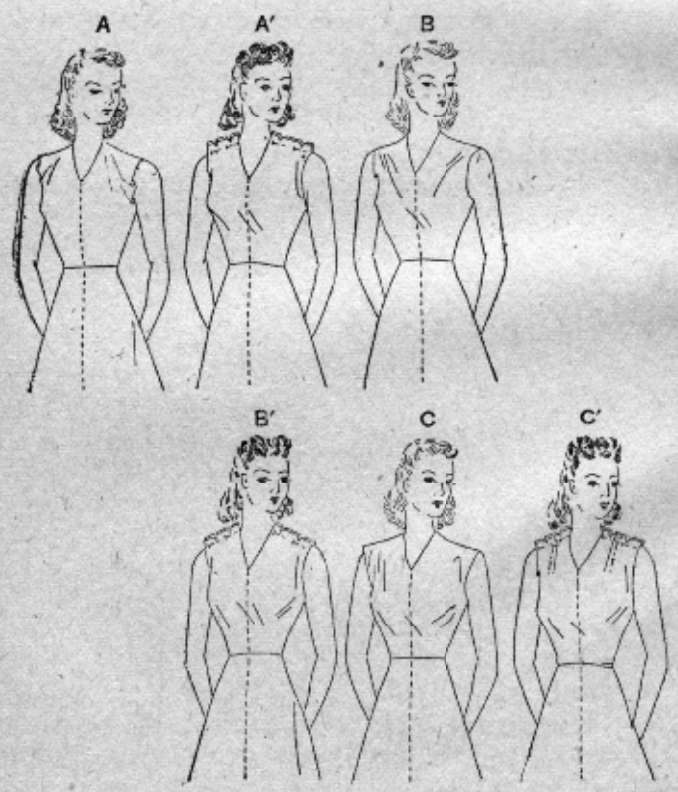
第9章　補　正　法（其の二）

假　縫

この補正の成否は、直接出來上りに、大きな影響を、及ぼすものですから、いろいろな角度から、慎重に檢討なさることを、望みます。修整は大體次のような順序で行います。

（1）　まずダーツの具合をしらべて、それが必要なら、縫糸を拔いて取り直し、ピンで止めておきます。

（2）　次に手の平で、肩から胸へなぜながら、肩の工合をみます。ゆる



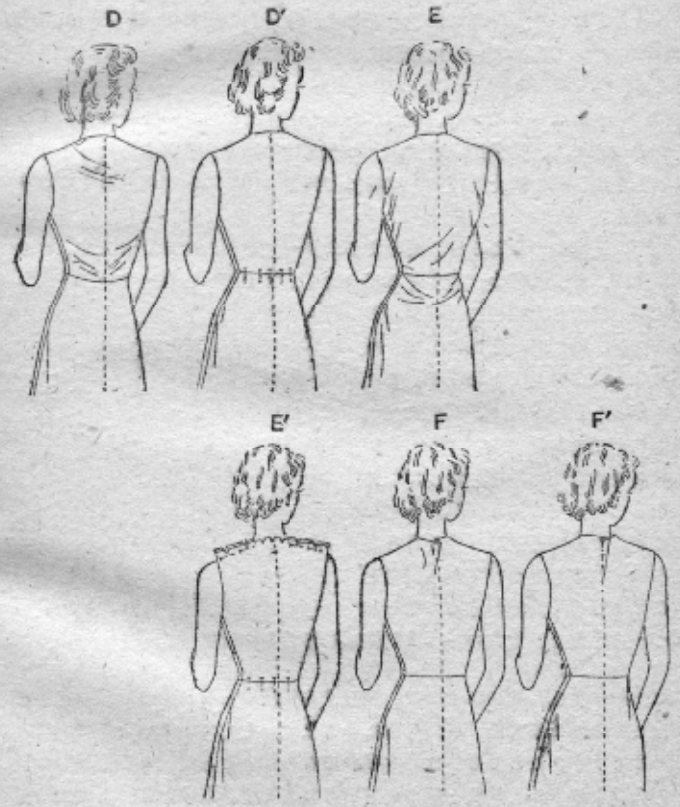
すぎてはいけませんが、適當なゆとりは、取つておく方がよいのです。

（3）　それから、腋下の工合をしらべます。

（4）　以上三つの修整が終りましたら、ネックラインが、ゆるすぎないか、あるいはきつすぎたり、高すぎるようなことはないかをしらべます。あまりゆるすぎるようでしたら、後衿刳の中央に、ダーツもしくはタックを取り、きついようでしたら、縫代を開きます。

（5）　最後に袖刳および袖の修整をいたします。

次に圖について説明いたします。



（A）　襟が首から腋下へ、圖のように出來た場合は、肩上を適當に上げピンでとめて縫目をほどき、假縫いをやりなおします。このとき袖刳も縫

りますから、袖の修整をいたします。

（B） 肩先きから前中心の方へ、縫が出來た場合は、（A）のときと反對に、首から肩の方へ、だんだん少なくして、縫い直せば修整出來ます。

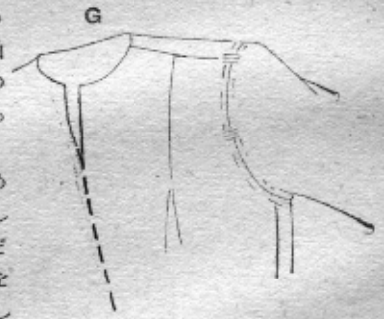
（C） 肩の線が長すぎる場合は、圖のように、ダーツを取ります。これは同時に胸のふくらみをつけるのにも、役立ちます。このとき背にも同樣のダーツを取らねばなりません。

（D） 後身頃の下の方がたるむ場合は、單にウエストラインで、つめるだけでも、修整出來ることがありますが、後身頃が全體的に、ゆるんでいるときなどは、そう簡單にはゆきません。該と肩の縫目を、ほどいて身體に合せ、ピンでとめて、また型紙によつて上部を切り取らなくてはなりません。

（E） ウエストラインの、下部がたるむときは、スカートをウエストラインでつめても、修整出來ますが、これだけでなく、袖刳にもたるみがひどいときは、肩の線を上げると同時に、袖刳へ切りこみを入れなくてはなりません。

（F） 後袖刳のゆるみは、圖のようにダーツを取ればなおせます。この修整法は、身頃の背中が廣すぎる場合にも、よく用いられます。

（G） 修整した袖刳に、袖を合わせるには、袖の縫代を上にして、袖刳に合わせてピンでとめます。このとき身頃と袖の織目が、直角に交わるように氣をつけます。



袖刳を大きくしたときは、はじめに修整した袖袴の線に、假縫いをしておき、この線と袖附けのところどころへ合じるしをつけてから、袖を取りはずします。袖の片方にしるしがつきましたら、他方の袖へも同樣にしるしをつけます。

以上のべました順序によつて、補整する個所にしるしをつけ終りましたら、これらのしるしを、裏面へ移しかえます。そしていよいよ本縫いに入るわけですが、ここでぜひきめなければならないことは、この假縫いの縫目の內側を縫うか、外側を縫うかということです。わずかのことのようですが、この相異によつて出來上つた服は、1 極以上の差となつてあらわれてきますから、本縫いに入る前に、少し大き目にするか、小さ目にするか

考えておきましょう。

★斜め布を用いたスカートは、補正する前に一晩つるしておいてから、修整しませんと、生地によつて相當の狂いが生じますから、注意しなければなりません。

第10章　ステッチ

裁縫の仕上げを美しくするのに、その基礎となる縫い方の練習が、十分出來ていなければならないことはいうまでもありません。

洋裁におきましては、とくに縫目を生かすことが大切で、たとえ縫目の線一本でもゆるがせに出來ません。それがあなたを美しく見せるきわめて重要な役割を果しているのです。

初心者の方は、もつとも簡單な縫い方から始められ、そして最初に學ばなければならないことは、眞直ぐに縫つてゆくということです。これには、まず姿勢をよくし、布と自分の眼との距離を、いつも正しく保つことが、なにより大切です。眼から布までの距離は30糎、胸から布まで15糎、兩手の間隔も15糎位がよろしいのです。仕事をする時の態度が、きちんとしていませんと、針目がゆがんで、千鳥足のようになつてしまいます。これは基礎的な直線縫いの場合ですが、慣れるに從つて適宜に加減するのはよろしいでしよう。

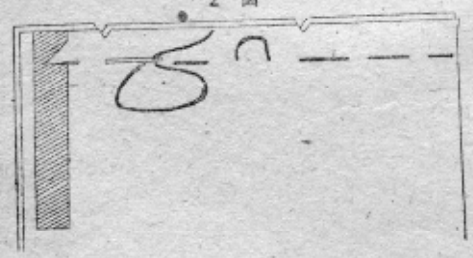
1・ベースティング・ステッチ

ベースティング・ステッチとは、本縫いの前に行なう針目の長いランニング・ステッチで、假縫いのことなのです。

針は長目のものを選び、糸は一重で、少し長くつけておきます。ビロードその他、きずつき易い布地には、對照的な色彩の絹糸を用いるのがよいでしよう。

1 圖

2 圖



1圖・ロングベースティング・ステッチ

これは比較的針目の長い假縫いで、だいたい1糎2粍から6粍位にして直線的な、力の入らない個

所へ用います。

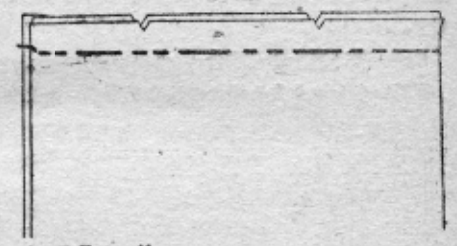
2圖・ショート・ベースティング・ステッチ

第1圖と反對に、これは針目の短い假縫いで、針目の長さは、大體6粍位にいたします。丸く縫う袖隅のようなところは、この方法によらなければなりません。

3圖・コンビネーション・ベースティング

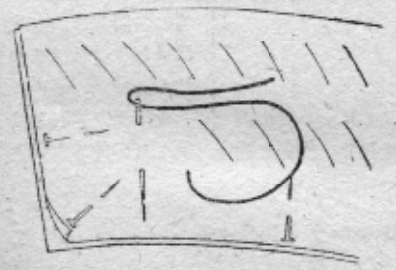
これは第1圖と第2圖の方法を合せて用いるもので、直線部でも力の入るところ、又は緩い曲線の個所などに用います。普通は長1に對して短2～3位の割合にするようです。

3 圖



4圖・スランティッド・ベースティング

4 圖

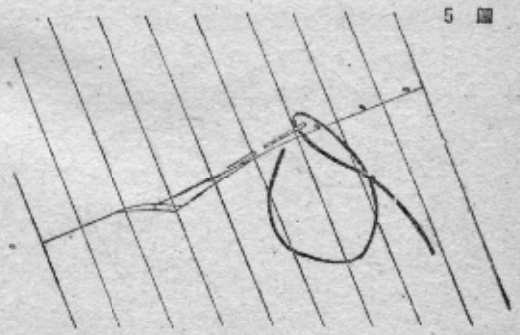


これは斜めしつけのことです。縁を折つた場合とか衿の折り返り線をとめるときなど、すべて表と裏の布が、ずれないように、とじ合せる場合に用います。圖のように、表は斜め、裏は針目を短くまつ直ぐに縫います。

5圖・スリップ・ベースティング

縞柄の布地を假縫いする場合とか、衣服の表側に變化をつけるとかなどに用いられます。裏側に玉留めをしたあと、針は上側の中を通り、布裏を小針にす

5 圖



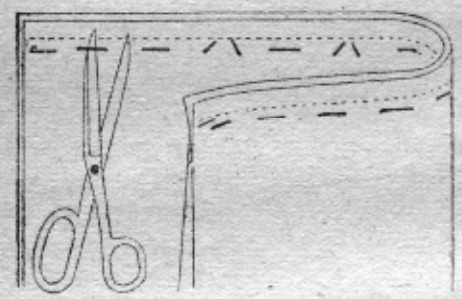
くい、又上側の布へ針を入れ、これをくり返してすすみます。縫い方はごく簡単ですから、圖を御覽になればおわかりになると思いますが、縫い合せる布は、はじめにピンでところどころ止めておかなければなりません。こうしませんと、上側の布は、どうしても少しずれて、最後に布の長さへ狂いが出てきます。

縫いはじめの玉留めは、本縫いのときより大きくし、縫い終りは一針返して、そのまゝ糸を切つてしまいます。こうしておけば糸を抜くとき便利です。

6圖・縫い糸を取る場合

假縫い糸を取り去る場合の注意を圖示いたしました。餘り長い糸を、一度に引つぱることは、布地をそこなう恐れがありますから、糸を抜く前に、一目おき位に鋏を入れておくことにいたしましょう。薄地ものの場合は、とくに注意しなければなりません。

6 圖



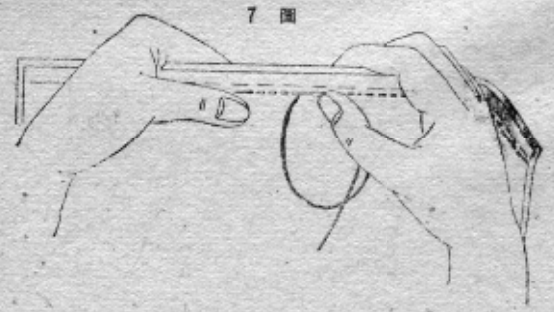
★袖刳、衿刳を裁つたあとなども、6粍位の針目で、内側を縫い、裁ち口が伸びないようにすることもおぼえておいて下さい。

2・ランニング・ステッチ

7圖・ランニング・ステッチ

最も基礎的な縫い方で、和裁でいう運針のことです。比較的力の入らな

7 圖



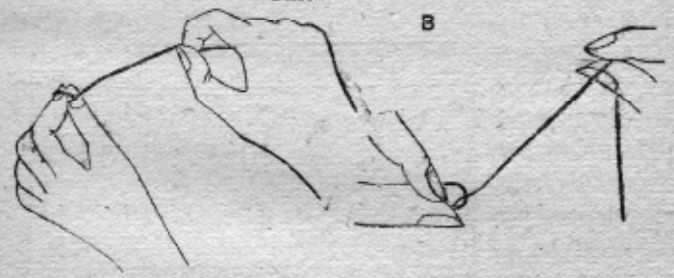
いところに用いられますが、この場合大切なことは、布地に合つた針と糸を選ぶことです。はやく縫うのには短い針が用いられますが、初心者の方は長目の針を用いる方が、針目が揃つて、縫い目も眞直ぐに出來てよいと思います。これにはメリケン針の7番か8番が適當でしょう。又針目の長さは布によつて多少ちがいますが、ひだ縫いや、いせこみを縫うときはごく細かく、袋縫いなど、淺縫いにするときは、3粍から4粍程度がよろしいでしょう。

8圖・玉留めの作り方

これはすでにご存知のことでしょうが、はじめての方のために、圖示しておきました。玉留めはすべて布の裏側にするのですが、布地が薄くて、表側にひびくような場合は、小さく同じところを重ね

8 圖 A

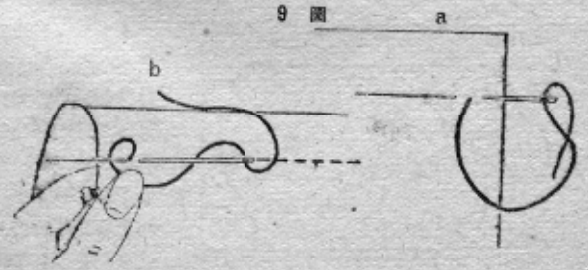
B



て縫い止めすることがあります。こうしておけば、玉留めが抜ける心配はありません。又綾り目の荒い布地に、ギャザーをする場合は、普通の玉留めでは、抜ける恐れがありますから、出來るだけ大きめにして下さい。

9圖・縫い止めの方法

9 圖



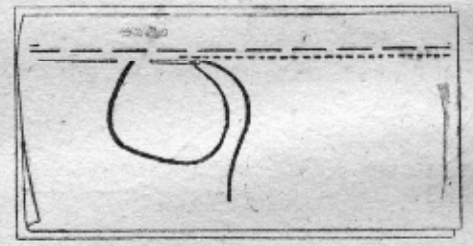
だれでも洋裁を學ぼうという方なら、ご存知のことですし、説明も不要と思いますが、(a)ははじめの縫い止めで、(b)は終りの布裏に玉留を作るときの圖です。

3・バック・ステッチ

和裁でいう返し縫いのことです。いろいろある手縫いのうち、これは一番丈夫な縫い方なのです。昔ミシンが、まだ發明されなかつた時代に、丈夫にしなければならないところに、大ていこの方法を用いたものです。ランニング・ステッチにくらべて、すつと手間はかかりますが、それだけ丈夫なわけで、滅多にほころびたりすることがありませんし、ミシン縫いのように縫目がきれいに仕上ります。ミシンの發達した現在でも、絹物などの柔い線を生かすときや細かい部分の仕事には、手縫いでこのバック・ステッチを用いております。

10圖・バック・ステッチ（本返し）

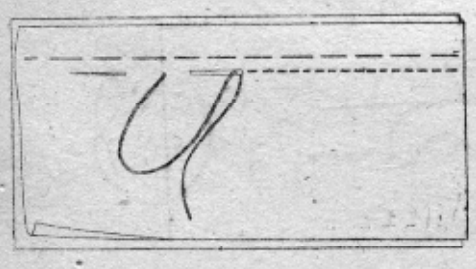
10 圖



まず縫い止めをよくしておき、假縫いの糸目にそつてしるしの通りに一針縫い、針は布の下から上に出し、はじめに入れた針穴に再び入れ、布を二針分すくつて上に出して、一針分もどします。これをくりかえしてすゝんでゆきます。針目の長さは布の地質、厚みなどによつてちがいますが、表の針目は、だいたい2粍ほどが適當でしょう。

11圖・ハーフバック・ステッチ（半返し）

11 圖



別名スィード・ステッチといわれているこの方法は、少し針目を長くして二針縫い、針は裏から表に出して、半針分だけもどすのです。これを布裏に出し、一針分すくつて半針分

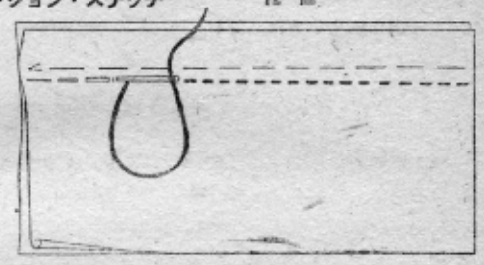
大妻圖

もどすのです。この動作をくり返してすゝんでゆきます。

この出來上りを表からみますと、ちようどランニング・ステッチのようですが、半針分づつかえしてありますから、すつと丈夫になるのです。これを見たところは、バック・ステッチよりきれいではありませんが、はやく出來ますので、地縫いには大ていこれが用いられております。

12圖・コンビネーション・ステッチ

12 圖

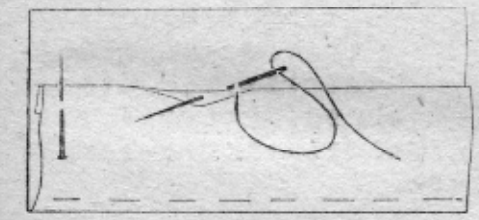


これはランニングとバックとを交互に用いる方法で日本では餘り使われておりませんが、下着などを縫うときに用いるとよいでしょう。

4・スリップ・ステッチ

13圖・ヘムを縫う場合

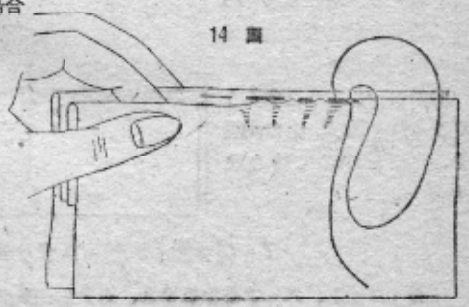
13 圖



スリップ・ステッチは、糸目を見せない方法で、圖のように、針は下側の布目の糸二、三本にかゝる程度にすくい、上布は針をヘムの折こみの中をすべらせて通し、縫つてゆきます。糸はこの場合、きつく引かないようにして下さい。

14圖・接ぎ合せる場合

14 圖

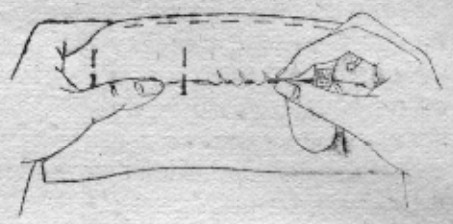


表へ糸目をみせずに二枚の布を接ぎ合せる場合は、この方法が用いられます。圖のように人差指を中に入れ、親指と中指とでおさえながら、針はたがいちがいに、中をすべらせて縫つてゆくのです。

15圖・はやい縫い方

これらの縫い方に少し慣れてきましたら、こんどは圖のような持ち方で三針か四針を、つづけて縫つてしまつてから、糸を引くというはやい方法を練習して下さい。

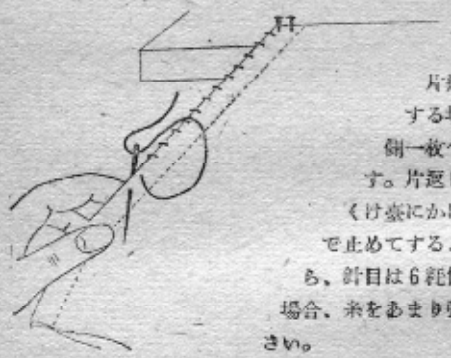
15 圖



5・オーバー・キャスティング・ステッチ

16圖・縫い合せた布の兩端がほつれたり、すりきれたりしないようにする方法

16 圖

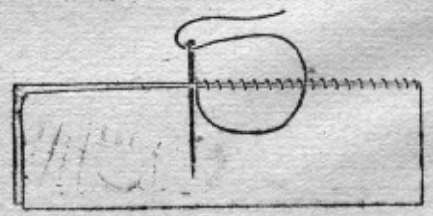


これはかがり縫いのことです。これには布を片返しにして二枚一緒にしてする場合と、縫目を割つて、兩側一枚づつにする場合とがあります。片返しする場合は圖のように、くけ臺にかけてするか、あるいはピンで止めてするようにして、強く張つてから、針目は6糎位にしてかがります。この場合、糸をあまり強く引かないようにして下さい。

6・オーバー・ハンディング・ステッチ

17圖・リンネル地などの織耳を縫い合せるとき用いる方法

17 圖



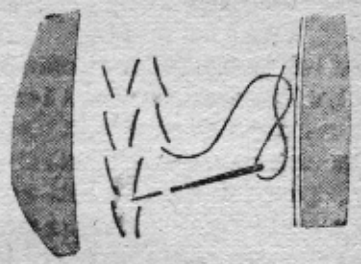
織糸の一、二本をすくう程度に針を運び、糸の間隔を、ぐつとつめてゆきます。

7・パッディング・ステッチ

18圖・コート、スーツを作る場合、カラー、ラペル、パッドの芯を刺す

方法

18 圖



これは普通「ハ刺し」といわれて、圖のようにハの字をならべたように、ぎつしりと刺してゆくのです。縫い方は、スランチッド・ベースティングと同じですが、表に出す針目を、出來るだけ小さくして下さい。

第 11 章　縫代の始末

私達が專門家の美しく仕立てた衣服の裏を見て、それがプレーンな仕立てにしても、ピンキングの方法による仕立てにしても、きわめて手際よく出來ているのをみますと、いろいろ用途のちがつた他の衣類でも、出來るだけほつれることのない、そして表と同じように美しい裏に仕上げてみたいと、どなたでもお考えになると思います。

仕立て方はどんな型の方法を選ぶかは、衣服の種類によりますが、同時にまた布地の質によつても、ちがつてきます。こゝでは衣服の種類から、それに適當すると思われる方法を選らびまして、皆さんの參考にしていただきたいと思います。

（A）下着類、ふだん着、子供服、エプロンなどには、伏せ縫（8圖）くるみ縫（12圖）袋縫（13圖）卷き縫（25圖）及び16圖のように、縫代の兩端を折りこんで、縫い合せる方法などが、よろしいでしよう。これらの方法は、いずれも肌ざわりがよくて、その上、何回の洗濯にもほつれたりすることのないように、丈夫に工夫された、理想的な縫い方なのですから、布地や服に應じて、このうちから、適當な方法を選んで下さい。

（B）薄いウール地、或いは絹、人絹地などのドレス、ブラウスには、からげ縫（3圖、4圖）ピンキング（2圖）あるいは16圖の方法などを、これらのうちから布地の粗密程度によつて、適當な方法を選んでいたゞきます。

（C）布目のつんだ厚地毛織物のドレスには、ピンキング（2圖）か、あるいは、からげ縫（3圖）などがよろしいでしよう。

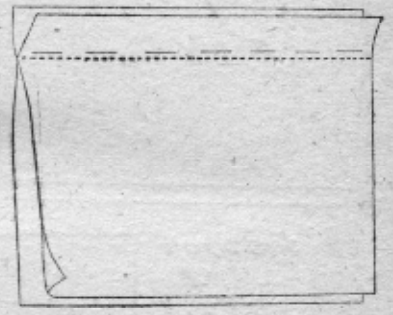
（D）ごくうすいシュヤー地などのドレス、ブラウスには、卷き縫（25圖）か、端ミシンをかけて、割縫いにする方法（5圖）または二度縫いをして、縫代の餘分を裁ちおとす方法（6圖）などを用います。

（E）裏をつけないヂャケット・コートには、薄地のバイヤステープを縫いつけて、玉緣を作つて、落しミシンをかける方法（9圖）か、ストラップ・スィーム（23圖）などを用います。

（F）裏をつけるヂャケット・コートには、裏がつくので、ほつれる心配がありませんから、布端を正しく裁ちそろえておくだけでもかまわないのですが、ていねいにするのでしたら、ピンキング（2圖）押え縫（6圖）折り伏せ縫（10圖、11圖）などを用いておきます。このような衣服のバイヤス・スィームには、テープを一しよに縫い合せるテープド・スィーム（30圖）が用いられているようです。

（G）衣服の特殊な部分、たとえば袖附、袖、肩またはスカートの腰などの縫目は、丈夫にするために縫代を割らずに、かゞり縫いにしたり、割つたときはバイヤスで包む方法などが、用いられています。又斜めの縫目で、力の入るところに、テープを用いるテープド・スィーム（30圖）にしたりいたします。

1 圖

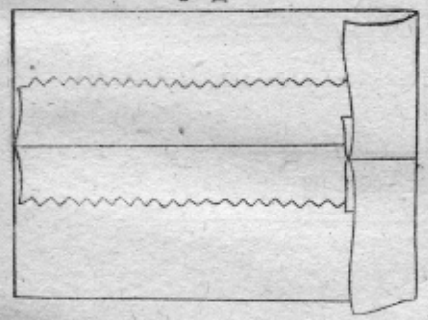


1圖・プレーン・スィーム

これは、廣く一般に用いられている一番やさしい方法です。まず本縫いが終りましたら、假縫いの糸を抜き縫代は開いて、あるいは一方へ重ねて、プレス（アイロンでおさえる）いたします。

2圖・ピンキング・スィーム

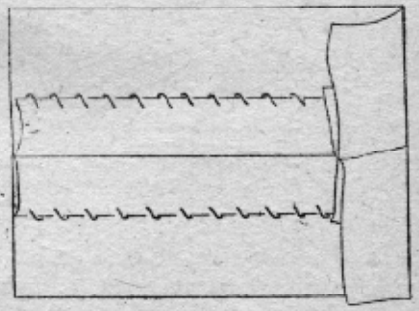
2 圖



これはピンキング鋏があれば重寶です。もしもなければ普通の鋏で、三角に切り込んでゆくのでもよいでしよう。圖のように布の兩端をピンキングするだけで縫い方は1圖のプレーン・スィームとちがいはありません。

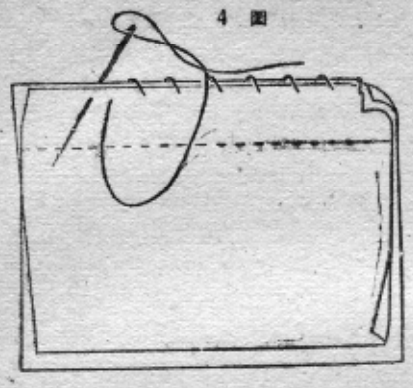
3圖・オーバー・キャスト・スィーム（シングル）

3 圖



これは日本で「からげ縫」といわれる方法で、縫代は開いてプレスしておき、兩側へかゞり縫いをいたします。表へ目を出すときは、ごく小さく出し、糸はあまり強く引かないように注意して下さい。

4 圖



4圖・オーバーキャスト・スィーム（ダブル）

縫代を開かずに、重ねたままかがりてゆくところが、3圖のシングルとちがいます。

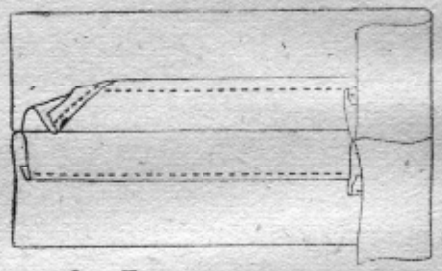
5圖・布の兩端を折りステッチをかける方法

プレーン・スィームをつくつて、縫代の兩端を內側に折りこみ、折山になるべく近く端ミシンをかけるのです。

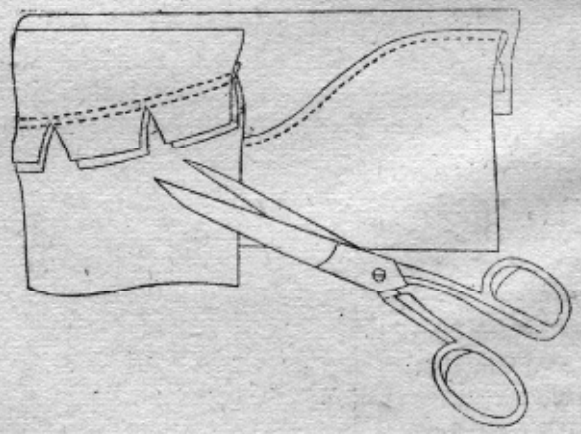
5 圖

6圖・トップステッチド・スィーム（押え縫）

縫代は一方に重ねてプレスし、「二度縫い」と同樣にもう一本縫うのですが、この場合、二度目は表側から飾りミシンとしてかけるのです。曲線部



6 圖

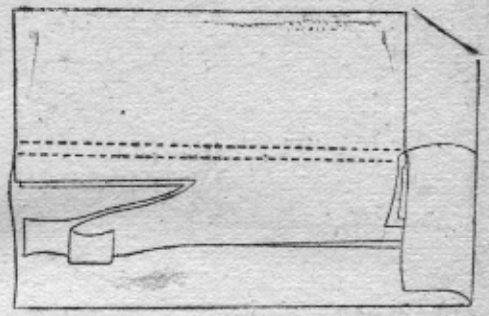


は布の端に切りこみを入れて、そのまゝでもよいのですが、かがつておけばなおさらよいと思います。

7 圖

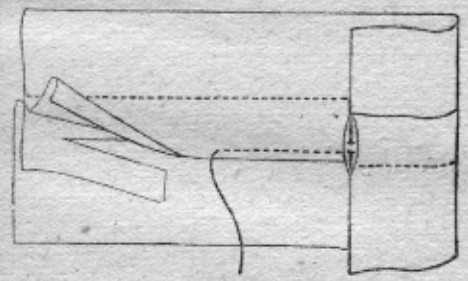
7圖・ダブル・ステッチド・スィーム

1圖のようなプレーン・スィームを作ります。そしてこの縫い目に近づけてもう一本縫い、縫い目のきわを裁ち落します。



8圖・フラット・フェルド・スィーム

8 圖

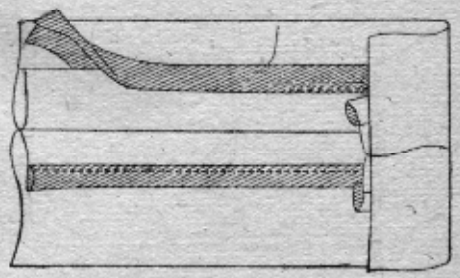


縫代は二枚重ねて下になる方を縫目から3粍位のところで切り取つてしまい、上側の方を折り込んで、下側にかぶせます。そして折山にそつてミシンをかけます。

9圖・バウンド・スィーム

縫代は開いてプレスしておき、布の兩端をバイヤスか又はスィーム・バインディングで包む方法です。

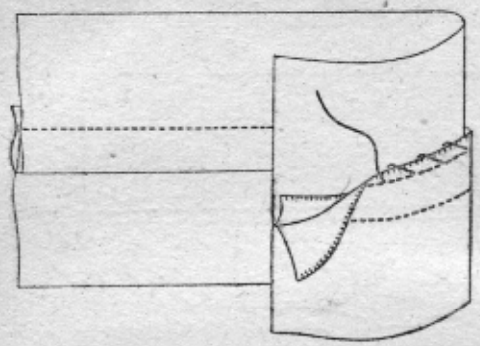
9 圖



10圖・ウエルト・スィーム（シングル）

8圖のフラット・フェルド・スィームと同

10 圖

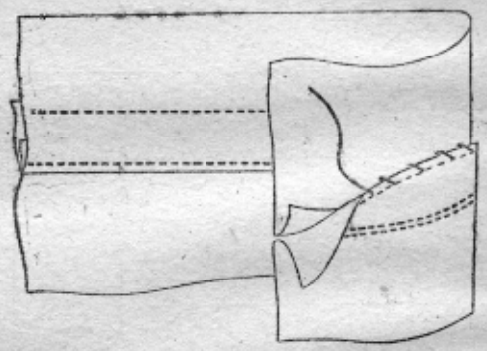


様に、下側になる方の布を少し切り取り、上側の布をこれにかぶせて、縫目から約6粍外側に、もう一度ミシンをかけます。この方法は、フラット・フェルド・スィームよりも、縫目がうすい感じに仕上げることが出來ます。

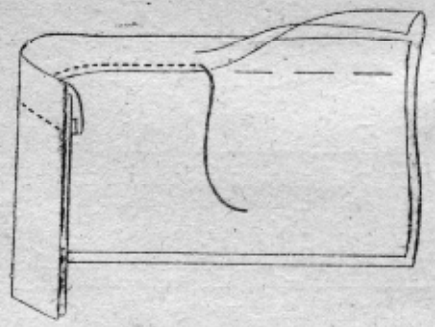
11圖・ウエルト・スィーム（ダブル）

10圖のウエルト・スィーム（シングル）を作つて、これへスィームラインに近く、もう一本飾りミシンをかければよいのです。

11 圖



12 圖



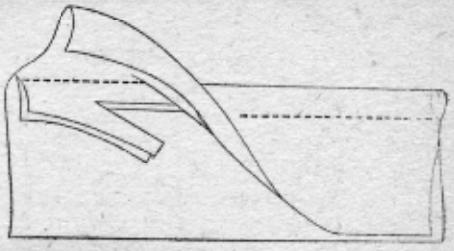
12圖・セルフ・カバード・スィーム

縫目は先に假縫いをしておき、布の一方の端を縫目より3粍位のところで切り取ります。もう一方の布の端を内へ折りこみ、切り取つた方にかぶせて本縫いするのです。

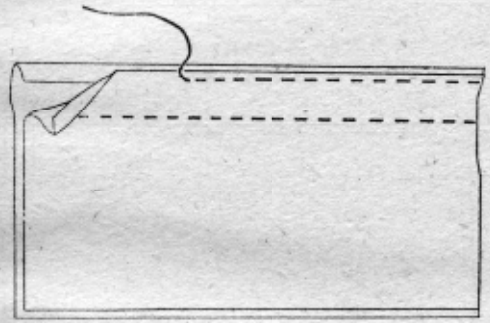
13圖・フレンチ・スィーム

はじめの一回目は普通の場合と反對に、外表に重ねて縫い、縫代は3粍ほどに細く裁ち落します。次に裏に返して、3粍位の縫代でもう一度縫います。出來上りは太くごろごろになりやすいものですが、薄地のものは細く、厚地のものは少し太い目にいたします。

13 圖



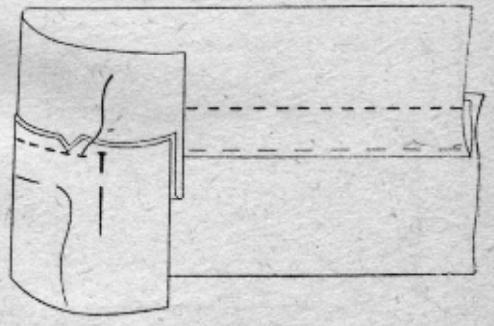
14 圖



14圖・布の兩端を縫い合せる方法

縫代の兩端を少し折りこみ、縫い合せて一方に重ねてプレスします。

15 圖



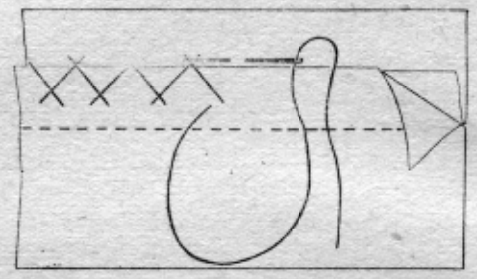
15圖・タックド・スィーム

假縫いで内側に普通の縫代を作つておき、一方に重ねて、縫代の端に表へ出るようにミシンをかけます。そうすると、表側の縫目にタックが出來るわけです。

16圖・キャッチ・ステッチ・スィーム

縫代の一方は幅を半分に切り取り、その上へ他の一方をかぶせて、千鳥がけをいたします。

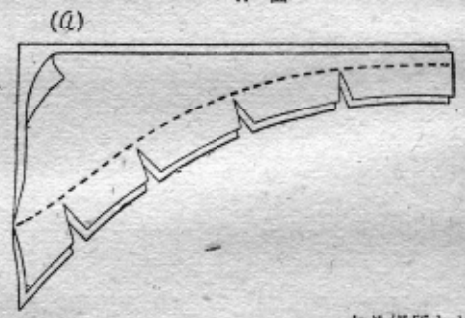
16 圖

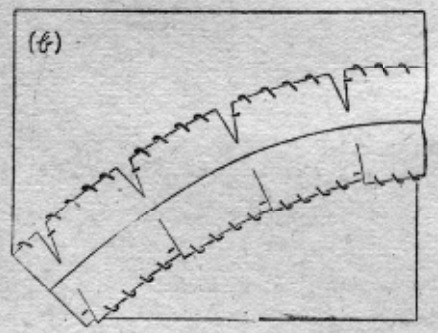


17圖・曲線部のオーバー・キャスト・スィーム

曲線部にオーバー・キャスト・スィームをつくには、縫代へ切るりこみを入れて皺の出來るのをふせがねばなりません。この場合、切りこみを開く場所と重ねる場所とが出來るわけです。つまりカーブの外側では開き、内側では重なるのです。縫代の端へするかがり縫いの糸の運び方は、圖をよくみて注意して下さい。

17 圖

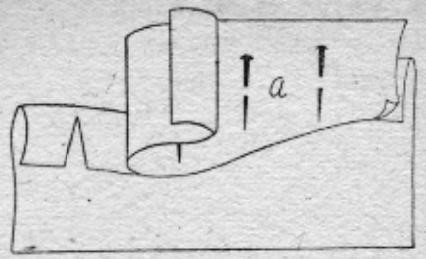




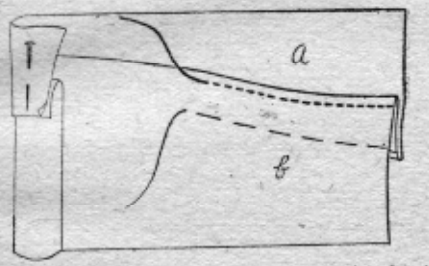
18圖・ラップド・スィーム

圖に示したように、b片の縫代分を折り込んで、これにa片の端を重ねて、a b両片をピンで止め、内側から折山にそつて假縫しておき、それから本縫いをします。曲線部は、どうしても切りこみを入れなければなりません。

18 圖 A



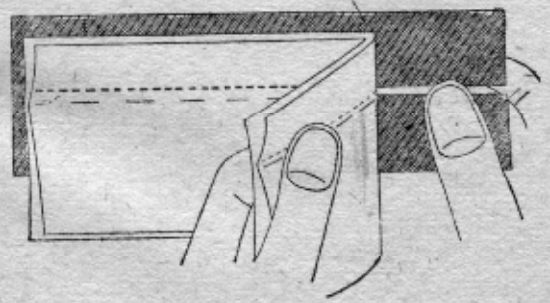
B



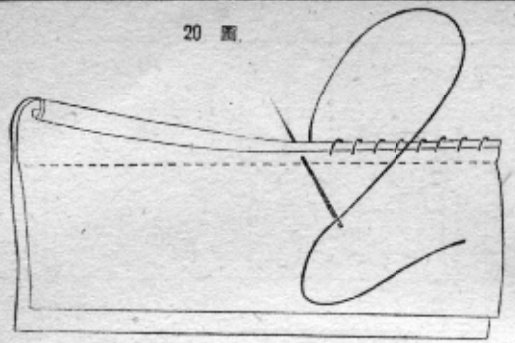
19圖・バイヤス・スィーム

この縫方は、布地がごく薄いために、ミシンをかけているうちに、布地がのびたり、あるいはミシンの送り金に送られないような場合に用います。はじめ縫代にはセロファン紙のような薄い紙を一しよに假縫いしてミシンをかけます。縫い終りましたら、紙は破り取つて、両端を仕上げます。

19 圖



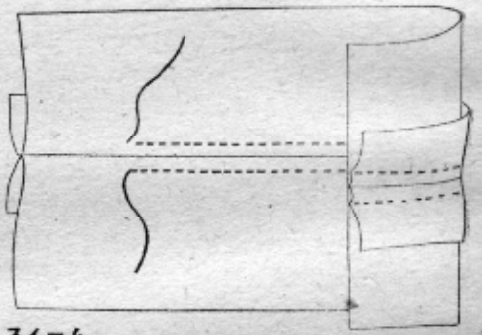
20 圖



20圖・ロールド・スィーム

普通の縫代（プレーン・スィーム）を作り、縫代を細く裁ち揃え、親指と人差指とで巻き込み、圖のようにかがります。

21 圖



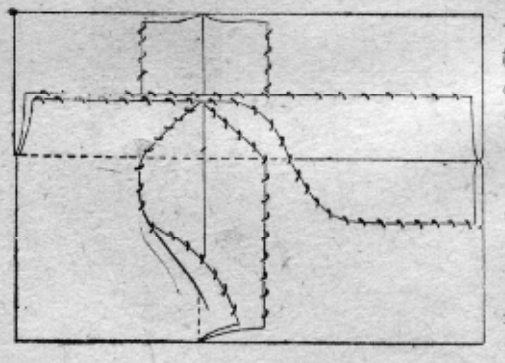
21圖・ダブル・トップステッチド・スィーム

縫代は開いてプレスしておき、圖のように縫目にそつて、表側から二本ステッチをかけます。

22圖・クロッスド・スィーム

縫代が、クロッスするときには、第 18 章、4 圖のクロッスド・タックと同様に、はじめ一方の縫代を先に縫つてしまい、その縫代を開いて、プレスしておきます。そして次にクロッスする方を縫い、前と同様に開いてプレスいたします。縫代の端は全部かがつておきます。

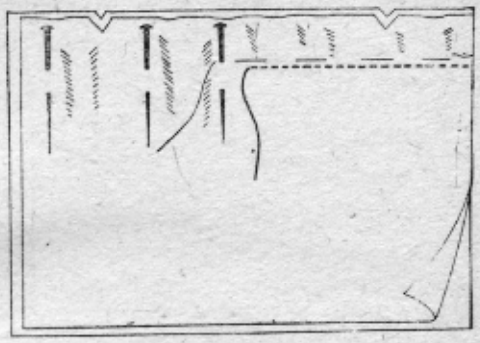
22 圖



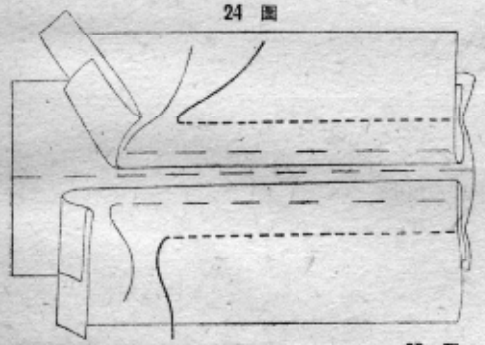
23圖・一方が長目の場合

縫代の一方がわずかに長目の場合は、たとえば袖口にカフスをつけるときなど、長目の方をたるませねばなりません。たるませる方の布を手前にして、出來るだけたくさんのピンを使つて、たるみを平均させ、假縫いのあとで本縫いに入ります。

23 圖



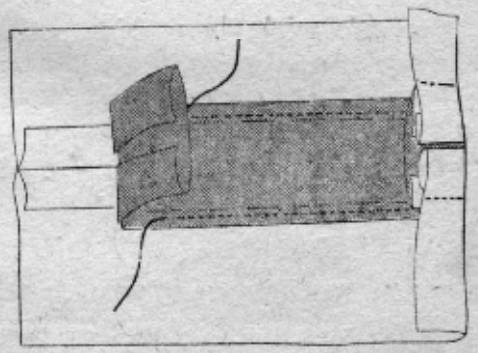
24 圖



24圖・スロット・スィーム

縫い合せる布は、兩方共縫代分を内側に折りこみ、當布の中心に、兩方の折山をつき合せに假縫いしておき、圖のように本縫いをいたします。

25 圖



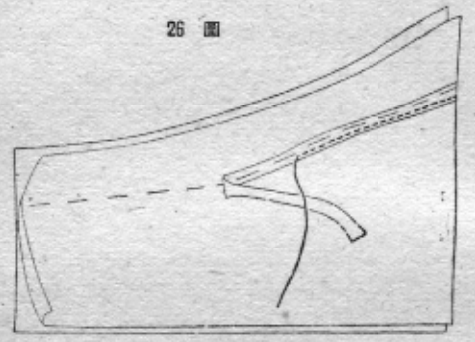
25圖・ストラップ・スィーム

まず兩布を縫い合せて、縫代の幅を 6 粍位に切り揃えて開き、プレスします。これに端を折り込んだバイヤス布をかぶせて、假縫いいたします。

次に、バイヤスの

周端にそつて、本縫いします。バイヤスの代りに、ブレードあるいはリボンを使うのもよろしいでしよう。

26 圖



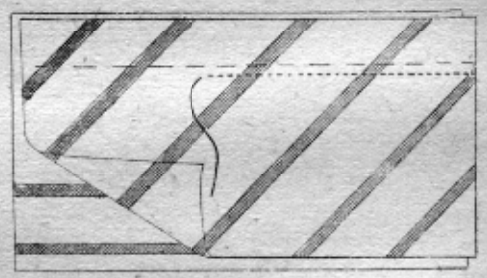
26圖・テープド・スィーム

斜め地の縫目は非常にのびやすくて、あとで縫糸が切れたりしますから、テープを用います。このテープはあらかじめ縮ませておかなければなりません。

27圖・縱地と斜め地とを合せる場合

斜め地は手前にして、出來るだけ澤山にピンを使つて、平に正確に假縫いしてから、本縫いに入るようにして下さい。とかく斜め地の方がのびやすいものですから、十分注意しなければなりません。

27 圖



28圖・パイプド・スィーム

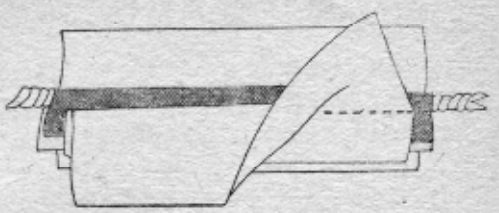
まずバイヤスを用いて、中に紐を包み、紐のきわを縫います。そして圖（B）のように縫代の中に縫い込むのです。紐は入れずにただバイヤスをはさんだだけでも、切替線などに利用して、一つの飾りになることもあります。

28 圖 A

布の表から飾りミシンをかける場合は、上側になる布の縫代を折り込

み、バイヤスの輪の方を下から好みの幅にのぞかせて、下側になる布に重ねて表布の折山の端にステッチをかけます。

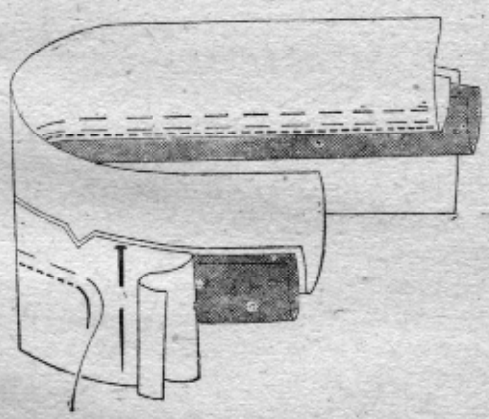
B



29圖・折山ぎわにステッチをかけたパイプド・スィーム

28圖のパイプド・スィームを假縫いします。出來ましたら縫代を倒して、表側から假縫いをして、平に落ちつかせてのち、表布の折山に近く飾りミシンをかけます。

29 圖



第12章　裾口の始末

裾のヘムをなめらかに、そして手ぎわよく仕上げるということは、洋裁の勉強において、十分習熟せねばならないことの一つです。この仕上げ方によつて、だいたいに衣服全體のねうちが決定されるといつても過言ではないでしょう。

裾の縫代は裁断のとき、あらかじめ必要な分だけとつておくのですが、假縫いのときもう一度正確に計り直して、ヘムとして、どれだけとれるかを見きわめます。

もしヘムの幅が狭すぎるときは、見返しをつけなければなりません。次に裾の線が曲らないようによく注意して、ヘムを折り込みます。ヘムが折れましたらしつけをかけて、以下に説明いたしますような、いろいろな方法で仕上げるのです。

ヘムをまつる場合は、布の表側へなるべく目だたないように小さく針目を出すのですが、あまり小さすぎますとすぐ糸が抜けてしまいますし、又糸は強く引かないように注意しなければなりません。仕上げたあとでは、必ず湿布をあてて、プレスすることを忘れないで下さい。

A・タイト・ドレス及びタイト・スカートには

タイト・ドレス、タイト・スカートなどの身體にきつちり合つたドレスとかスカートの裾線は、だいたいストレート・ライン(Straight line)に等しいものですから、ヘムを折る場合、最も簡單なのです。木綿や目のつんだ絹、又は人絹地で作られるこれらのドレスやスカートの裾口は、スリップ・ステッチド・ヘム(9圖)を、又毛織物その他かさばつた布地やほつれやすい地質のものには、テープド・ヘム(14圖)とか、キヤツチ・ステッチド・ヘム(10圖)あるいはデコレーティブ・ヘム(4圖)がよろしく、シェヤー地にはスリップ・ステッチド・ヘムかナロー・ヘムなどを用います。

B・サーキュラー・スカートには

サーキュラー・スカート(Circular Skirt)とは、腰にダーツやタックを取らずに、裾に十分のフレヤーを出したスカートで、圓形として丁度ケープのように裁つものです。厚さが中位の生地で作られたサーキュラー・スカートの裾口は、輕くギャザーをよせたサーキュラー・ヘム(13圖)が最適でしょう。又ごわごわしたかた目の布地とか、ほつれにくいようなウール地などの場合は、デコレーティブ・ステッチド・ヘム(4圖)が多く

用いられるようです。シェヤー地には、二度縫いのナロー・ヘム(5圖)あるいはステッチ・アンドロールド・ヘム(3圖)ハンドロールド・ヘム(2圖)を用いて下さい。

C・コート及びヂヤケットには

裏をつけるものには、キヤツチ・ステッチド・ヘム(10圖)を、そして裏なしのものは、布地の厚さによつて、テープド・ヘム(14圖)とか、スリップ・ステッチド・ヘム(9圖)を選びましよう。

D・ベビー服には

ベビー服には、シェヤー地とか、絹地を用いる場合が、多いのですが、これにはナロー・ヘム(5圖)とか、シェル・ヘム(8圖)を用い、ウール地の場合は、キヤツチ・ステッチド・ヘム(10圖)を用います。

E・下着類には

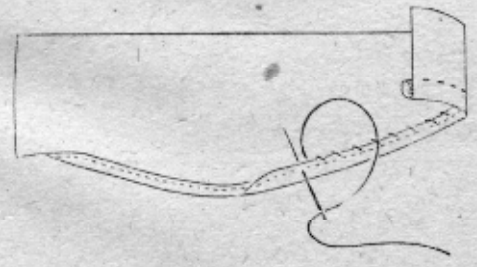
下着類には、ハンド・ロールド・ヘム(2圖)とか、ステッチド・エッヂ・ヘム(1圖)、ステッチド・アンド・ロールド・ヘム(3圖)又は、シェル・ヘム(8圖)などを用いて下さい。

以上にのべましたいろいろな方法は、これからそれぞれ圖について説明してまいりますが、1圖から8圖までは、幅の狭い場合の方法で、9圖から14圖までが、幅の廣い場合の作り方です。幅は廣い方が、裾の始末をするのには、むずかしいものです。

1圖・ステッチド・エッヂ・ヘム

布の端を細く二つ折りにしてミシンをかけておき、更にもう一度折り込んでから、細かくくけてゆきます。

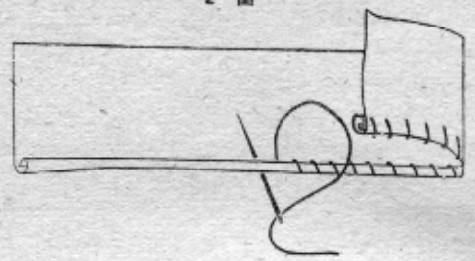
1　圖



2圖・ハンド・ロールド・ヘム

よりぐけにする方法ですが、針を運ぶときに、針よりも5、6糎さきを親指と人差指で巻きこみながらくけてゆけば、きれいに仕上ります。

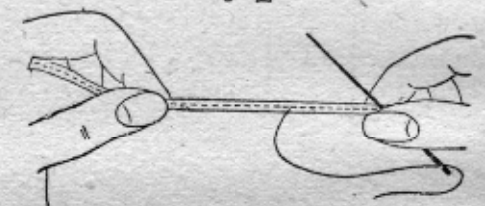
2 圖



3圖・ステッチド・アンド・ロールド・ヘム

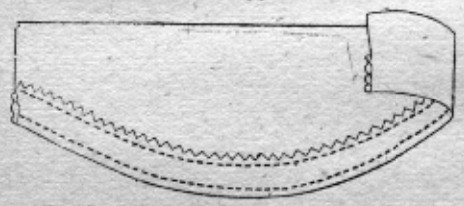
布の端を6粍ほど折つてミシンをかけます。次にそれを更に内側へ折り込み、スリップ・ステッチでくけてゆきます。

3 圖



4圖・デコレーティブ・ステッチド・ヘム

4 圖

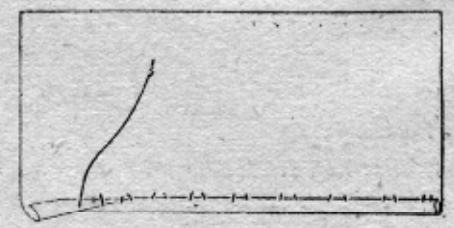


縫代の端は山形に切りこみを入れて、縫代をミシンで縫い止めます。ステッチはスィングルでもダブルでもよろしいのです。

5圖・二回縫いのナロー・ヘム

1圖とよく似ておりますが、ミシンは使わずに、すぐに三つ折りにしてくけるのです。

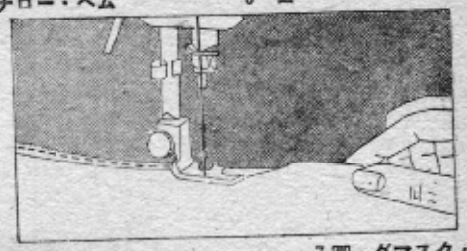
5 圖



6圖・ミツンによるナロー・ヘム

ミシンにヘムイング・フットを使つて、たつた一回の操作で簡單に、その上きれいに三つ巻きにすることが出來ます。

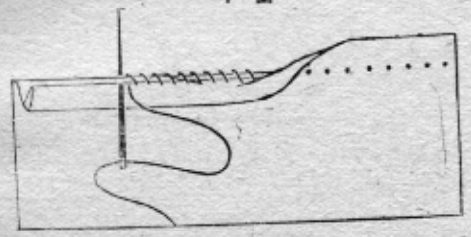
6 圖



7圖・ダマスク・ヘム

リンネルのテーブル掛けなどによく見かける方法で、圖のように縫代を折り込んで、上側と下側の兩方の折山の布目の糸二、三本に針がかかる程度に、小さくかゞり縫いします。

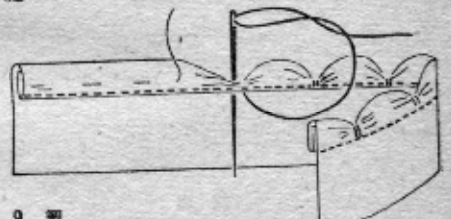
7 圖



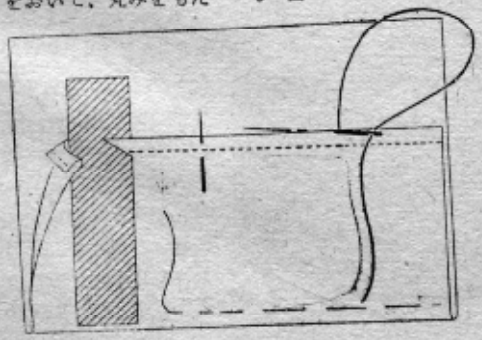
8圖・シェル・ヘム

これは形の上から、（貝がら形）つけられた名稱です。布の縁をまず三つ折りにして、圖のように一定の間隔をおいて、丸みをもたせて縫い止めてゆきます。このとき糸をしつかり引きしめてから、次の丸みに移らないと、あとで型がくずれますから注意して下さい。

8 圖



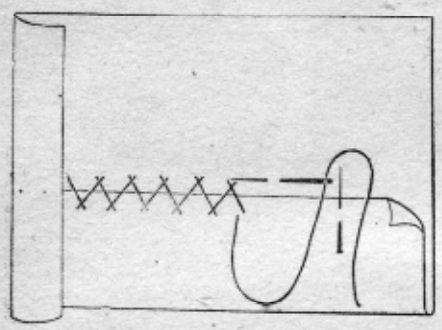
9 圖



9圖・スリップ・ステッチド・ヘム

端を少し折り込ん

10 圖



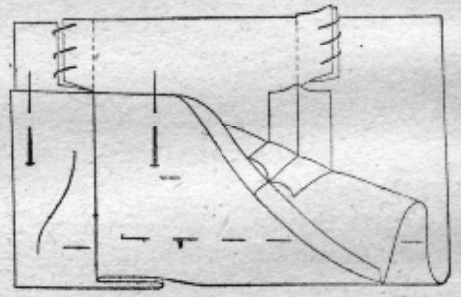
でミシンをかけ、次に出來上り寸法通りに折つて、折山に假縫いし三つ折りぐけをいたします。針目の間隔は、地質又はヘムの幅によつてちがつてきます。

10圖・キヤッチ・ステッチド・ヘム

ヘムの端を折り込まずに、千鳥がけにいたします。

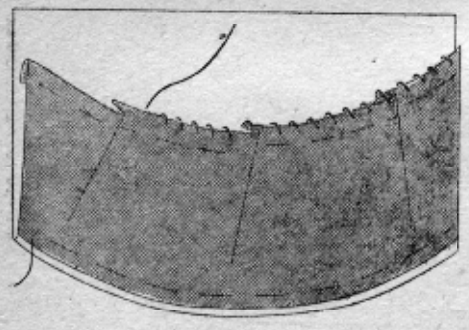
11圖・裳スカートに於けるヘム

11 圖



はじめにヘムの端をわずかに折込みますが、接ぎ代のかさばる部分は切り取らなければなりません。次に折り込みの中に入る部分は、切り開いてプレスし、あとでヘムを出來上り幅に折ります。しつけをかけてから、布地に適したかがり方を選んで下さい。

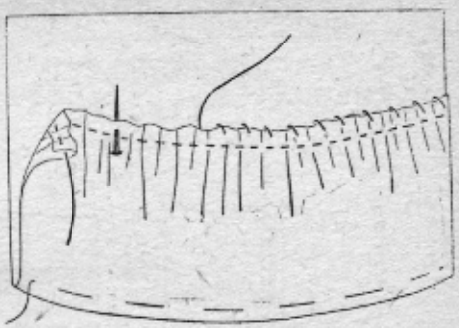
12 圖



12圖・サーキュラー・コデイにおけるヘム

裾のまるいコデイ（godet）とは和裁でいう襠（まち）とか、衽（おくみ）といつた三角形の挿入片のこと）には、出來上りの折山に假縫いしておき、間隔を等しく小さな襞を取り、一應しつけをかけてからまつります。

13 圖



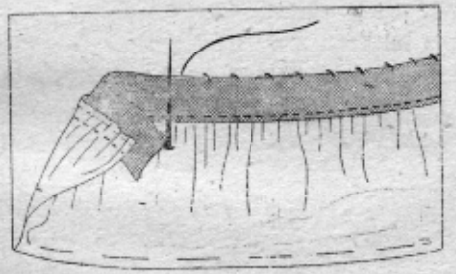
13圖・サーキュラー・ヘム

これも 12 圖と同様に、曲線部分へ、ヘムを取る方法ですが、ギャザーをかけて皺を平均させて、圖のように、かがり縫いにいたします。

14圖・テープド・ヘム

三つ折にして、どろどろするような厚地ものは、縫代の端をギャザーで平均に揃め、たるみ分は、濕布をあてゝプレスをかけ、たいらに消してしまいます。

14 圖

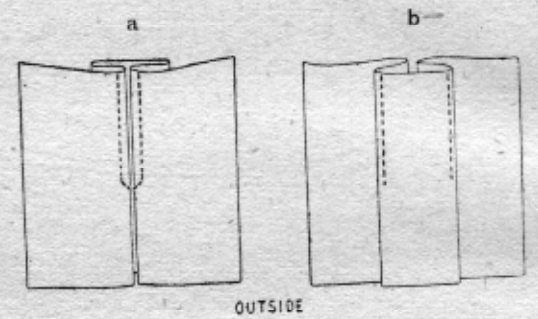


次に布端を薄地のバイヤスでくるみ、バイヤスだけに落しミシンをかけて、縫代を折り上げて、バイヤスの奥をまつりつけます。又それほどの厚地でない場合は、バイヤスを開いたまゝまつりつけます。この方法は裾の縫代に段がつかずに、體裁もよく仕上がるので、普通の毛織ものに應用されます。

第13章　襞の作り方

1圖・a、bともごく簡單な襞の作り方です。襞が折れましたら、襞の止まりの位置まで、ミシン縫いをして止めておきます。

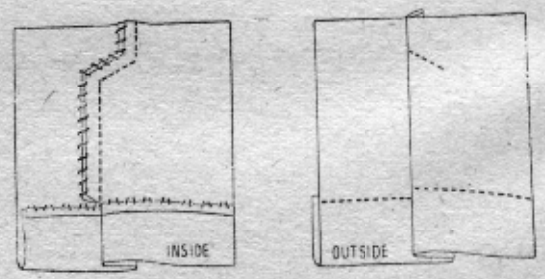
1　圖



2圖・これは片襞の場合ですが、縫目が陰に入れてあるのです。接ぎ合せた縫代は、第12章11圖に説明しておきましたように、ヘムの中に入る部分は切り取つてしまい、あとの接ぎ目を開いてプレスします。ヘムの始末が出來ましたら、上部は重ねてかゞつた方がよいでしよう。

次に襞を片側へプレスして、外側から襞の止まりの位置へ、斜めに圓ミシンをかけておきます。

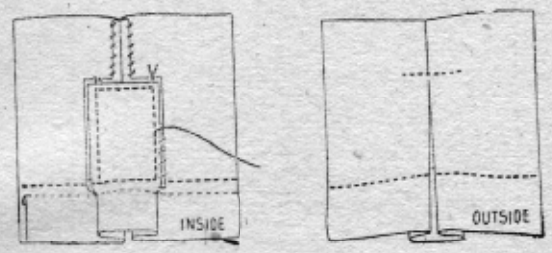
2　圖



3圖・襞を作る部分だけに繻（まち）を入れる。箱襞の方法です。出來上りの襞山を折つておき、裏側から陰襞となるべき繻布をあてて、左右と

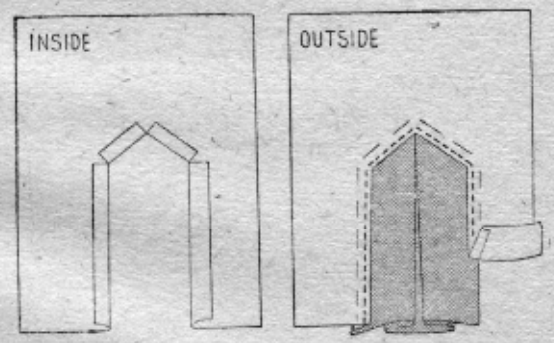
も縫代の奥を縫い合せます。この縫代は、2圖と同様に始末し、最後に表から圓ミシンをかけて、縫代の裁ち目は全部かがつておきます。

3　圖



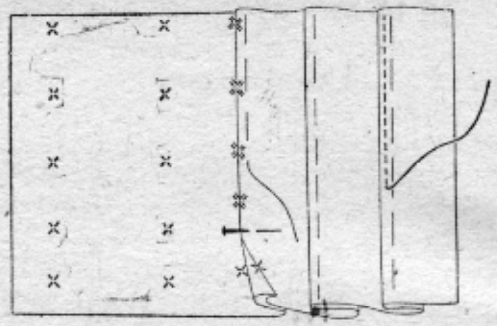
4圖・これは角形の中に襞をはめ込むようなときの方法です。まず縫代の角になるところにだけ切りこみを入れて角を整え、内側に折つてプレスしておきます。次に襞を少し開きぎみにして、縫代を合せながら、内側からはめ込んで假縫いします。本縫いは表側から折山ぎわにする飾りミシンで、これで角形のまわりを止めるわけです。

4　圖

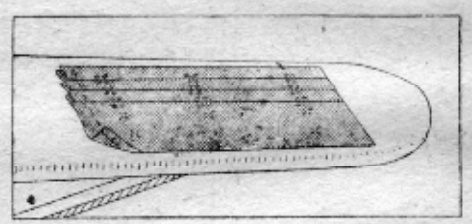


5圖・車襞を作る場合です。あらかじめ糸でしるしをつけておいた線を合せながら　襞を折りピンで止めてゆきます。このときのしつけは二本糸がよろしいでしよう。

5 圖



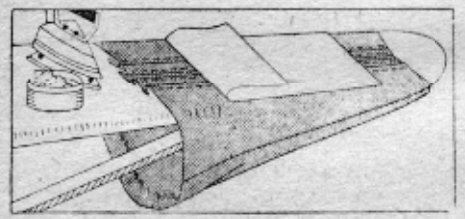
6 圖



6圖・襞にプレスをかける場合は、しるしを合せながら襞を作り、上端をピンでアイロン・ボードに止めてから、下端を引張つて同じように止めてしまい、それからアイロンをかけます。

7圖・仕上げのプレスをかけるときはヘムが始末されましたら、絹糸二本で襞に飾りしつけをかけます。そして當布の上から輕く水をふくませたスポンヂで濕らせプレスをします。當布の濕氣がきれてなかつたり、アイロンが十分熱してないと、襞がのびてくずれてしまいますからよく注意して下さい。表が出來ましたら、裏に返えして、濕氣を殘さないようによく乾して、襞をきちんと折つて仕上げます。

7 圖

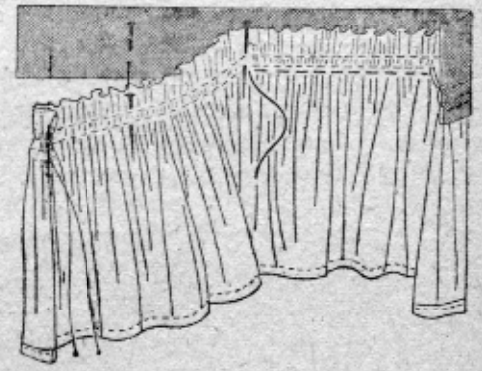


第14章　襞布と裾の飾り襞

1圖・フロウンス（飾り襞）をつけるには

襞布の上端を適當な幅に折り曲げ、縫代の餘裕をとつてから、ギャザリング・ステッチを二本かけます。第18章・ギャザーの項で説明する方法で、ギャザーを作り、所定の間隔に納めます。出來ましたら圖のように、身頃のしるしへ中表に合せて、假縫いのあとで本縫いをいたします。

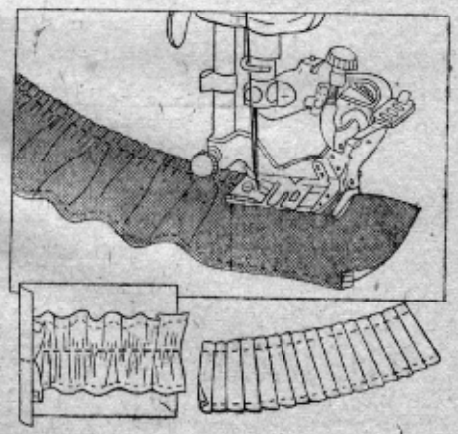
1 圖



2圖・ラッフルの作り方

（A）襞布の兩端を始末して、ミシンまたは手縫いで、中央にギャザーをいたします。

2 圖



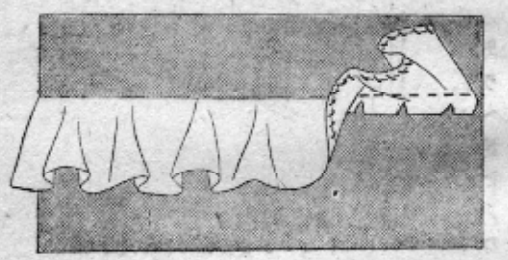
（B）今日でもシンガーミシンなどには、附屬品として圖のようなフットがあります。これを使いますと、襞の間隔、大きさなどが一樣となつて美しくそのうえ仕事がはやいわけです。この裝置はカーテンの襞つけなどに用いられ、縫いつけとギャザーとが同時に出來るように工夫されています。

（C）襞を一方へ重ねてプレスしたり、（B）圖にあるように、一端をそのまゝにして、飾りに用いたりいたします。いずれにしても、ラッフルの作り方、用い方は、それをつける場所と布地によつて、ご自分のお好きなようにすることが出來ます。フロウンスよりも幅がせまくて、裾以外のところに飾りとしてつける襞布を、ラッフルとよんでいます。

3圖・サーキュラー・ラッフルのつけ方

サーキュラー・ラッフルは、圓形狀に襞布を裁ち、それを直線に縫い合せますから、襞布の下の方にだけ襞がつきます。これを取りつける場合はまず襞布の下端を始末し、地布にマークされた直線にそつて、圖のように中表に合せステッチをかけます。縫代はしわにならないように切り込みを入れて表に返し、プレスすればよろしいのです。

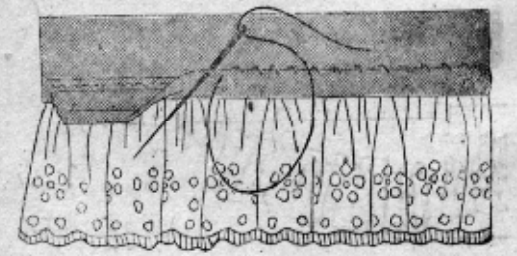
3　圖



4圖・バイヤス・テープを用いる場合

バイヤス・テープと地布とを中表に合せ、その間に地布と、中表になるように襞布のギャザーされた方の端を入れ、三枚一しよにステッチをかけます。縫えましたら縫代は3粍位のところできれいに切り揃え、バイヤスを表へ返して縫代をつつみ、圖のようにまつつておきます。

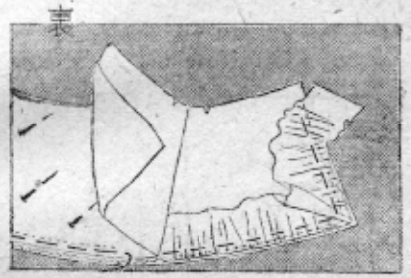
4　圖



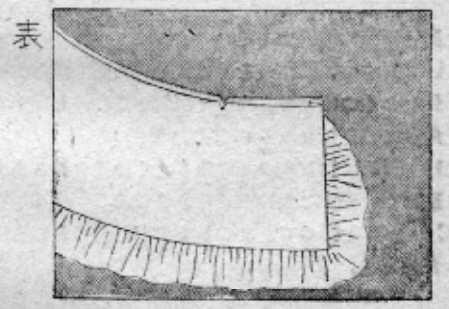
5圖・衿を飾る場合

この圖はラッフルで、衿の線を飾る場合です。圖をみればすぐおわかりのことでしようから、説明ははぶきます。たゞ衿の曲線部にしわのよらないように、縫代へ適當な間隔をおき、切り込みを入れ、ひつくり返して、プレスをするようにして下さい。

5　圖　A



B



第15章　角の作り方各種

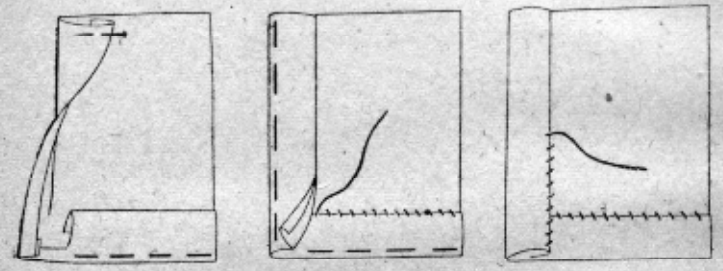
1圖・ヘムを重ねる場合

（A）　ヘムの廣さをマークしておき、下に重なる方の縫代を、圖のようにわずかに殘して、切り取ります。

（B）　内側へ返して、まつりぐけにいたします。

（C）　圖のように仕上げます。

1　圖　A　　B　　C



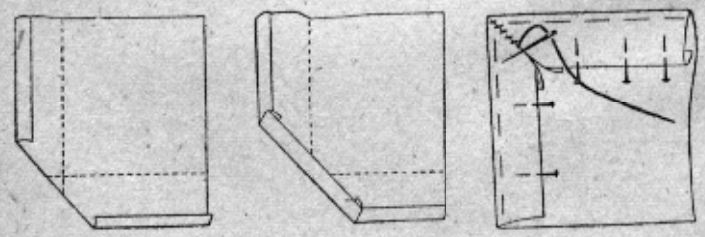
2圖・額縁の作り方（その一）

（A）　まずa、b兩端をくけ代分だけ折り込み、ヘムの廣さをきめて、折り目をよくつけます。次にこの折り目の角c點から0.5糎位のところで正三角形に布を切り取るのです。

（B）　斜めに切り取つた部分も、くけ代を折ります。この場合、折山線上に正しくc點がこなければなりません。

（C）　ヘムを折つて、まつりますが、角のところは、かけ接ぎにして、縫い合せます。

3　圖　A　　B　　C



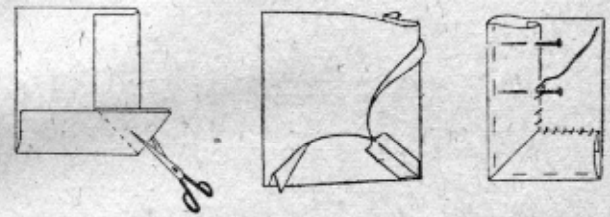
3圖・額縁の作り方（その二）

（A）　ヘムを折つて、角を縫い合せます。

（B）　次に少し縫代を殘して、圖のように切り取り、縫代を開いてプレスをかけます。

（C）　前と同様に、まつります。

3　圖　A　　B　　C

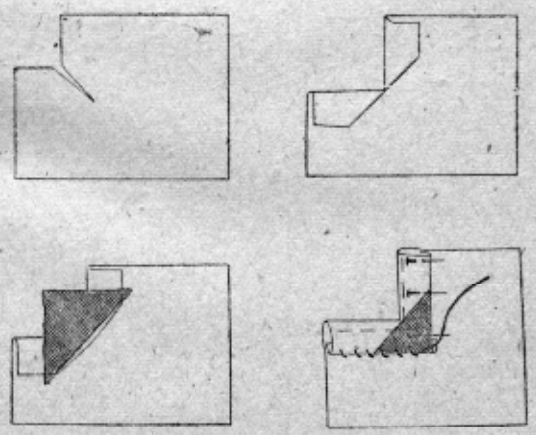


4圖・力布を用いる場合

切り替えの角は、縫代に切り込みを入れて、縫い合せただけでは、後でほつれたりしますから、力布を用います。この力布は薄地でしたら、共布のバイヤスを用いればよいのですが、厚地のものでしたら、何か薄地のものをさがして用いるようにして下さい。

（A）必要な角の寸法に切り込みを入れ、（B）表に返し、（C）バイヤス布を圖のように中表に重ね、點線部を縫いつけ、表に返してプレスします。（D）バイヤス布はヘムの中に切り揃え、くけ代を折つてまつります。

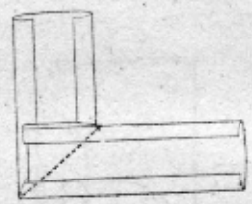
4　圖



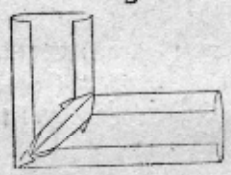
大妻圖

5圖・先に縫代は内側へ折つて、プレスしておきます。次に、（A）のように重ねて角を作り、縫い合せます。縫代の餘分は切り落して、（B）のように開き、プレスします。（C）縫代の折山にそつてミシンをかけます。

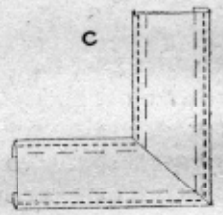
5 圖 A



B



C

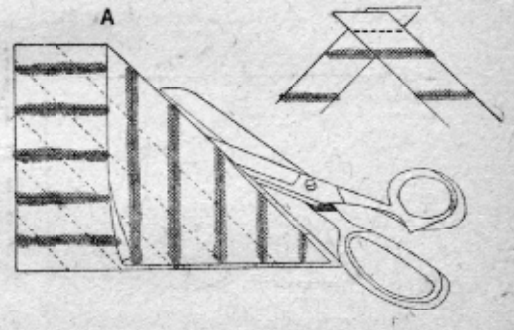


第16章　バインディング

1圖・バイヤス・テープを作る場合

バイヤス・テープは、正斜に裁つたテープで、曲線になつた裁ち布の始末または見返しや玉縁として用いるほか、袖附や衿附の縫代の始末など、非常に使い道の廣いものです。バイヤス・テープとして賣つているのもありますが、共布や有り合せの布で作ると、幅も思い通りに出來て便利です。圖に示すようにたて糸とよこ糸とが平行になるように、三角に折つて裁ち切り、この線に平行に好みの幅のテープを切ります。接ぐ場合は、（B圖）のように二本の裁ち切りを重ね、角から角まで縫つて、縫目を割ります。この場合、兩側の裁ち切りが、直線に續いていなければなりません。テープの兩端は、直線を通して眞直ぐに裁ち落します。接ぎ上つたバイヤスは、輕くのばしてプレスをかけます。

1 圖　B

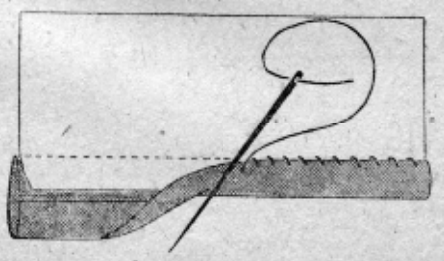


A

2圖・一重玉縁

バイヤスで裁ち目を包むのが、玉縁（フレンチ・バインディング）です。これはバイヤスを縫い付ける方の側には、縫代をとる必要がありません。一重玉縁は、厚地のクレープデシン、サテンクレープ、木綿類、薄地ウール地などに用います。バイヤス・テープの幅は、出來上り幅の四倍として裁ち目を揃えて中表に重ね、出來上り幅の縫代で縫います。その縫代は心持細く裁ち落して、縫代の裁ち目と突合せにして折り、更に二つ折りにし

2 圖



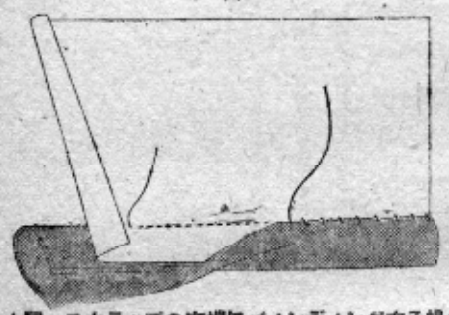
ます。次に裏側で縫目の上をまつつてゆきます。この場合注意せねばならないことは、バイヤスの縁の折山において、縫代とテープの裁ち切りとが同じ幅に、そして山のきわまでいつぱいになることと、まつるときしつけをかけないようにすることです。かならず2、3糎先きで縫代を折り、この間を針先きで無理のないように平らにくけるのです。

★くける代りに、裏側へ折り返える方の幅を、少し廣目にして、表から縫目ぎわにミシンをかける場合もあります。

3圖・二重玉縁 (French Binding)

ジョーゼットやボイル地のような、薄ものの縁をふつくらと整えるときには、二重玉縁にします。これは斜め布（バイヤス）を出來上り幅の約六倍に裁つておき、外表にして二つ折りにし、アイロンで折りをつけて、布端を三枚一しよに縫い、輪の方を縫目にそつてくけてゆきます。

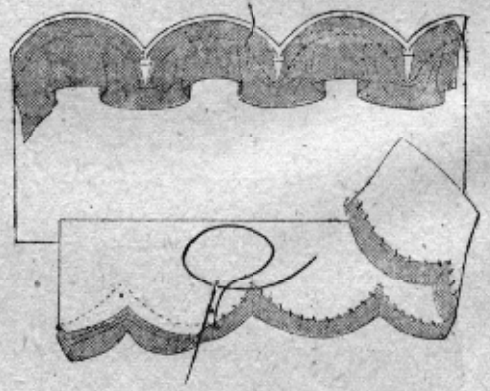
3 圖



4圖・スカラップの布端にバインディングする場合

スカラップの布端へ、バイヤスを縫い合せるのですが、この場合山の部分では、バイヤスをゆるめ加減にして、反對に谷の部分では、つらせて縫いますと、きれいに出來上ります。縫えましたら幅をせまく裁ち落して、縫目にそつてまつつてゆきます。

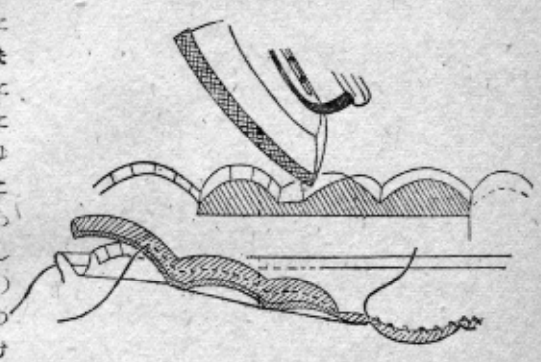
4 圖



5圖・スカラップにバイヒングする場合

厚紙を用いて、スカラップ（扇形）に合せて型紙を作ります。この型紙を下において、圖のように布端をプレスしてゆきます。終つたらこいへ、表側にごくわずかに出る程度にして、PIPE（パイプ）を假縫いし、折山のきわにミシンをかけます。

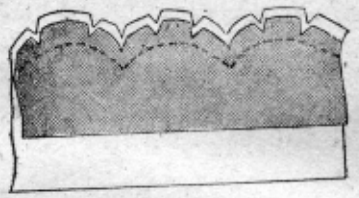
5 圖



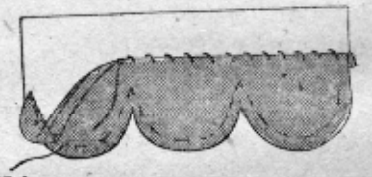
第17章　見返しのつけ方種々

1圖・スカラップへつける場合

1 図 A



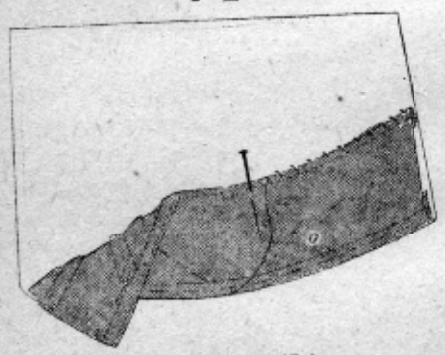
B



眞直ぐな見返し布は、中表に合せて假縫いし、地布の波形に合せて、きれいに切り取ります。この端から0.3糎位下に、縫目の線を描き、本縫いに入ります。この場合、谷の部分を縫うときは、補强のために二針づつ縫います。縫えましたら、山と谷の部分に切り込みを入れて、見返しは裏に返し、くけ代を折りこんでまつります。

2圖・ヘムに見返しをつける場合

2 圖

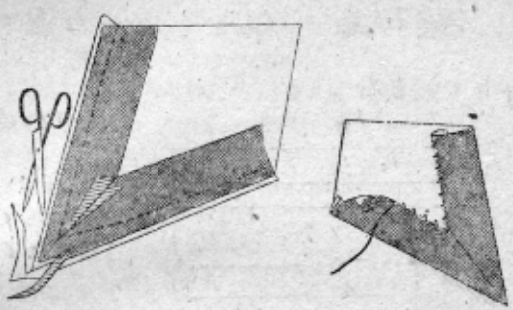


この場合は幅の廣いバイヤス・テープを用意いたします。これを布地と中表に合せてミシンをかけ、縫代は出來るだけ細く裁ち落して開きプレスします。そうして縫代の廣さだけ、表をみかえしにして、折山ぎわに假縫いします。それからバイヤスの端を折つて、まつつておきます。

3圖・角に見返しをつける場合

バイヤス・テープを中表に重ね、角では外周がつれないだけつまんで、ミシンをかけます。次にこの斜めにつまんだところも、ほつれないように二回ほどミシンをかけて接ぎ合せます。つまんだところは、縫代を切り開いて、縫代は全部細く裁ち落します。それから表へ返えしてまつることは前と同樣です。

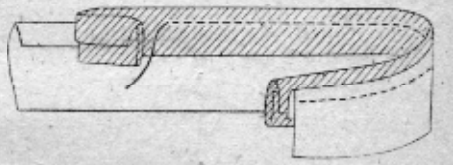
3 圖



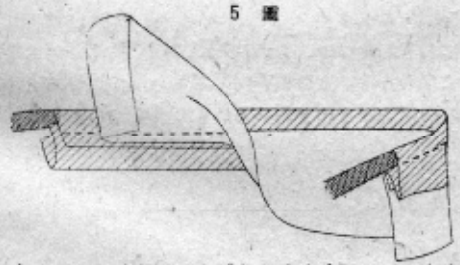
4圖・パイピングで見返しもかねる場合

パイピングは色違いのバイヤス・テープをはさんで飾る方法です。テープは必要な幅に切つて、アイロンで折りをつけますが、裏に出る方の縫代は、中に入る方の二倍の幅に折ります。表からミシンをかけてもよいときは、上側の布の縫代を折り、テープをわずかにのぞかせてしつけをかけ、ごく端にミシンをかけます。表からミシンをかけたくない場合は、上側になる方の布に、テープの折山を出來上りのしるしに突き合せて、3粍幅にミシンをかけ、次に下側の布と重ねて、さきに縫いつけた針目とならべてもう一度ミシン縫いをします。（5圖）は、このテープへ紐を包んで縫い合せ、ふつくらとした感じを出すもので、これを仕上げるとき、コーディング・フット（Cording foot）を用いると便利でしよう。

4 圖



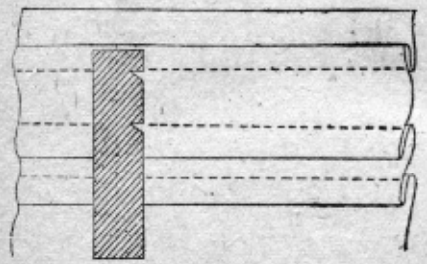
5 圖



第18章　タックとダーツ

タックには二つの目的があります。一つは装飾のためであり、もう一つは、ぴつたりさせたり、必要なところへ、餘裕を持たせたりするために用いられる方法です。

1　圖



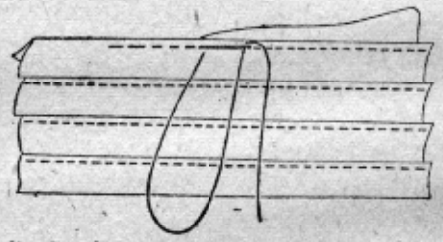
1圖・タックをとる場合

その深さと間隔とをしるしした厚紙のゲーヂを必ず用いるようにして下さい。

2圖・ハンドラン・ピンタック

位置がきまりましたらプレスをして、しつかりと折をつけます。この線にそつて圖のように小さくタックをとつてゆくのです。

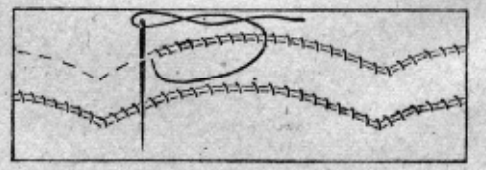
2　圖



3圖・オーバー・ハンド・タック

タックを取りたい幾にしるしをつけ、これにそつてごく淺くかがり縫いをして、タックを取つてゆきます。この場合同じ深さを保つように注意して下さい。糸の色は布と對照的なものを用いるのも面白いでしよう。

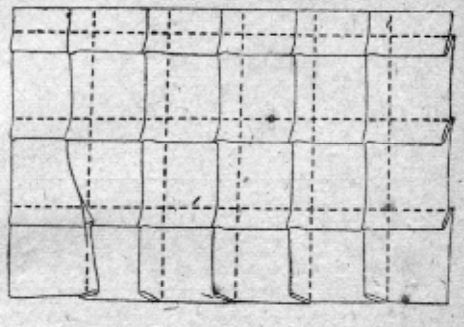
3　圖



4圖・クロスッド・タック

こんな場合は、まず同じ方向へ走るタックを仕上げてしまい、それが終つてからクロスする方のタックを作ります。

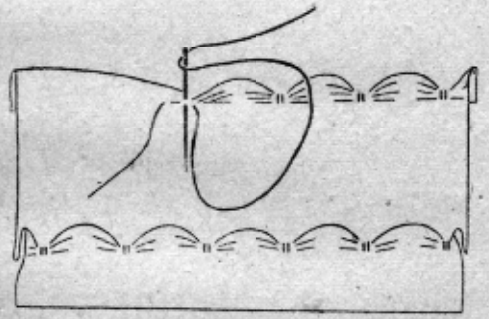
4　圖



5圖・シェル・タック

タックの折り目をつけたあと好みの間隔をおいて、小さくしるしをつけます。シェルの長さはだいたいタックの深さの二倍位が適當でしよう。タックの假縫いが終りましたら、圖のように二針づつ、からげ針を中に通して、次の點へと進みシェルを作つてゆきます。

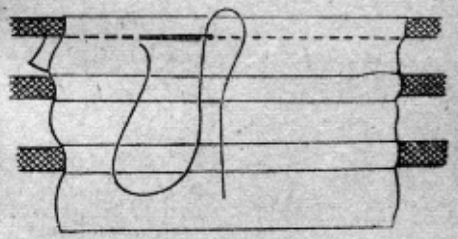
5　圖



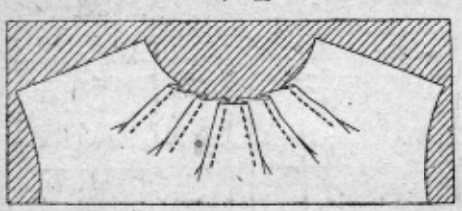
6圖・コーデッド・タック

これはタックの中に紐を入れて、ふくらみをもたせる場合です。附屬品として、コーディング・フット（Cording foot）がついておれば、便利ですが、手縫いでランニング・ステッチをされてもよいわけです。

6　圖



7 圖



7圖・ファン・タック（扇のタック）

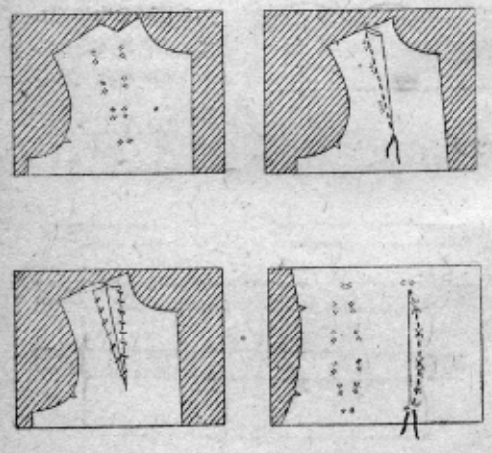
これは装飾として用いられる方法で、手縫い又はミシン縫いで仕上げます。

8圖・ショルダー・タック（肩のタック）

肩のタックは胸のふくらみを出すため用いられる方法で、圖のように糸でしるし（このマークのつけ方は、第6章1～2圖を参照）をつけてから縫います。

8 圖

9 圖



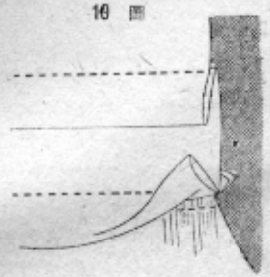
9圖・肩及び腰におけるダーツ

ダーツというのは縫い消しにするタックのことなのです。この方法も8圖と同様、糸じるしをつけて假縫いし次に本縫いといつた順序でいたします。縫つたダーツはどちらか一方へ寄せてプレスすれば、出來上りです。もし厚地の場合は切り開いて、両側をオーバーキャスト・ステッチで縫い付けプレスするのがよろしいでしよう。

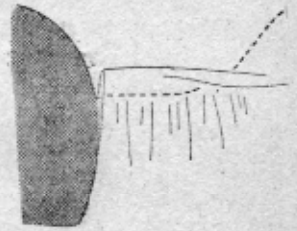
10圖・縫目にかぶせるタック

これは布の縫目がかくれるように、縫目のすぐ上へ圖のように作るタックなのです。

10 圖



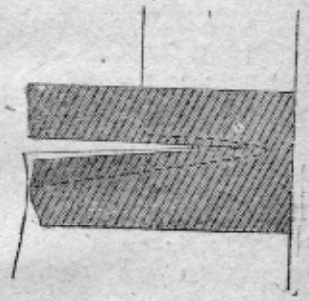
11 圖



11圖・タックを曲線にとる場合

タックの深さをマークして、假縫いしますが、カーブの外側へ、十分襞を取らなければなりません。

12 圖 A



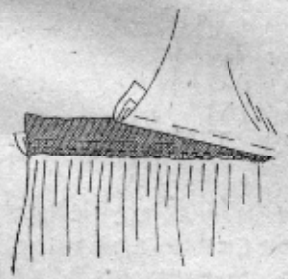
12圖・切り込みの片側へギャザーを入れる場合

（A） 中表にして當布をあて、切口のアウトラインを描き、圖のように縫いとります。

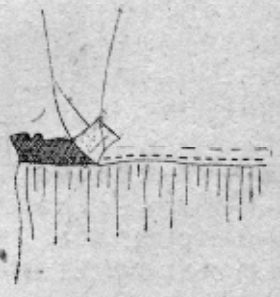
（B） 鋏で切り込みを入れて、上の切り口は裏側へ折り、下側は上に合せてギャザーをほどこします。

（C） ギャザーをした布の上に、表からステッチをかけ、裏側は圧つれないようにかがつておきます。

B



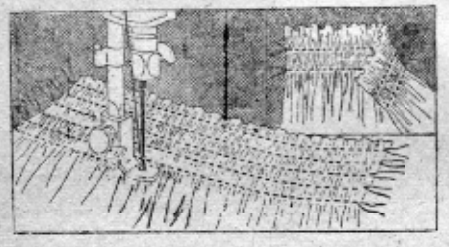
C



第19章　ギャザーとシャーリング

1・シャーリング

同じ場所に二つ以上されたギャザーを、シャーリングとよんでおります。ギャザーは手縫いの場合、針目の短いランニング・ステッチを用い、ミシン縫いの場合は、ギャザリング・フットを用いるのが理想的です。圖はギャザリング・フットを用いてのシャーリングです。もちろん普通のフットでも出來ますが、この場合糸の調子はゆるめ加減にしてミシンをかけ、一端はよく縫い止めてから下糸を引きます。彈力性のある糸を使う場合は、これを下糸にし、ボビンに張りを平均させながら、注意深く巻きつけます。上糸は比較的強い絹又は木綿糸を通して縫つてゆきます。

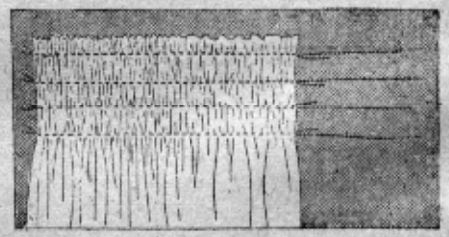


2・ギャザー

1圖・ギャザーする場合

ギャザリング・フットを用いるのが一番手際よく、早く出來ますが、普通のフットを用いるのでしたら、下糸に強目の糸を用い、上糸の調子をゆるめて縫い、下糸を引けばよいのです。

1 圖

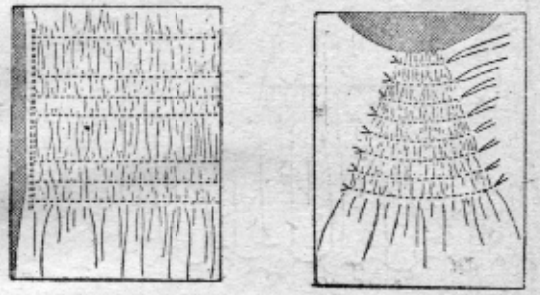


2圖・ギャザーを留める場合

ギャザー及びシャーリングを留める場合は、（A）のように兩端をミシン縫いで止めてしまう方法と、（B）のように裏側へ上の糸を引きながら調節し終つたところで、上下各列の糸を、互いに結びつける方法とがあります。

2 圖

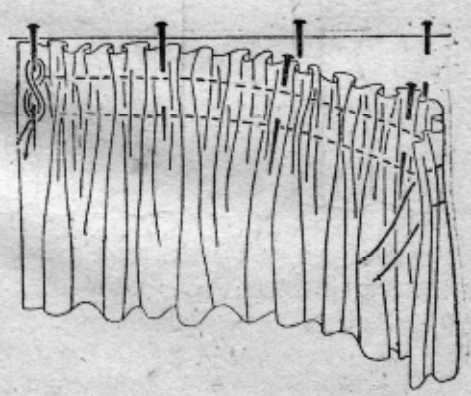
A　　B



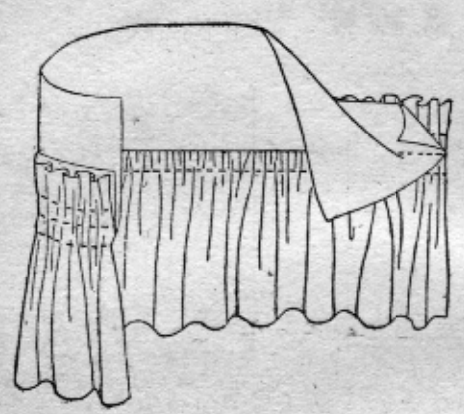
3圖・一定の間隔におさめる方法

一定の間隔にギャザー及びシャーリングを、おさめるには、あらかじめ縮める方の布を、四から五に等分し、ピン又はチョークでマークをつけます。次に縫いつけられる方の布も同數に等分して、しるしをつけておきます。縫い縮めましたら、兩方の布のマークを合わせながら糸を引き、ピンで止めてゆきます。引いた糸は兩端のピンに巻きつけ、ギャザーを止めておき假縫いします。

3 圖 A



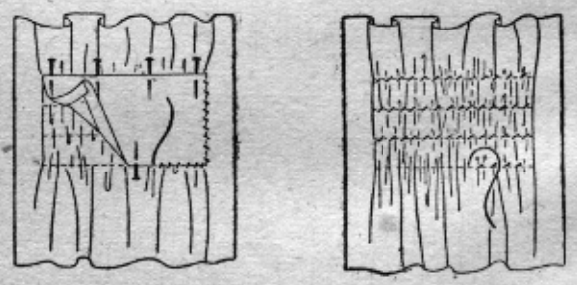
B



4圖・ギャザーを固定させるには

（A） ギャザーを固定させるには、固定させたい大きさに當布を作り、ギャザーされている部分の兩端を少し内側に折り込みます。そして當布にもヘムを取り、圖のようにまつりつけます。

4 圖 A　　B



（B） 當布を用いるのが具合があるければ、圖のようにギャザーの糸目の上から小さくかがつてとめる方法と、ミシンでもう一度上から、ステッチをかける方法とがあります。

第20章　明きの始末

1・ドレスの脇明き

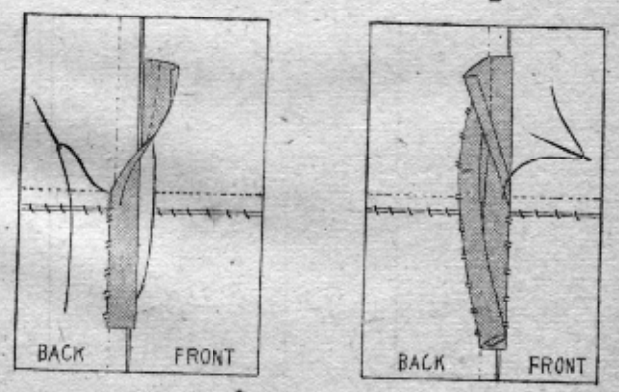
脇縫いは普通、割縫い、片返し縫い、又は袋縫いにいたします。斜め布を用いたドレス以外は、左に脇明きを作らなければなりませんが、二枚の布で持出し見返しをつける場合と、一枚の布で前後を續けて始末する場合とがあります。

明きの見返し布は、表が厚地でないときは、共布でもよいのですが、厚地の場合は、同色の薄地ものを使います。又あまり薄すぎる場合は芯を入れて下さい。いずれにしても、見返し布には必ず布のたて地を用いるようにいたします。

（1） **前後の身頃を別々に始末する場合**（薄地又は普通の地質）

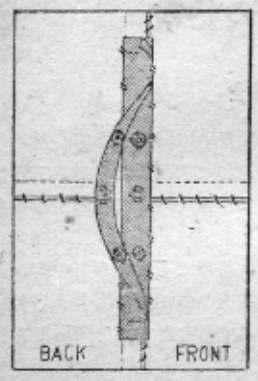
（A圖）・持出し布は幅を4.5糎、長さは脇明き寸法より2糎長く裁ちます。これを後身頃へ中表に合わせ、持出し布は7粍の縫代で、身頃の方は出來上りしるしより2粍幅を持出し布丈いつぱいに縫います。縫えましたら、中心線を折山にして縫代を1.5糎幅にくるみ、縫目にそつて、まつりつけます。

A　　B



（B圖）・前身頃の方は、見返しで仕上げますから、この幅は、裁ち切り3糎にいたします。まず見返しの出來上り幅が、持出しの幅と同じにな

C



るように兩端を折ります。次に前身頃の表側に見返し布を合わせて、出來上りしるしから1粍ほど外を縫い、見返し布をごくわずかひかえて、まつりつけます。

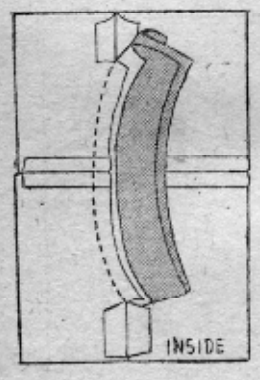
（C圖）・持出し布と見返し布の上下兩端を縫い合わせて、後身頃の方へ倒してかがつておきます。用來上りましたら、眞中に鈎ホックをつけ、上下にスナップをつけて仕上げるのです。

★以上は脇の縫代を片返しにする場合ですが、袋縫いの時は、一度目の縫代に切り込みを入れればよいのです。

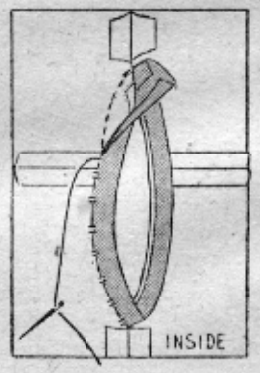
（2） **前後を續けて始末する場合**（厚地）

（A圖）・幅4.5糎、長さは脇明きの二倍より2糎長い見返し布を用意いたします。脇の縫代は脇明きの上下で切り込みを入れ刺つておきます。見返し布の一端は、身頃の縫代と同じ幅（1.5糎）に折り曲げ、圖のように脇明きへ中表に重ねて縫い合わせます。

A



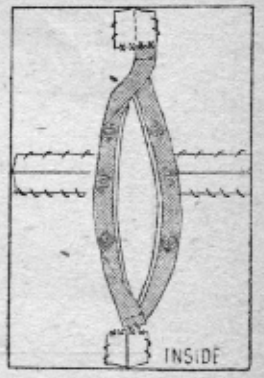
B



（B圖）・見返し布の中心を折山にして、くけ代を折り、縫目にそつてまつりつけます。

（C圖）・見返し布の兩端は、合わせて、縫い止めいたします。なお上端は前身頃へかがつておきます。そして脇の縫代は、千鳥がけで身頃へ止めておきましょう。

C



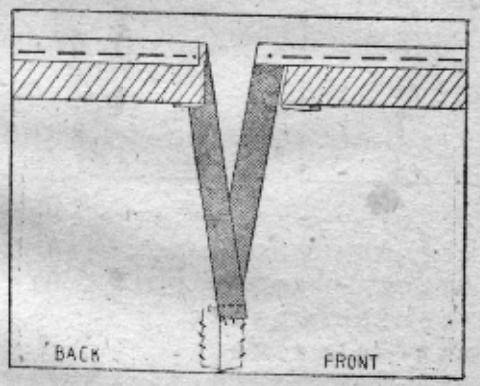
2・スカートの脇明き

（1） **インサイド・ベルトつきの場合**

インサイド・ベルトはウエスト廻りを正確に計り、兩端に縫代の餘裕として、4～5糎とつておきます。縫代は折り返して、ミシンでしつかり縫い止めます。インサイド・ベルトの附け方には、テープを用いる方法と、用いない方法とがあります。

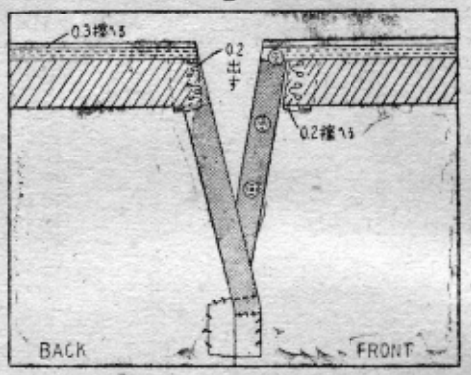
（A圖）・テープを使用する場合は、1糎の縫代の下に、インサイド・ベルトを折山いつぱいに差し入れ、縫代の中央をベルトと縫代だけ一しよにしつけをかけます。

A



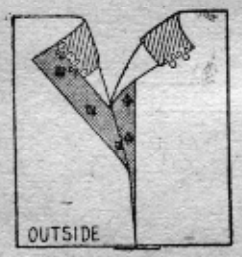
（B圖）・次に折山より3粍ひかえてテープをのせ、圖のように見返し持出しの先でテープの端を折り込み、しつけをかけてのちテープの周圍に端ミシンをかけます。終つたら圖のように、鈎ホックとスナップをつけます。

B

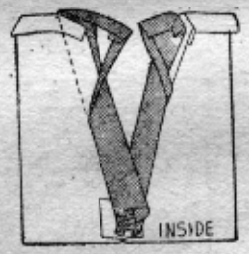


（C圖）・テープを用いない場合は、スカートの上端を縫代1糎折り込み、持出し、見返しを縫いつけ、この上部も又、スカートと同様に折つておきます。

C



D



（D圖）・インサイド・ベルトは、出來上りの折山より2粍ひかえてスカートの上にのせ、表側へは縫目が出ないようにミシンをかけます。

★いずれの場合でも、ベルトの兩端は、持出し見返しのところで、ぴつたり合うようにしなければなりません。

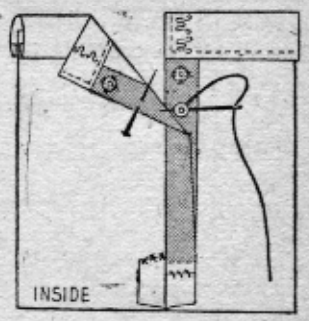
（2） **ウエスト・ベルトつきの場合**

（A圖）・スカートの脇明きの始末は、ドレスの脇明きを應用すればよいのですが、薄物は見返し布に、テープを吊ります。テープは幅1糎のたて地で長さは脇明き寸法より1糎長いものを用意し、略した千鳥掛けで、身頃につり加減につけます。

（B圖）・見返し布の下端は、縫代を包み、持出し、身返しを一しよに

A

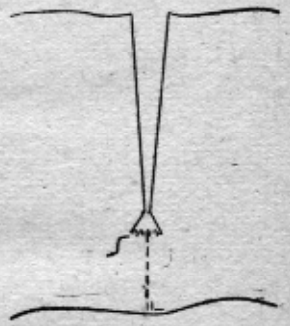
B



前身頃側へかがりつけます。終りましたら、ウェストバンドとホックをつけます。

（3） **襞をとつて明きを作る場合**

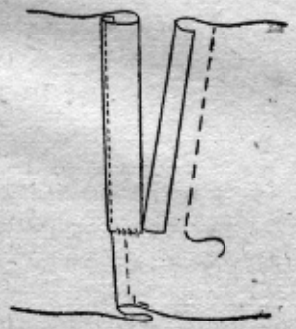
A



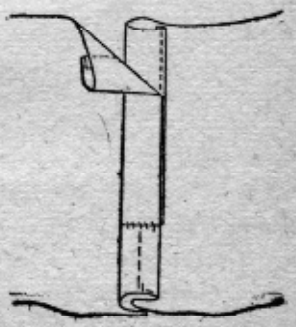
（A圖）・これは主にベビー服などに用いられる方法で、まず圖のように適當な深さに切り込みを入れ、この下に兩側へ同じ長さに横へ鋏を入れて、この分だけかがつておきます。この長さは、出來上つたときの持出し、見返しの幅を決定するのです。切り込みを入れましたら、この分だけ左右に折つて開きます。

（B圖）・圖のように先に見返し側を折り、縫いつけます。そうして切

B



C



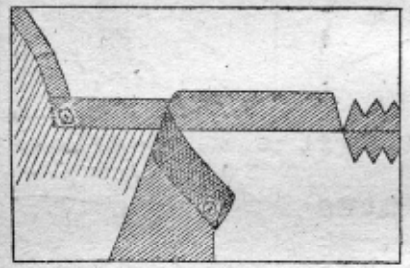
り込みの下は、襞をとればよいのです。

（C圖）・もう一つ持出し側へ襞を折り、左右の明きを仕上げ、下端は全部一しよにかゞつておきます。

3・肩明きの作り方

（A圖）・前身頃側は見返しで、後身頃側は持出しを作つて仕上げるのですが、布に餘裕のあるときは、身頃の縫代に續けて、裁ち出してもよいでしよう。たゞし横地になりますから、のびやすい布は、テープを吊らねばなりません。作り方はワンピースの脇明きと同様にいたします。

A



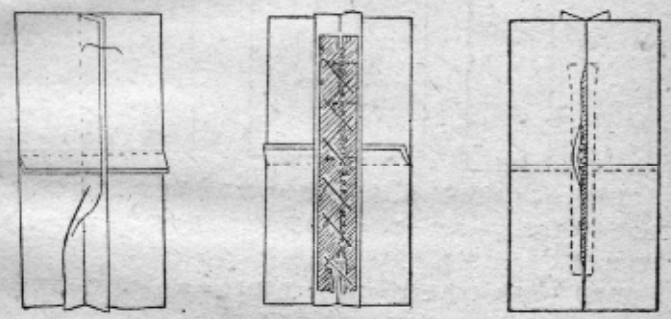
第21章　ファスナーの附け方

1・ブレン・スィーム・オープニング

（A圖）・圖のように假縫いののち、縫目を開いてプレスをかけます。

（B圖）・この縫目にそつて、ファスナーを眞中にしておき、右側からピンで止め、あらい千鳥掛けで縫いつけて下さい。

A　B　C



（C圖）・表からファスナーの齒のきわへ、四方にミシンをかけます。仕上りましたら、假縫いの糸を抜きます。

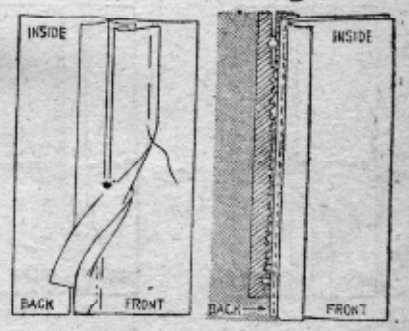
2・ファスナーを縫目の中へかくす方法

（1）スカート及びズボンにつける場合

（A圖）・假縫いの後、縫目は開いて、プレスをかけます。縫代が1.5糎より少ない場合は、圖のように見返し布を、つけねばなりません。

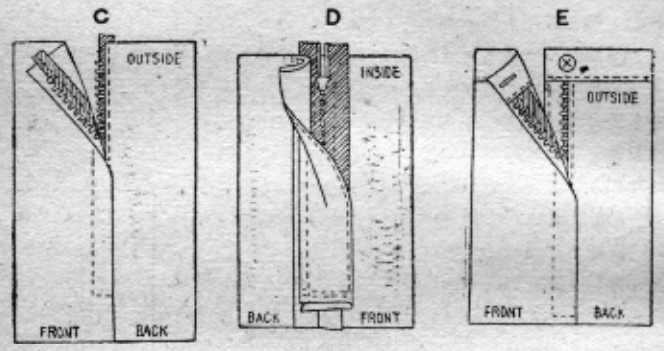
（B圖）・後身頃の縫代は、7粍ほど殘して折りまげて、プレスします。そしてこれにファスナーを、假縫いしますが、ファスナーの齒は、布の上端より1糎ほど下へく

A　B



るようにして下さい。

（C圖）・次に前身頃をおこして、表側からファスナーの、他の側を假縫いします。本縫いはミシンで圖のように、下端で縫代と共に縫いつけます。

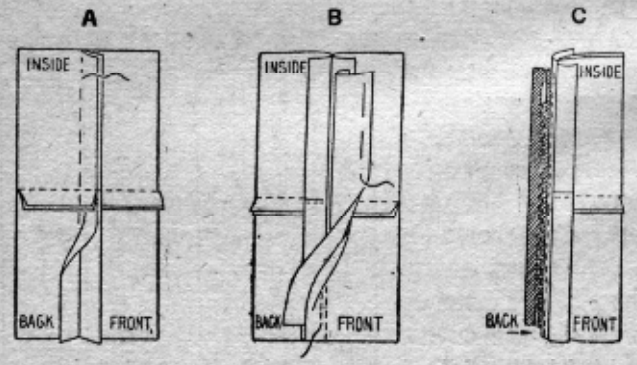


（D圖）・これは内側から、當布を縫いつける場合です。この布幅は、二つ折りにして、ファスナーのかくれる廣さにし、長さはファスナーより、1糎ほど長くいたします。

（E圖）・假縫いの糸を抜いてのち、上端はウエストバンド、あるいはベルトで、ファスナーの上部をくるんで仕上げます。

（2） **ドレスの脇明きにつける場合**

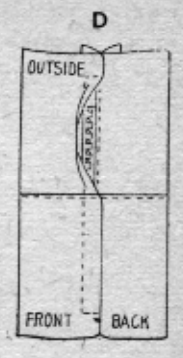
（A～B圖）・まず假縫いのあと、縫目を割つてプレスをかけます。縫代が1.5糎よりも少ないときは、見返し布をつけて下さい。見返し布の長さはファスナーと同じ長さに切つて、3粍見返えるように、前身頃の脇



明きへ縫いつけます。そして一方はくけ代を折つて、しつけでおさえておきます。

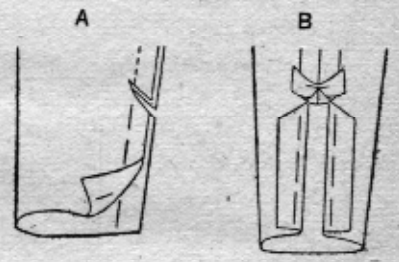
（C圖）・縫い合せた線より、7粍ほどのこしておき、圖のように折つてプレスします。次にファスナーの上端を脇明きの上端から1糎ほど下げて、ファスナーの歯を出來るだけ折山につけて、假縫いして下さい。本縫いは、表側から折山ぎわにミシンをかけます。

（D圖）・次に前身頃をおこして、表側から假縫いしたあと、ファスナーの歯のきわにミシンをかけます。下端は圖のように、縫代と共に縫いつけます。



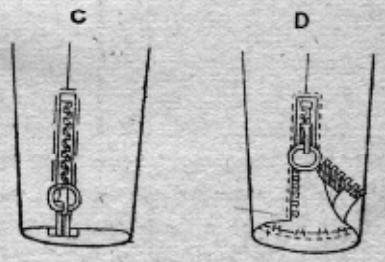
（3） **袖口につける方法**

（A圖）・開き口の長さは、そこにつけるファスナーより2糎長く、マークをしておきます。次に裏へかえして、明き止まりに向つて斜めに、縫目よりも3粍深く切りこみを入れます。



（B圖）・袖下の縫代を開いて、プレスをしたあと、開き口は、切り込みいつぱいに割つて、假縫いします。なお明き止まりの上端は、上へ折り返して止めて下さい。

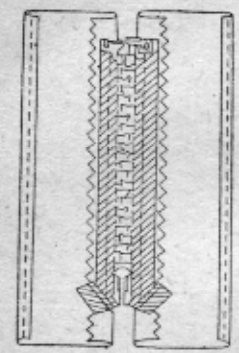
（C圖）・表に返して下からファスナーを取りつけ、鏡の端は、1糎ほど袖口から出るようにしてピンで止めます。この場合、あき口の折山は、ファスナーの歯のきわに、こなければなりません。これで位置がきまりましたら、假縫いによつて、縫いつけます。



（D圖）・この假縫いにそつて、折山きわにミシンをかけます。そして袖口はファスナーテープを中につつみ、縫い代を折つてまつりつけます。

（4） **とりはずしの出來るファスナーの附け方**（ドレス及びヂヤケット

A



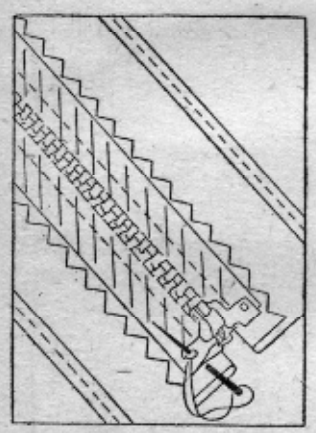
につける場合）

こういう型のファスナーを、とりつける方法として、最も簡單で、その上美しく仕上げるのには、圖のようにファスナーを、當布と衣服の間にはさむ方法がよいでしょう。

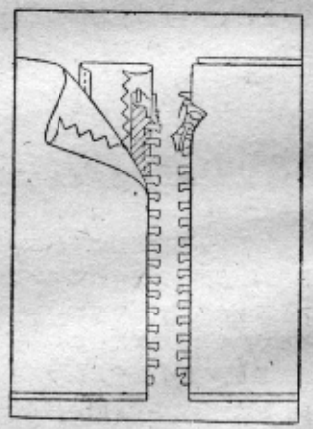
（A圖）・身頃に合わせて、二枚の當布をつくり、各〻の端を折り込みます。一方は端ミシンをかけて縫代をおさえ、他方へはファスナーテープを假縫いします。

（B圖）・假縫いが終りましたら、次にファスナーの下端を、當布へしっかりとつけるのですが、もしも圖のように、下端が金屬製で、穴のあるものでしたら、丈夫なテープか、あるいは太い目の強い糸を穴へ通して、當布にとじつけます。布製のものでしたら、穴の周圍をかがりつけるようにいたします。

B



C



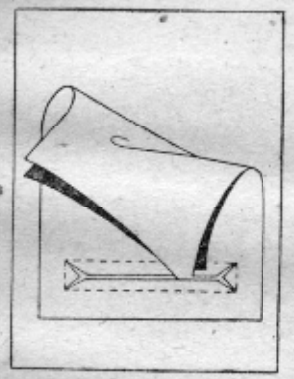
（C圖）・次に身頃の方を折りこみます。出來上りの折山は普通よりも3糎（ファスナーの齒の½幅）せまくして、縫代を折つてしつけをかけプレスして下さい。（つまり身頃の方が3糎づつせまくなるわけです。）出來ましたら、まず一方の側へ、ファスナーを閉じたまま、齒は折山につけて、當布と身頃の間にはさみ、假縫いしてから、ファスナーを開いて、本縫いをします。

★もしもファスナーの齒を、見えないようにしたいときは、身頃の出來上り線は普通にして、縫代は、齒の分だけ多くします。この場合、折山はファスナーの齒の中央で合うわけです。

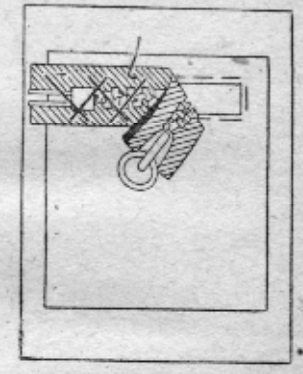
（5） **ポケットにつける方法**

（A圖）・まず身頃の方へ、ファスナーの長さよりも5糎ほど長く、ポケットの開き口を、マークしておきます。次にポケットの外布の上端から1.5糎下り、長さは身頃と同樣に5糎長く、ポケットの、しるしをつけて下さい。そしてこのマークを合わせながら、中表に重ねて、假縫いをして位置をきめ、中心から3粍づつの縫代で、周圍にミシンをかけます。縫え

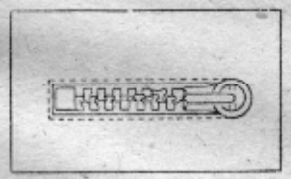
A



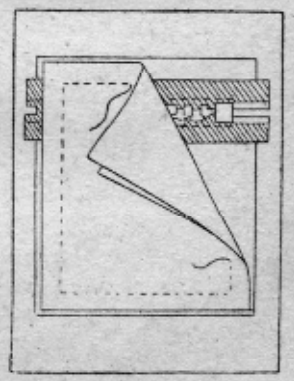
B



C



D



ましたら、圖のように中心を切り開きますが、兩端は角へ斜めに、鋏を入れます。

（B圖）・ポケットの開き口は、しっかりと返してプレスをしてからしつけをかけます。ファスナーは閉じたままこゝにはめるのですが、ファスナー

の歯は折山ぎわに、きちんとくるようにならなければなりません。位置がきまりましたら、圖のように千鳥掛けでファスナーを假縫いします。

（C圖）・表側から、ファスナーの周圍、すなわち歯のきわへミシンをかけます。

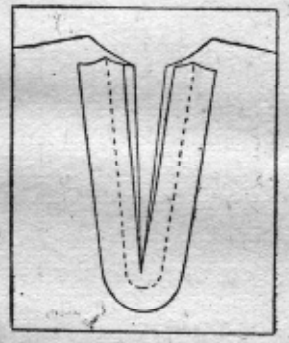
（D圖）・ポケットの内側へは、ポケットの内布を、中表に重ねて、まわりを縫つて、ポケットを作ります。この場合、ポケットの下の方の角は、少し丸みをもたせた方が、ごみなどがたまらなくてよいと思います。また二重縫いにしておくと、ずつと丈夫になります。

第22章　前明きの作り方

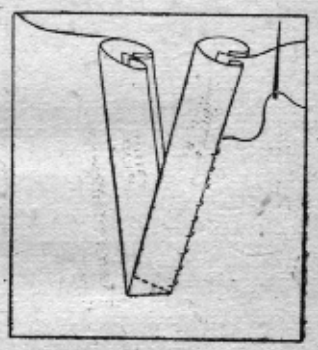
1・まわしづけ（その一）

（A圖）・幅3.5糎、長さは明きの寸法の、二倍のバイヤス布を、用意いたします。これを身頃へ中表に重ね、身頃の方をみて、5粍の縫代で縫います。下端は身頃の縫代を、明き止まりの4糎ほど手前からだんだんに淺くして、明き止まりではまじわるようにいたします。この縫代が多いと

A



B

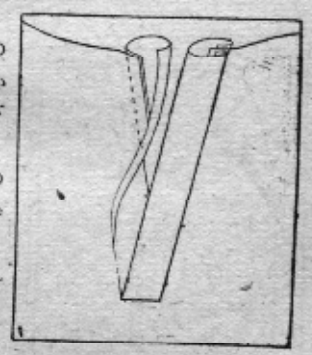


皺が出來ますから、注意しなければなりません。

（B圖）・表へ返して、幅1.2糎の四つ折りにしてまつり、明き止まりから折つて、斜めに縫い止めておいて下さい。

（C圖）・この方法は、厚地ものの場合は、見返しの方が厚くなりますから、持出しの方だけ、そのまゝまつりつけて、見返しの方は1.2糎裁ち落して、直接身頃に、目立たないように、まつりつけます。

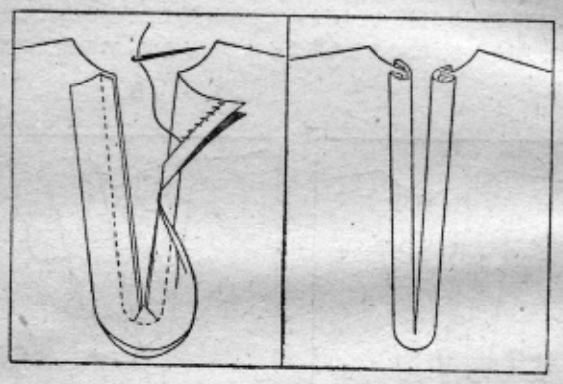
C



まわしづけ（その二）

（A圖）・幅1.2糎、長さは明き寸法の、二倍のバイヤスを中表に重ねて、出來るだけ少ない縫代（3糎）で、まわしづけをして、下端は圖のように、切りこみを入れます。この切りこみの部分へは、切る前に薄糊をつけておくと、きちんときれいに出來ます。

A　B

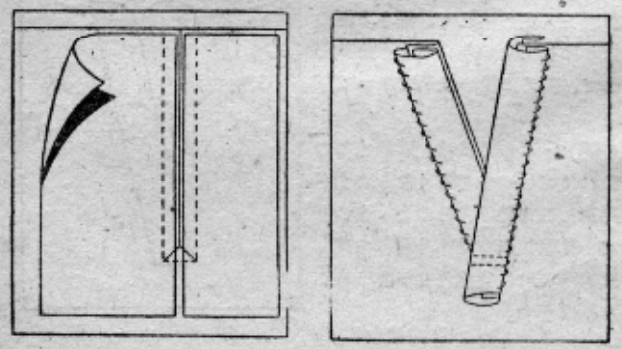


（B圖）・裏に返して、細い玉縁にとゝのえて、まつりつけます。

2・片玉縁仕立（その一）

この方法は、簡單ではありますが、片襞が出來ますから、上等のものに

A　B

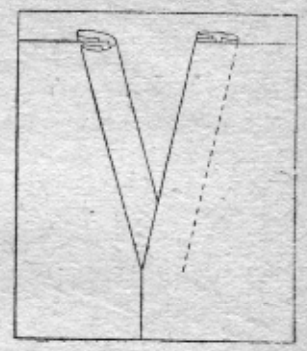


はあまり向きません。

（A圖）・見返し布の幅4糎、持出し布の幅6糎、丈はどちらも、明きの寸法よりも、2糎長くします。これを中表に、明きのしるしへつき合せにして、各〻3糎ほどの縫代で、明きの寸法だけ縫います。

（B圖）・持出しと、見返しを1.3糎幅にとゝのえてまつります。そして明き止めの下端で、持出し、見返しとを重ねて、ミシンをかけて下さい。

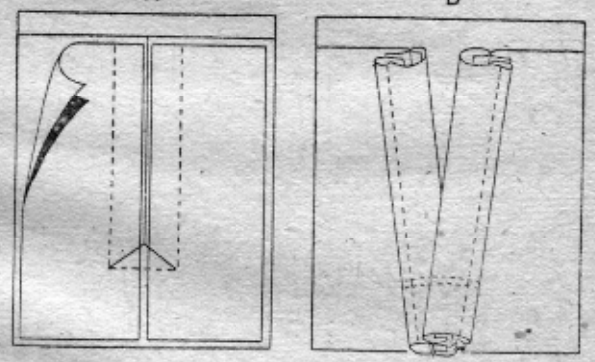
（C圖）・これは、表から見た出來上り圖です。



片玉縁仕立（その二）

（A圖）・幅7糎の見返し布と、同寸の持出し布を、身頃へ中表に合わせ、各〻1糎の縫代で、明き寸法まで縫います。切り込みは、明き止まりよりも1糎手前から、斜めに縫目のきわまで切ります。

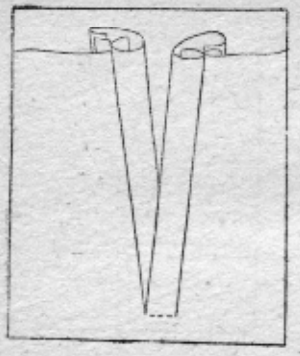
A　B



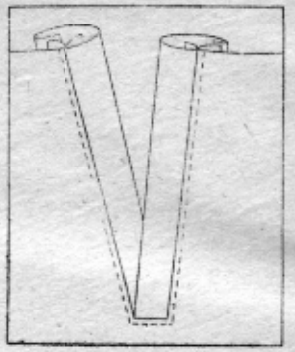
（B圖）・表身頃をめくつて、見返し布、持出し布と三角布に、ミシンをかけます。見返しと持出し布の端の始末は、織耳の場合はそのまま、裁ち目の場合は折つて、捨てミシンをかけて下さい。

（C圖）・これは表から見た出來上り圖です。（C圖）は落しミシンの場合、（C′圖）はきわミシンで仕上げた出來上り圖です。

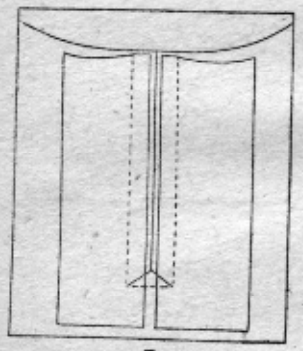
C



C′



A

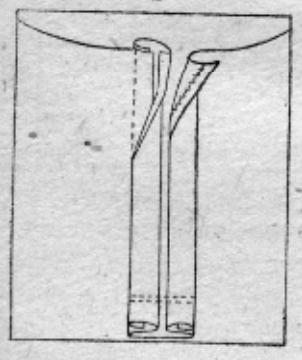


3・兩玉緣仕立（その一）

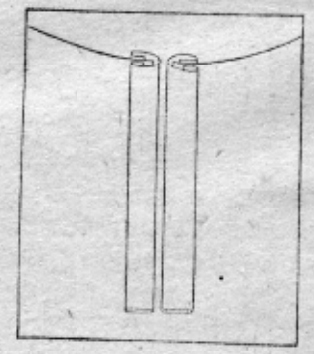
（A圖）・幅4糎、長さは明きの寸法より1糎長い、玉緣布を中表に重ね身頃の明きしるしを玉緣布にもうつして、5粍づつの縫代で縫つて、明きを切り開いて下さい。

（B圖）・玉緣布を內側へかえし、玉緣を5粍にとゝのえて、縫目にそつて、まつりつけます。三角布と玉緣布を明き止まりいつぱいのところでしつかりとミシンをかけて止めて下さい。

B



C

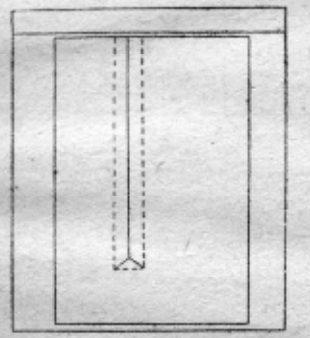


（C圖）・表から見た出來上り圖です。

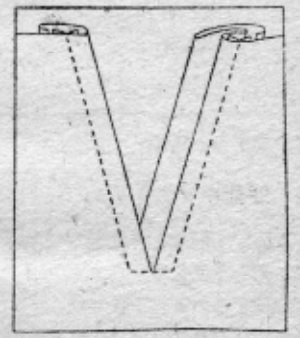
兩玉緣仕立（その二）

（A圖）・幅10糎、長さは明き寸法よりも、2糎長い玉緣布を用意して、その⅓を見返し布にして、殘りの⅔を、持出し布といたします。この境線を、身頃の明きしるしへ中表に合わせて、各々4粍の縫代で、ミシンをかけて、明きを切り開きますが、下端の三角形は、高さ4粍として、その角は、縫目の糸を切らない程度に、十分切りこんで下さい。

A

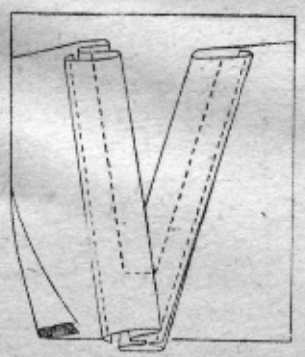


B

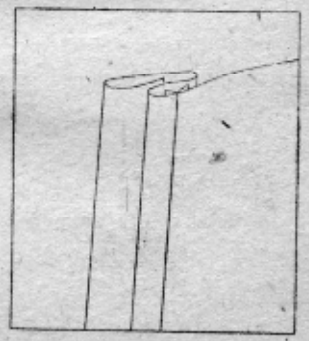


（B圖）・表へ返して、縫代は割つてプレスし、次に圖のように、幅4粍の玉緣を整えて、左身頃に1.5糎の持出しをたゝみ込んで、落しミシンか、またはきわミシンをかけます。

C



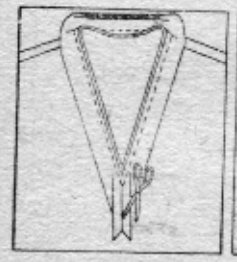
D



（C圖）・布が厚面の場合には、圖のようにたゝんでもよいのです。
（D圖）・縫代と三角布を、一しよにミシンをかけます。

4・V型ネックライン

A



B

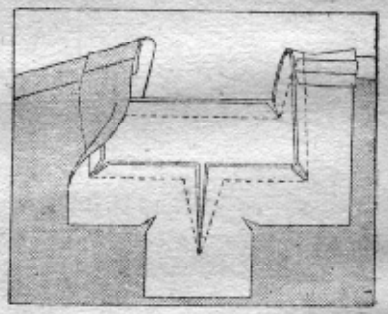
（A圖）・用意した斜め布は、中表に重ねて、ミシンで縫いつけて、下部で割り接ぎにして、縫代を切りそろえて下さい。

（B圖）・裏へ返し、端を折りこんで、スリップ・ステッチ（三つ折りぐけ）でまつります。

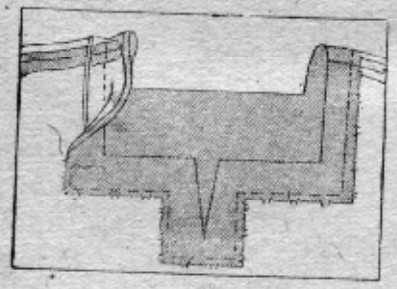
5・凹型ネックライン

（A圖）・圖のような型の見返し布を、二枚用意して、肩上で接ぎ合わせて、接ぎ代は開いて、プレスいたします　次に衿明きのしるしをマークして、中表に重ねて假縫いをし、衿刳と衿明きの周圍へ、ミシンをかけます。（衿明きの下端はだんだんに縫代を少なくして下さい）衿明きに切り込みを入れて、裁ち目はからげておきます。なお各各の角へも、縫代へ切り込みを入れます。

A



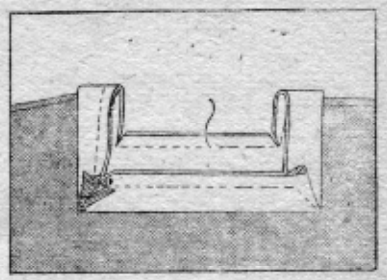
B



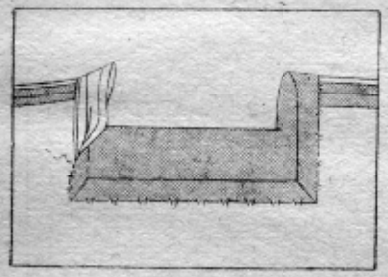
（B圖）・見返し布は、裏側へかえして、表側へ糸目の見えないように、まつりつけます。

6・角　衿

（A圖）・見返し布は、中表に重ねて、假縫いしますが、この場合、各角では圖のように縫いとるのです。この各角の縫いこみは、わずかの縫代を殘して、切り落し、接ぎ代は開いて、プレスをかけて下さい。



B



（B圖）・見返し布を内側へ返して、中へ折り込んで、表側から見えないように、まつりつけます。

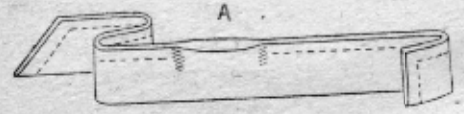
★布はバイヤスか、または衿と同じ型の、見返し布を、用いる場合があります。

第23章　ベルト及び ベルト通しの作り方

ベルトは、どんな場合にもたて布を用いて作るようにして下さい。布地の足りないときは、ベルトの内側を別布で、仕上げることが出來ます。又比較的に薄地のものの場合は、間にモスリン地などを、はさめばよいと思います。たゞしこの場合、この芯地としてのモスリンは、あらかじめ縮めておかなければならないことは、いうまでもありません。

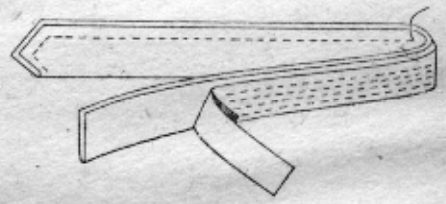
（A圖）・まず中表に、縫い合わせます。布の一端を斜めに縫い、他方の端は、表へ返すときのために、そのままあけておきます。厚地の布でしたら、圖のように、中程のところへ明きを、作つておいた方がよろしいでしょう。布の周圍は、きれいに切り揃えて下さい。

A



（B圖）・布の間に芯地（モスリン）を入れる場合は、芯地はベルト用布の½の幅に切つて、圖のようにステッチをかけておき、ベルト布の内側において布と一しよに縫いつけます。このとき一方の端は、縫い殘して、表側へ返すときの、明きにします。

B

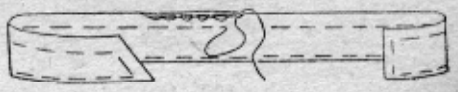


（C圖）・ベルトを表へ返すときは、ベルトの角を出すのには、オレンヂの木で作つた棒が、最適といわれておりますが、これは物指しや鉛筆の先の、丸くなつたものなどを、利用してもよいのです。

C

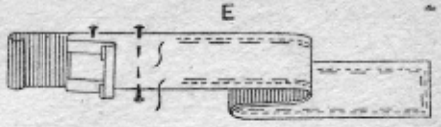
（D圖）・表へ返したベルトは、裏がふき出ないように、まわりに假縫いをして、プレスをかけます。そして明きぐちは、くけてしまいます。

D



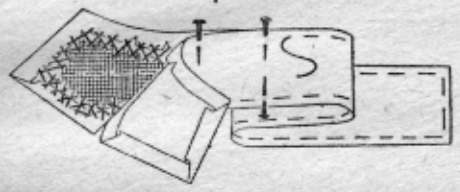
（E圖）・スティフ・ベルト（Stiff belt）の作り方。縫代は内側へ折りまげて、これへウエッブ（Webb）ベルトを、假縫いします。それが終つたら、折山ぎわにステッチをかけるのです。

E



（F圖）・布の中へ芯地を入れる、幅廣のベルトは、まず芯地を、出來上りのベルト幅に切り、ベルトに重ねて、中央に一本しつけをかけます。ベルトの端は、縫代を折り込んで、芯地をつつみます。それから千鳥掛けで、止めておきます。そこへベルトの内側の布を合わせて、假縫いしたのち、スリップ・ステッチ又はきわミシンをかけて仕上げます。

F

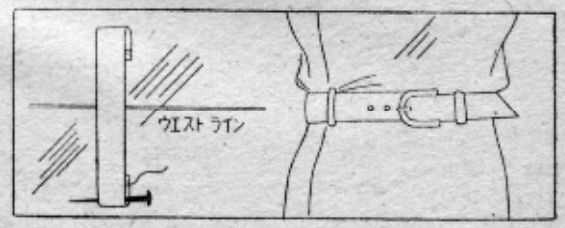


（G圖）・ベルトの仕上げ、及びドレスにつける場合は、バックルを布の一端（直角に切つた方）につけて、他の一端へは、3糎間隔位に、アイレットを作ります。そしてフレンチ・タックで、ドレスに取りつけます。

G

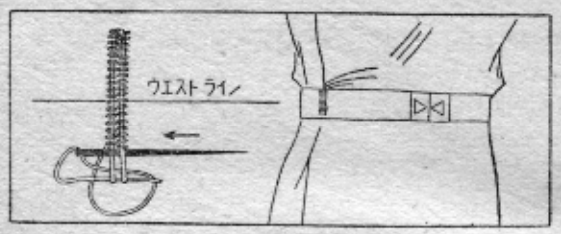
（H～I圖）・ベルト通しは、布で作る場合と、糸を用いる場合とがあります。布の場合は布ループを作り、糸の場合はベルト通しの幅に、五、

H



六本糸を渡して、ボタンホール・ステッチを用いて下さい。

1



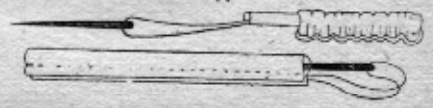
第24章　ループ

ループは紐飾りをするとき、あるいは装飾をかねた釦掛けなどを作る場合に用いられます。出來上り幅は、だいたい上等な絹ものでしたら2粍程度、普通のものでは5粍位が適當だと思います。これは布地、服の型などによつて、ちがつてまいりますが、どちらかといえばループは細い方が品のよいものです。

1圖・ループの作り方

（A）・裁ち切り幅は、出來上り幅の2倍にして、ほつれない程度の、淺い縫代をつけて、すべて正斜布に、裁たなければなりません。あまり細くて縫いにくいようでしたら、縫代を多くつけておき、縫い終つてから、切り落せばよいでしょう。

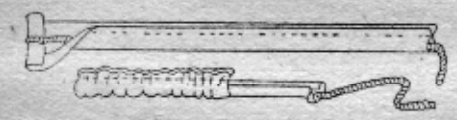
A



縫えましたら、刺繍針のような、太い針を用いて一端を縫いつけ、針のメドの方から中へ通して、しづかに引いて表へ返します。

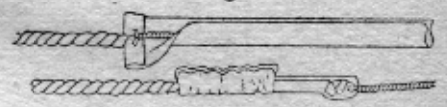
（B）・あるいは、この圖のように、布端に紐を縫いつけて、紐を中に包みこんで、紐のきわにコーディング・フットを用いて、ステッチをかけ、紐をしずかに引いて、表側へ返すのです。

B



（C）・中に紐を入れたループを作るには、細い紐と、中に入れる太い紐とを接ぎ合せて、この接ぎ合せたところを、内側へ折り込んだ布の端へ、縫いつけます。布を折つて縫い合せるのには、コーディング・フットを用い、縫い終つて、細い紐を引けば、表側へ返ると同時に、太い紐が中に入るわけです。

C

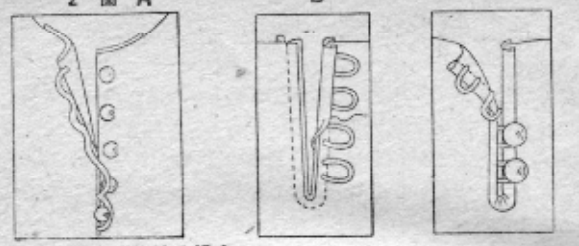


2圖・前明き背明きへループを使う場合

（A～B）・ループは、釦によつて適當な長さに切り、縫目を内側にして、丸みをつけておきます。そうして明きの兩端をくるむ、玉縁布を仕上げるときは、内側の折りこみの中に、兩端を縫いこみます。

（C）・これは表側から見た出來上り圖です。

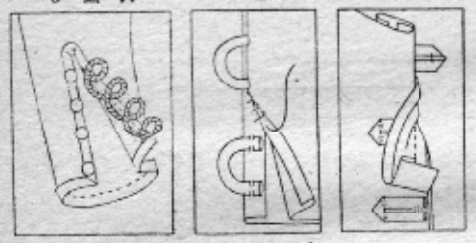
2 圖 A　B　C



3圖・袖の明きにつける場合

(A)・袖明きを縫い終つてから、普通街で賣つている打紐を、一つづつ切らずに、長いまま使つて、ループにする場合です。

3 圖 A　B　C



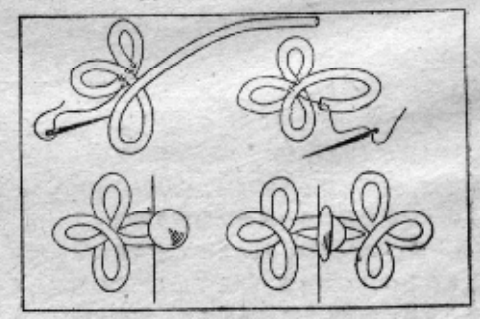
(B)・紐に入つたループを、適當な長さに切つて、内側に縫いつけ、見返し布をこれにかぶせて、細かくまつつて、仕上げる方法です。

(C)・出來上りは、(B) と同じですが、はじめ表面へループをのせて、中表になるように、見返し布を重ねて、縫いつけてしまい、見返し布を折り返すのです。

4圖・コード・フロッグス

(A～B)・裏側へ圖のように、細かくステッチをかけて、輪がくずれないようにします。ボタンにかけるループを、そのまゝにして他の三つの輪を固定します。

4 圖 A　B



C　D

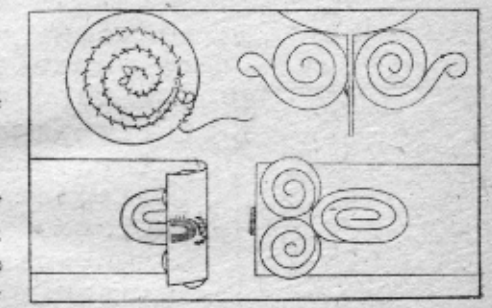
(C)～(D)・これは出來上り圖です。(D) は裝飾として、

兩側につけた場合の圖です。

5圖・コード・ファスニング（コードによる鉤のつくり方）

(A)・好みの形に、コードで飾りをつくり、裏から表へ出ないように、渡しまつりで、しつかりと縫いつけます。そして模樣がくずれないようにします。開き口へは、糸目を出さないように、縫いつけて下さい。この方法は、衿つけとか、ベルトなどに用いられるもので、ホックとホックづけを、開き口の裏につけておくのです。

5 圖 A

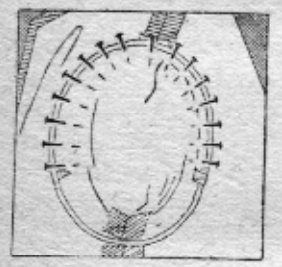


第25章　袖について

1・袖のつけ方（プレーン・スリーブをつけるとき）

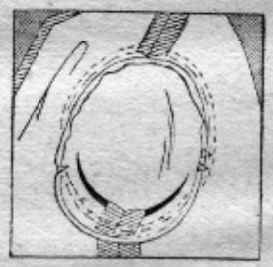
（A圖）・袖附をするときは、まず身頃の袖刳と、袖の縫代を、同寸法にきれいに裁ち揃えます。出來上つている袖を、表にして、身頃は裏返しにします。そして袖を身頃の中に入れて、合じるしを合せ、中表に重ねます。こうして位置がきまりましたら、まず袖山にピンを刺して、袖にふくらみをもたせながら、左右にピンで止めてゆきます。この袖のふくらみは、袖山のたて地の部分だけ、（袖山を中心として、左右に1.5糎位づつ）入れずに、肩山から袖刳の、もつとも深いところまで、襞がよらない程度に入れるのです。袖山のところでは、反對に袖の方を、少しつらせ加減にするのです。

A



（B圖）・次に袖の方を見ながら、少しこまか目に假縫いをします。假縫いのあと、本縫いに入るのですが、普通補强のために、二裏縫いにいたします。

B



C

（C圖）・以上が出來ましたら、テーラーズ・クッションを入れて、濕布をあてて、上部へプレスをかけます。

★ジヤケット・コートなどの、袖をつける場合は、袖山をあらかじめ、いせておかなければなりませんから、しつけ糸二本で、出來上りしるしのきわを、合じるしから合じるしまで、こまかく二回ほど、ぐし縫いしておきます。

ブラウスなどで、バイヤス・テープを使うときは薄地ものがよく、

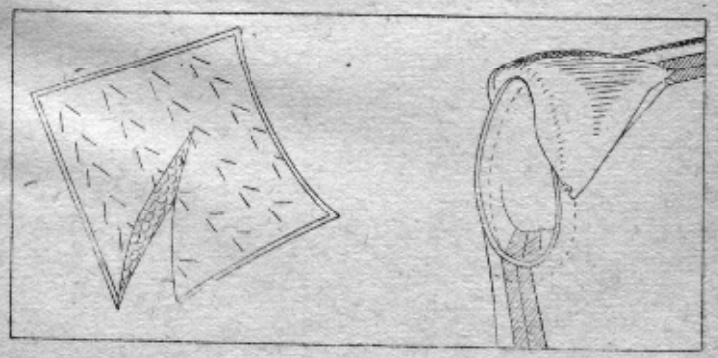
幅は出來上りが、普通7～8粍ですから、3糎位の幅にバイヤス・テープを切ります。

パットのつくときは、バイヤス・テープの幅が廣くないと、袖山に段がつきますから、袖山の方だけ、廣く折つて、袖下の方はせまくしておきます。又この場合は、袖と身頃の縫代を裁ちそろえて、こまかく丁寧に、からげておいてもよいでしょう。

2・パットの作り方

（A圖）・パット（肩臺）は、服の種類や地質によつて、多少ちがいますが、一般的なものについて、のべてみましよう。パットを包む布は、ガーゼなどの薄地で、糊氣のない、木綿ものを用います。まずはじめに、16～17糎の正方形に、綿を一枚切ります。これに次々と綿一枚ごとに、1糎ほどづつ小さいものを、つみ重ねてゆきますが、厚さが望み通りになるように、おさえてみます。（普通1糎～1.5糎ほどでしよう）厚地のものに入れる場合は、この綿の上下に、厚い布（ラシャがよいでしよう）を一枚づつのせて、硬い感じにいたします。そして望みの厚さになりましたら、鋏で對角線を切り、三角形のものを二つ作ります。それを片方づつ布で包み、丸みをつけて周圍を止め、裏側に三本ダーツをとります。次は、肩に直接あたる方の、切口をかがり、この糸を引いて、その人の肩に合わせます。丸みがきまりましたら、もう一度かたくかがり、その次は上の端を、5粍ほどにつまみます。この場合は、先の方まで、綿がきつちり入るようにして、返し針で縫つてゆくのです。あとは、「ハ刺し」をして、綿をおさえますが、周圍はうすくなるように、綿を拔いて、加減いたします。

A



大妻圖

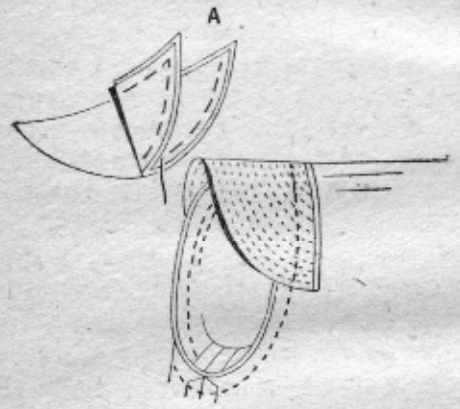
まわりの裁ち目は、ほつれないように、かがつておきます。

パットのつけ方は、袖山と肩裏の中央を合わせて、袖山のあたりでは、肩裏が1糎ほど出るように、袖附の縫代へとめて、奥の方は、肩の縫目にとじつけます。

3・肩芯の作り方

（A圖）・ギャザーや、ダーツのある袖の場合は、肩芯を用います。この作り方は、共布で長さ 15糎位の、三日月形を二枚作り、もう一枚芯地で、同形のものを作ります。まず共布の方を二枚、中表に合わせて、その上に芯地の方を重ねて、まわりを、わずかの縫代で縫い合わせ、表に返して、細かくステッチをかけて、肩上部へとじつけます。

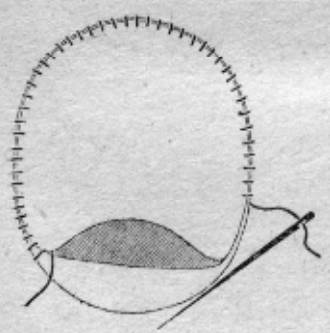
A



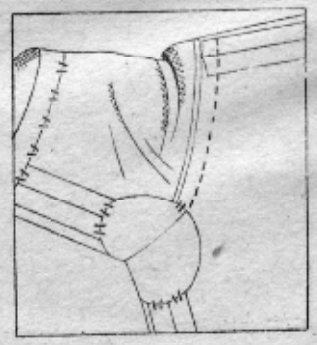
4・汗よけの作り方

（A圖）・汗よけの大きさは、圖のように腋下へ5糎、前後へ5糎づつ

A



B



の大きさです。布はガーゼ二枚合わせた程度がよろしいでしょう。

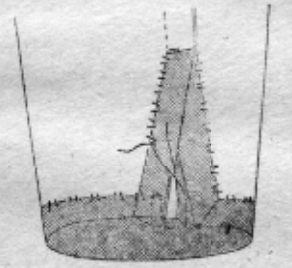
（B圖）・布のまわりに、縁をとつて、はじめ兩側を、袖つけの縫目にとじつけます。次に袖と身頃の、腋下の縫目へつけます。これはピン（安全ピン）を使つてもよいでしょう。

5・袖口の作り方

（1）・カフスなしの袖口の整え方

袖口縫代を、三つ折りにしてまつります。厚地ものは、裏側へ折り返した縫代の、裁ち目をバイヤス布で、玉縁にくるむか、又は表と共色の、薄地バイヤスで、裏見返しにすることもあります。袖先きが、フレヤーになつているものは、袖口をよりぐけで整えたり、共の斜め布を袖先きの形に

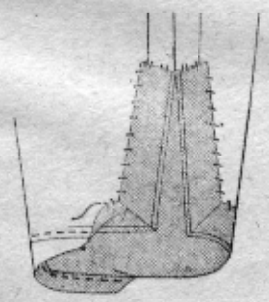
A



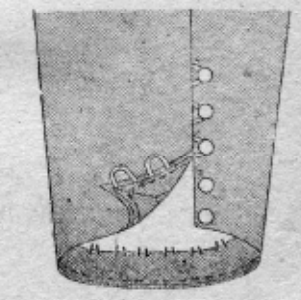
A′

合わせて裁ち、裏見返しにいたします。この場合、袖口明きのあるものは、袖口と袖下の明きに、圖のように見返し布を縫いつけます。そして釦とループをつけるか、あるいは内袖側は、見返しで、外袖側は持出しにして、スナップをつけます。

B



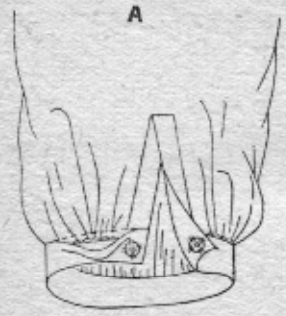
B′



（2）・袖口カフスのつけ方

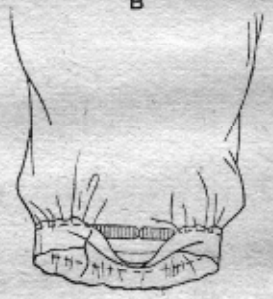
（A圖）・袖口明きは、見返し又は三つ折りにして、始末しておきます。カフスは自分の望みの幅の2倍に3糎の縫代分をつけて、丈は手首まわりに、重なり分の餘裕をとつて裁ち、カフスの幅を1.5糎ずらせて、二つ折りにし、兩端0.5糎幅を縫います。次に幅の1.5糎長い方を上にして、袖布の端に合わせて、7粍ほどの縫代で、三枚共に縫い合わせて、1.5糎長い方で、縫代を包み、まつりつけます。出來ましたら袖下を縫い、明き止まりのところに、圓留めをして、スナップをつけます。

A



（B圖）・この場合、カフスの幅は、縫代分として、1.5糎ほど加えておけばよいのですが、同寸丈のテープを、用意しておきます。テープの幅は、3糎程度でよろしいでしょう。まずカフスは、幅を二つ折りにして、兩端は縫い合わせます。次に袖布の上に、カフスをのせて、その上にテープをおき、四枚一しよに合わせて、テープで縫代を包み、まつりつけます。

B



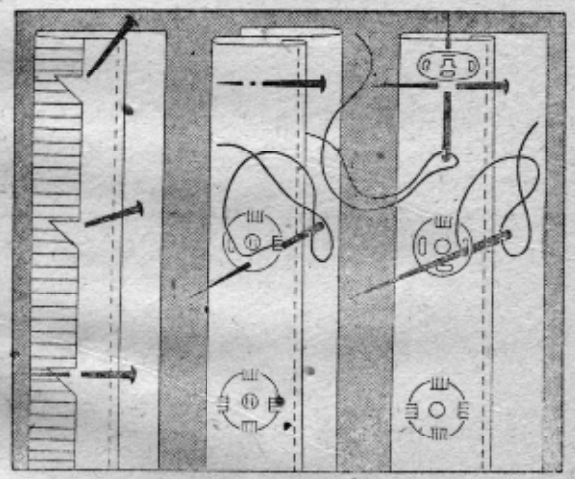
第26章　釦の附け方及び釦穴の作り方

釦のつけ方

1・スナップの縫いつけ方

（A圖）・スナップをつける間隔を計る場合は、物指しを用いて、正確にいたします。はじめに糸の結び玉は、スナップの下に入れて、ボタンホール・ステッチで、四回づつからげてゆきます。スナップは、凸形を上前に、凹形を下前につけます。

A

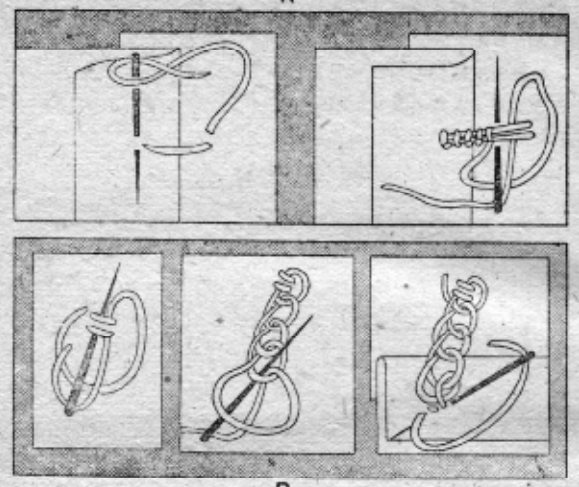


2・フレンチ・タックの作り方

（A圖）・まず二枚の布に、四、五本の糸を、ゆる目に通して、これにブランケット・ステッチをほどこします。

（B圖）・はじめ布地の一方に、四、五回バー・ステッチをして、針の頭から、バー・ステッチに、通して抜いて輪を作り、この輪を作りながら、チェーン・ステッチを、圓のようにしてゆきます。そして最後の輪を通してから、糸を引いて、他の布に縫いつけます。

A



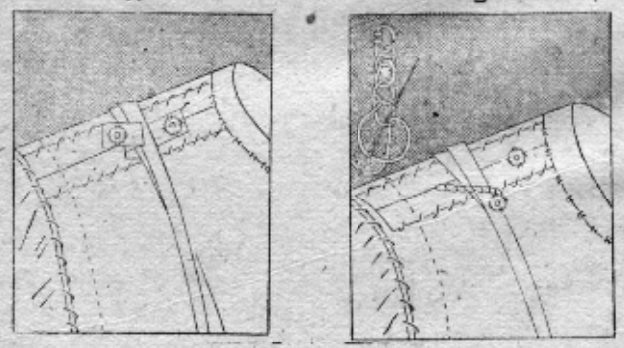
B

3・スリップの吊り紐通しの作り方

（A圖）・布の場合。細い紐を作るか、リボンを用います。肩の縫目にそつて、紐の半分をしつかりと縫いつけて、それに凸スナップを、一つ縫いつけます。もう片方の端には、凹スナップを縫いつけて、間に紐を入れて、このスナップをかけるのです。

（B圖）・糸の場合。太目の絹糸、又は木綿糸で、適當な長さにまで、チェーン・ステッチをして、端にスナップをつけます。片方のスナップは、縫目に縫いつけて下さい。

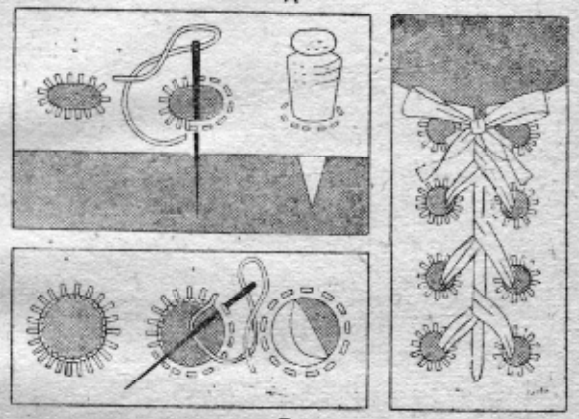
A　　B



4・エンブロイダー・アイレットの作り方

（A～B圖）・アウトライン・ステッチで、きれいに、しるしをつけて、鳩目又は目打ちで、穴をあけます。穴のまわりは、オーバー・ハンド・ステッチ（A圖）又はブランケット・ステッチ（B圖）を、ほどこします。針足を揃えて、きれいにかがるようにして下さい。

A

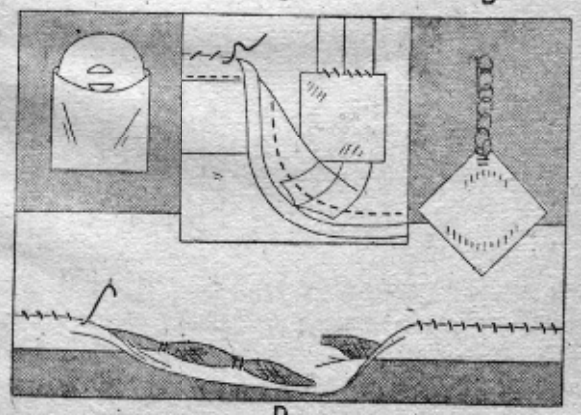


B

5・重しのつけ方

（A～B圖）・絹もののドレープを出すときなど、布の袋をこしらえ

A　　C　　B



D

て、「重し」（この材料は、使うところによつて、いろいろです。）を入れて、チェーン・ステッチで、縫いつけます。

（C圖）・スカートや、上衣の下につける場合は、オーバー・ハンド・ステッチで、縫いつけます。

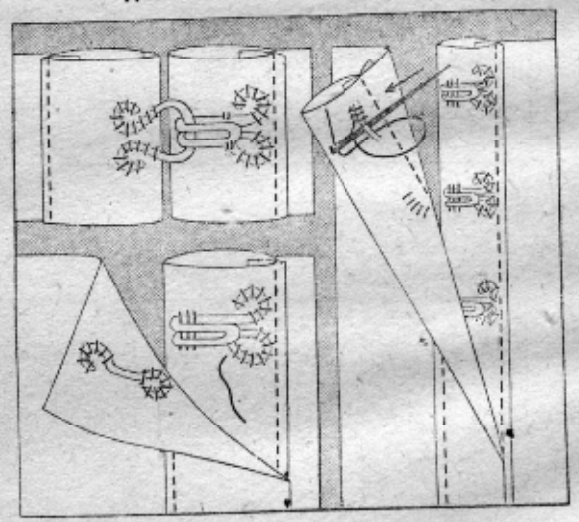
（D圖）・又圖のように、ヘムの中へ帆をしぼつたときのようにして、長く入れるのもよろしいでしよう。

6・鈎ホックのつけ方

（A圖）・鈎形になつている方を、上前にして、輪になつている方を、下前につけます。

（B～C圖）・つけ方は、スナップと同じように、ボタンホール・ステッチで、きれいに、又丈夫につけます。中央にも二回ほど、糸を渡しておくとよいでしよう。

A　C



B

7・四つ目釦の位置の定め方とつけ方

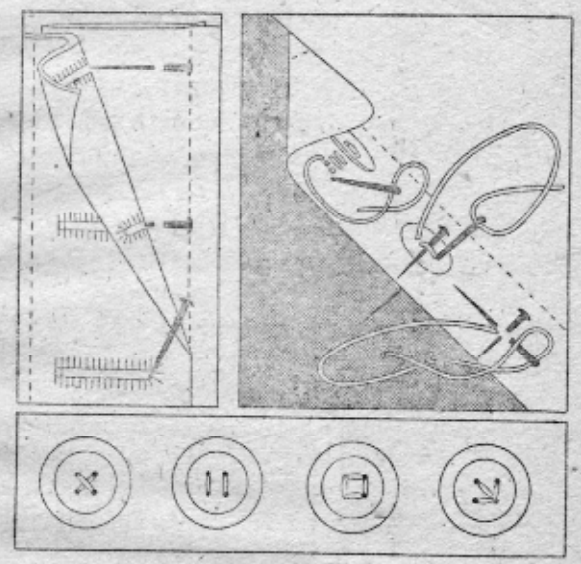
（A圖）・まずピンで、しるしをつけて、間隔をとつておきます。

（B圖）・釦の上にピンをおいて、その上から縫いつけて、あとでピンを抜くのです。こうして、間にゆるみをとつておきますと、軸をつくるのに、らくに出來ます。軸はつきるまで、しつかりと巻きつけて、糸のつけ

根を、一針通して、裏に出して糸を切ります。

（C圖）・これは裝飾的な、釦の縫いつけ方の種類です。

A　B



C

8・補强ボタンのつけ方

强く引張られる場所のボタンは、裏當をつけて、縫いつけた方がよろしいのです。

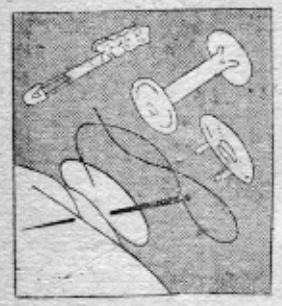
（A圖）・裏側に、小さな釦を用いたりします。

（B圖）・又は小さい布地を、縫いつけたりします。

A　B

（C圖）・「リング・ボタン」の、補强法としては、バイヤスコード、

C



あるいはテープを用いて、圖のようにします。圖の右端のようにずると、普通のボタンにも、應用出來ます。

9・飾り釦のつけ方

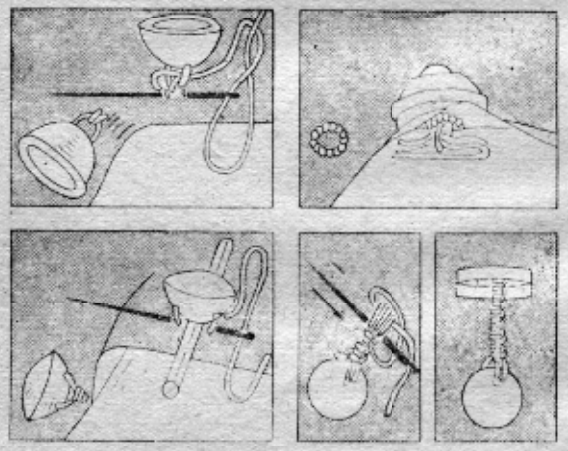
（A圖）・シャンクボタンは、太い丈夫な糸を、用いなければなりません。

（B圖）・下に穴のある圖のような釦は、マッチの棒で、ゆとりをつけておいて、軸をつくります。

（C圖）・取りはずしをする釦は、圖のような輪を、糸で作つて、それを裏にあてて、生地がいたまないようにします。

（D圖）・ハンギングボールという、丸い釦は、フレンチ・タックで、縫いつけます。

A　C



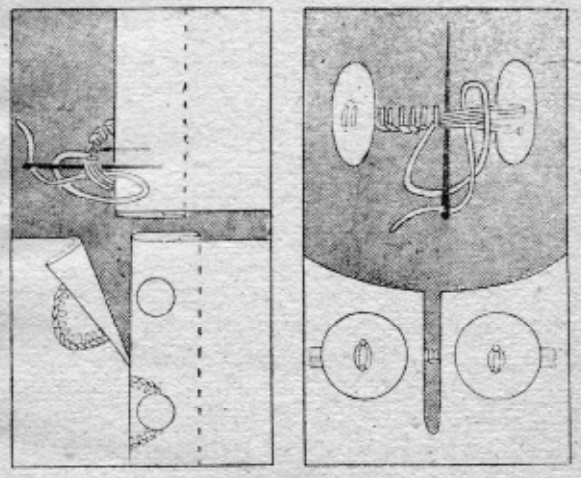
B　D

10・スレッドループとリンクボタン

（A圖）・スレッドループ（糸ループ）は、釦の大きさを計り、布地の端に、四、五本の糸で輪を作り、ブランケット・ステッチを、ほどこせばよいのです。

（B圖）・二つの釦の間に、糸を二、三本通して、これにブランケット・ステッチをします。（ブランケット・ステッチとは、毛布の端をかがるときの縫い方です。）

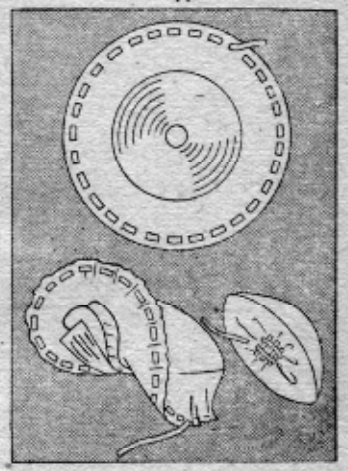
A　B



11・くるみ釦の作り方

（A圖）・當て布としては、釦の表面より、多少大き目位に、モスリン又はフランネルを切り、これを釦の上にのせて、包み布がすりきれるのを、防ぎます。包み布は、服地（場合によつては、共布でなくて、違つた布を用いることもあります）で、ちようど釦が包める位の大きさに布を切つて、まわりを細かく縫つて釦にかぶせ、糸を引きしつかりと結びます。底には釦の直徑より、少し小さ目の布を縫いつけて、きれいに、しつかりと、とじつけます。

A

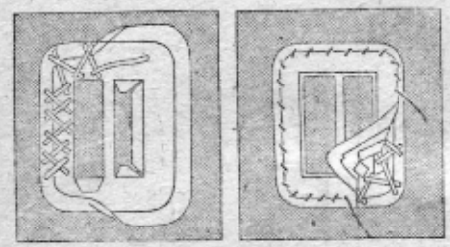


12・バックルを包む場合

（A圖）・布の上にバックルをおき、型をとつて、圖のように、少し大き目に、切りとります。内側の角は、切りこみを入れて、バックルを包み、千鳥掛けで、動かないように、縫いつけます。

（B圖）・圖のように、裏布をあてるのですが、糊づけにするのもよいでしよう。

A　B



釦　穴

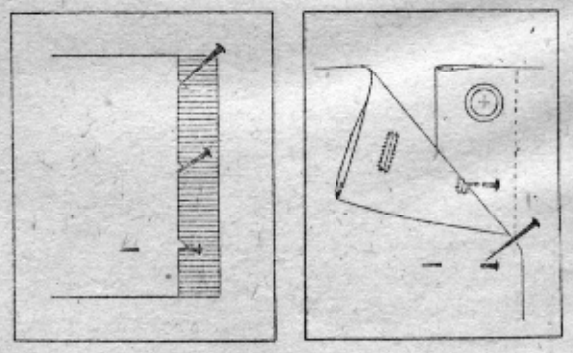
釦穴の始末には、玉縁にする方法と、かがる場合とがあります。軟かい感じのものには、糸でかがつた釦穴は、きつすぎますので、玉縁が用いられますが、男子服、婦人服、ヂヤケット、シャツブラウスなどには、穴かがりをいたします。

1・ボタンホール及びボタンの位置をきめるには

（A圖）・布端から、ボタンホールの外端までの長さと、各ボタンホール間の、距離を計る厚紙のゲージを作つて正確にきめます。

（B圖）・ボタンの位置は、ボタンホールの外端の真下へ、ピンでしるしをつけておきます。

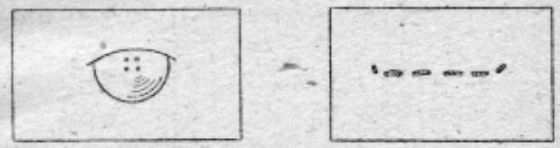
A　B



（C圖）・ボタンホールの長さは、普通ボタンの直徑に、厚みを加えた

ものですが、一應何か布切れに、ボタンホールの長さをきめて、切りこみを入れて、ボタンを通して、テストをしてみます。そして、ボタンホールの長さが、きまりましたら、テーラーズ・チョーク又はしつけ糸によつて、服地の方へ、あらかじめ、つけておいた外端のしるしを基準にして、長さをマークして下さい。

C



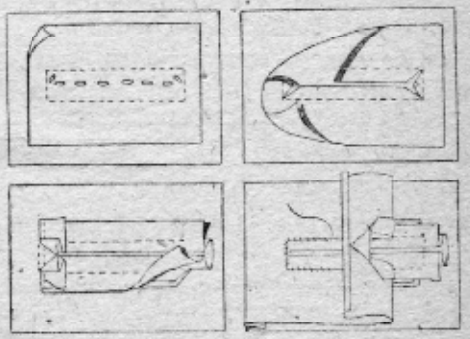
2・見返しをつける場合のボタンホールの作り方

（A圖）・たて地あるいは斜め布を幅5糎、長さはボタンホールの長さよりも、1.5糎長く切つて、これを中表に合わせて假縫いし、次にボタンホールの位置を示したしるしより上下3粍間隔で、長方形に本縫いします。

（B）圖・圖のように中央へ、切りこみを入れて、兩角は、三角に切り開き、當布は、明き口から裏側へ引き出します。

（C圖）・上下を圖のように折りこんで、玉縁を整えて、しつけをする前に、兩端の三角に、切り込みを入れた部分を、明き口いつぱいのところで、玉縁布にしつかりと、（ミシンを2、3回かけて）とじつけます。そして表側から縫目の中に、落しミシンをかけておきます。

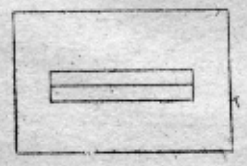
A　B



C　D

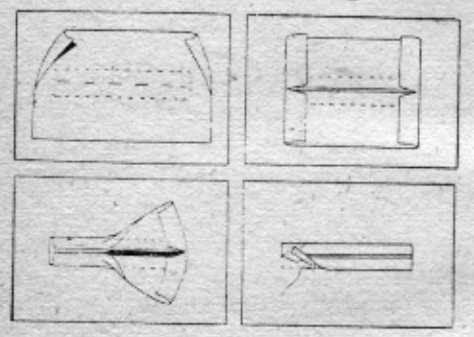
（D圖）・表身頃の穴の位置を、見返し布に移して、見返し布を正しく切つて、折りまげてまつります。

（E圖）・表側から、見た出來上り圖です。



3・見返し布なしのボタンホールの作り方

（A圖）・前と同様に、たて地あるいは斜め布を幅5糎、長さはボタンホールよりも、1.5糎長く切つて、マークの上へ中表に重ねて、しつけをかけます。そして上下3粍の縫代で、長方形に、本縫いして下さい。



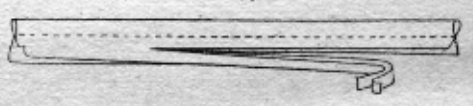
（B圖）・兩端は圖のように、内側へ折り曲げて、マークに、切り込みを入れます。

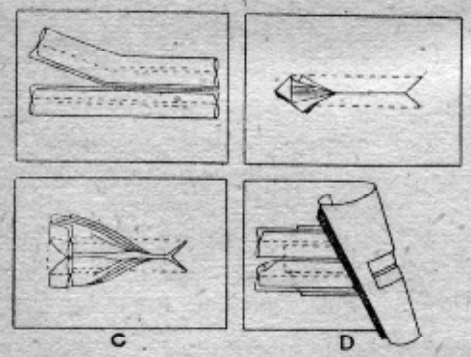
（C圖）・當布は明きロから、裏へ引き出します。

（D圖）・布端は、折り込んで、縫目へまつりつけます。

4・パイプを用いるボタンホールの作り方

（A圖）・たて地又は斜め布で幅2糎、長さは、全部のボタンホールの長さを、あらかじめきめておきます。表を中にして、眞中から折つて、折山から3粍のところに、ミシンをかけます。そしてこの縫目から、又3粍のところで、きれいに布端を、切り揃えてしまいます。





（B圖）・ボタンホールの明きロから1糎ほど長く二本の縁布を切つて、身頃の表側へしるしに合わせて、明きロの長さだけ、縫目にそつて、ミシンをかけます。

（C圖）・身頃の内側から、圖のように切りこみます。

（D圖）・明きロから、縁布を内側へ引き出して、兩端は圖のように、三角に折つて、パイピングを閉じないように、ステッチをかけます。

（E圖）・兩端を始末して、出來上つた圖です。

★紐をパイピングに入れて、ふくらみをつける場合もあります。

5・穴かがり

・穴かがりの種類・

片　留……一般に横穴の場合で、シャツブラウスなどに用います。

兩　留……縦に穴明きの場合で、Yシャツに多く用います。

鳩目附……男子服、婦人服、ジヤケットなどに用います。

眠り穴……穴をあけずに、かがつた釦穴です。

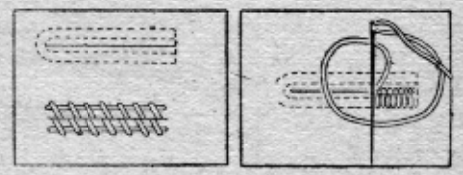
穴の大きさ…釦の直徑に、釦の厚み分を加えます。

糸の長さ……穴明き寸法の25倍から、30倍位を必要とします。

（1）・片　留

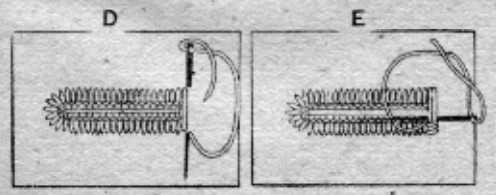
（A圖）・圖のように、穴じるしの兩側を1.5粍づつの間隔をおいて、ほつれ止めのミシンをかけ、「のみ」又はよく切れる「鋏」で釦穴を、正しく切ります。

（B圖）・（A）の場合と、ちがつた方法です。釦穴のマークをつけたあと、穴をあけて、まわりをかがります。



（C圖）・糸を圖のように、まわりへ渡して、ボタンホール・ステッチで、左から右へとかがつてゆきます。穴かがりを、手ぎわよく仕上げるには、針足を揃えることと、糸を引くときの調子を、平均にすることが大切です。針足は、穴の裁ち目に對して直角にし、かがりの結び目は、少し上を向くようにいたします。

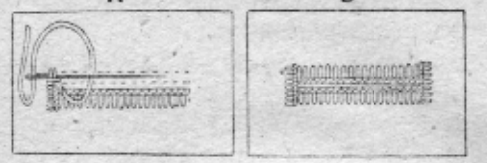
（D圖）・兩側がかがれましたら、穴の端に圓留（二本糸を渡して、明き止まりを縦に下まですくつて、二回まきつけます）をします。



（E圖）・次に糸端を、裏に出し

て、裏の糸目の中を通して、引き抜き、玉を作らずに糸を切ります。

（2）・雨　留



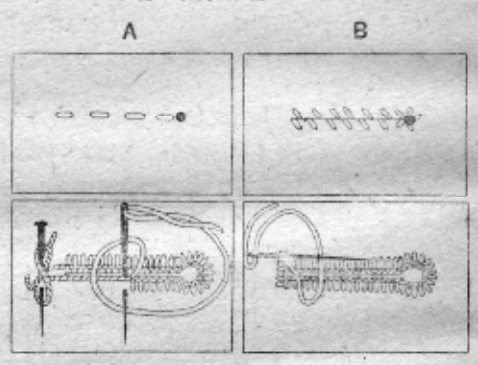
（A圖）・かがり方は、片留と同じですが、片側をかがつたならば、圓留を入れます。

（B圖）・もう一方の殘りの側をかがつて、又圓留をします。

（3）・鳩　目　附

（A圖）・釦穴をマークして、外端に「鳩目穴」で穴をあけます。

（B圖）・穴の寸法を切つておき、兩側と穴のまわりへ、オーバーキャストをほどこします。（オーバーキャストの代りに、穴をあける前に、穴のまわりに、ミシンをかけてもよいでしよう）



（C圖）・右から左へ、圖のように芯糸を張つて、紐の上をボタンホール・ステッチ（片留の場合と同じかがり方）で、かがつてゆきます。

（D圖）・最後に、圓留めをいたします。

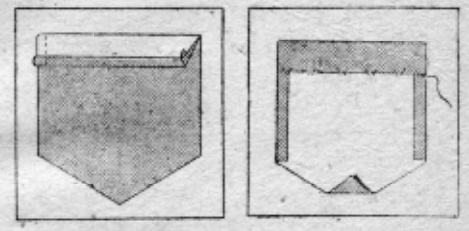
（4）・眼　り　穴

これは、テーラーの袖口の明きみせ、及び衿に用いる、一つの飾りであつて、穴をあけずに、穴があるように、見せるものです。方法は、チェーン・ステッチを用います。

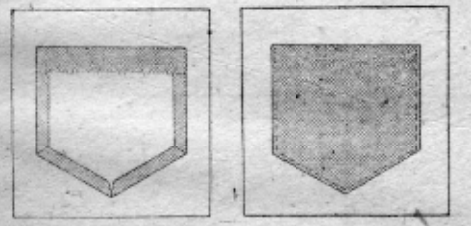
第27章　ポケットの作り方

1・**貼つけポケット**（パッチ・ポケット）

これは、誰でも出來る最も簡單な、貼つけポケットの、作り方として、次のような方法を、おぼえておいて下さい。



（A圖）・ヘム（ポケット口の折り返し分）と、縫代の餘裕をとつて、ポケットにする布を切りとります。ヘムは圖のように、外側へ折つて縫代の重なる兩角を圖のように縫い合わせて、餘分の縫代を切り落します。



（B～C圖）・ヘムを内側へ折り返して、こまかくまつりつけます。下端は圖のように、裁ち代を折ります。

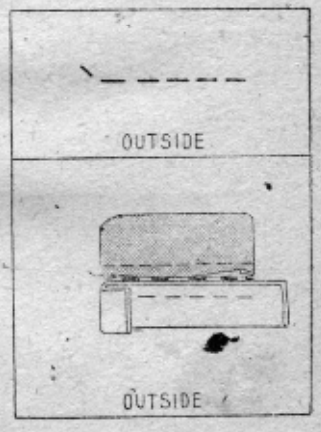
（D圖）・出來上り圖です。

2・**雨蓋ポケット**

まず必要な用布として

蓋布……幅を縦地にして、表布と裏布から、一枚づつ裁ちます。縞物の場合は、明き口の縞と合わせなければなりません。

ウエルト……これは、口布と同う布とを、かねるもので、長さは明き口から、2.4糎長く、幅は3.6糎に



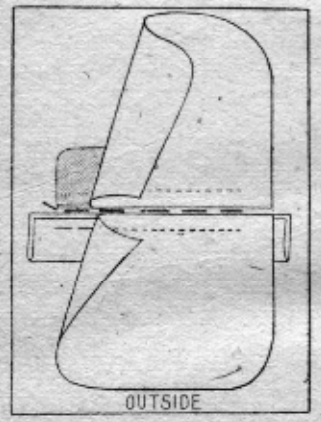
いたします。

ポケット布……横、明きロから2.4糎長く、縦、20糎ほどが、適當でしよう。この場合、一枚は他の一枚よりも、縦1.2糎長くいたします。

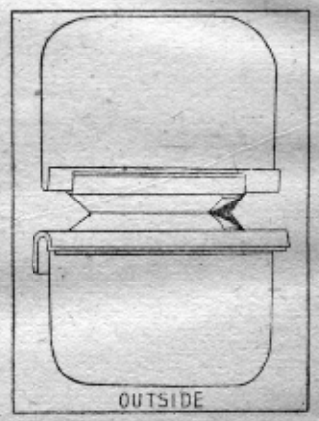
（A圖）・ポケットの明きロの線を、しつけでマークします。

（B圖）・蓋布は、裏布をつけて縫い、表に返して、プレスいたします。圖のように明きロのしるしにつき合わせて、中表において、ウエルトは二つ折りにして、下側へおきます。兩方6粍の縫代で、明きロ寸法だけ、縫いつけて下さい。

C

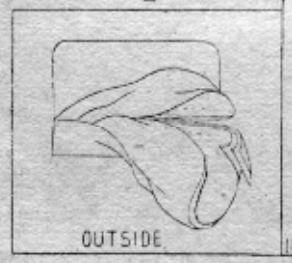


D

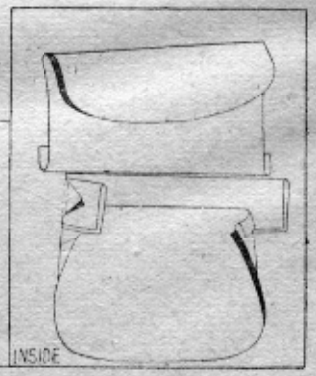


（C圖）・ポケット布1.2糎長い方を上へ、短い方を下側へ各〻6粍の縫代で、明きロの長さだけ縫います。

E



F



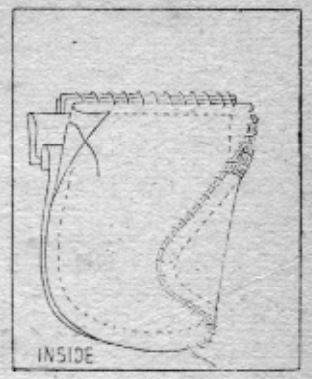
（D圖）・圖のように、縫代を開き、明きロへ鋏を入れて、兩角では、斜めに切りこみます。

（E圖）・ポケット布とウエルトを明きロから、内側へ引き出します。

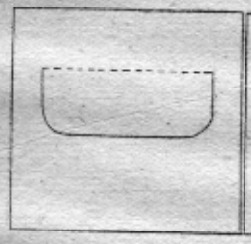
（F圖）・ウエルト布を上げて、上端を上側ポケット布の、下端につけます。明きロ兩端の三角片を、ウエルト布の上へ出して、圖のように、しつかりと縫いつけます。

（G圖）・上側のポケット布を、下へ折り、下側ポケット布と重ねて、縫い合わせます。それが終りましたら、端の裁ち目に、オーバーキャストを、ほどこします。

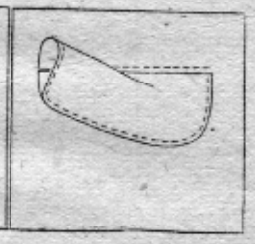
G



H



I



（H圖）・落しミシンで仕上げた出來上り圖です。

（I圖）・これは、きわミシンで仕上げてみました。蓋の圍りにも飾りミシンをかけてあります。蓋をつけなけいときは、片玉縁をいたします。

3・玉縁ポケット（バウンド・ポケット）

この型のポケットは、比較的軟かい感じのするものですから、婦人服には、廣く用いられております。これには、兩玉縁と片玉縁とがありますが片玉縁の方は、雨蓋ポケットの、蓋をつけない場合なのですから、こゝでは兩玉縁の方法を説明いたしましよう。

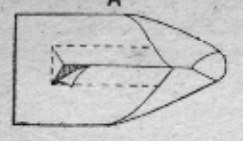
まず必要な用布としては

口布……縦地でも、バイヤス地でも、よろしいのです。幅7糎、長さは明きロ寸法より、2.5糎長いものを用意いたします。

向う布……横地で、幅5糎、長さ、明きロから2.5糎長いもの。

ポケット布……幅は明きロから、3糎ほど長く、丈は出來上り丈の、二倍にしておきます。

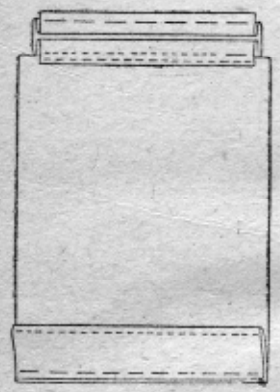
A



（A圖）・玉縁釦穴のときのように、ポケット明き口へ、口布を中表に重ねて、口を中心に4耗の縫代で縫い、明き口を切り開きます。口布は明き口から内側へ引き出して下さい。

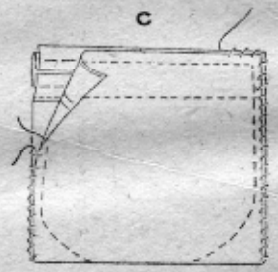
（B圖）・玉縁を整えて、しつけをかけます。次にポケット布の表下端に、向う布を縫いつけて、圖のように、假縫いしておきます。下玉縁の割目の中へ、落しミシンをかけて下さい。ポケット布上端は、下玉縁下側へ假縫いをして、あとから端ミシンで縫いつけます。

B



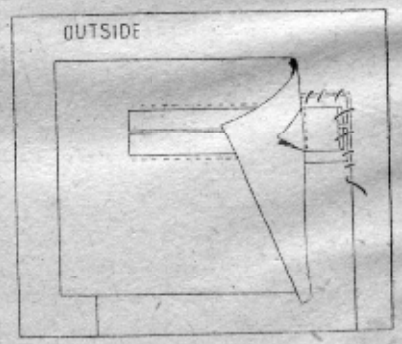
（C圖）・袋布を折り重ねて、假縫いしておき、表から、上玉縁の割目に、落しミシンをかけて、ふたたび内側を出して、ポケット布のまわりに、ミシン（二重縫）をかけます。布端は、オーバーキャストで、からげて下さい。

C



（D圖）・表布を返して、両端の三角形の切りこみへ、2、3回、ミシンをかけて仕上げます。

D

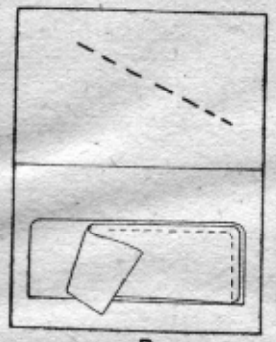


4・箱ポケット

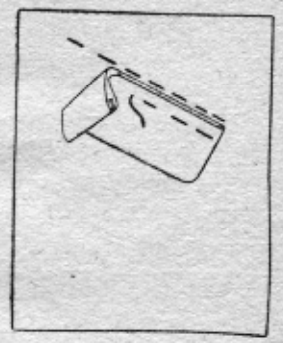
（A圖）・ポケット明き口のしるしを、しつけでマークいたします。

（B圖）・幅4糎、長さは明き口から1.2糎長く、表地から一枚、裏地から一枚裁ちます。又編物なら、明き口の縞と、合わせなければなりません。外表に重ねて、6耗の縫代で、縫い合わせます。薄地の場合には、キャラコ、天竺木綿、などを芯地にして下さい。終りましたら、表に返して、プレスいたします。

A



C



B

D

（C圖）・表に返したウエルトは、明き口の下側へ、つき合わせにおいて、假縫いたします。

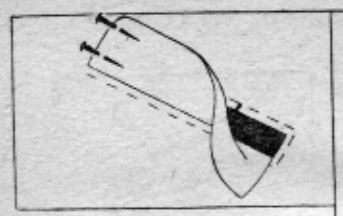
（D圖）・裏地で、二枚のポケット布を、裁ちます。一枚は、ウエルトの上から、明き口しるしを合わせながら中表に重ねて、圖のように、明き口しるしを中心に、4耗の縫代で、ミシンをかけます。

（E圖）・明き口しるしへ、鋏を入れて、両端は角へ斜めに、切り込みを入れて、ポケット布を中へ引き出します。

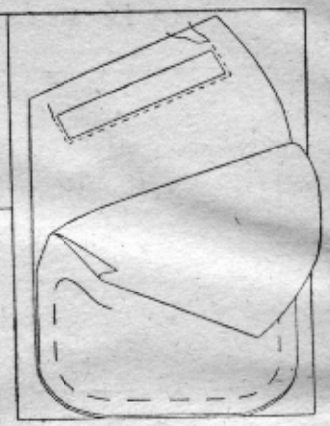
（F圖）・表からポケット布を、明き口のまわりに、假縫いします。次にウエルトをおこして、口をふさぎ、その位置へ、ピンで止めて、假縫いします。それ

E

F



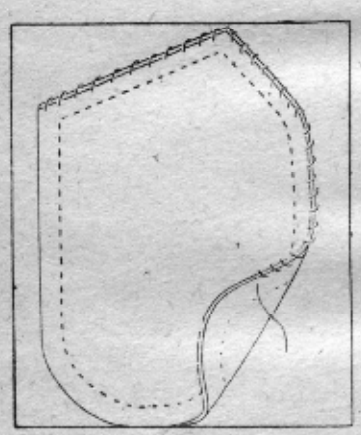
G



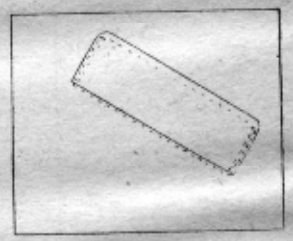
が終りましたら、兩端は、きわミシンで、下端へは、落しミシンをかけます。このときの縫目は、（G圖）のように、明き口のまわりに見えます。

（G圖）・ポケット布と他の一枚を、中表に重ねて、假縫いします。

H



I



（H圖）・ミシンで縫い合わせて、片端はオーバーキャストで、からげます。

（I圖）・最後に飾りミシンをして、出來上つたところです。

第28章　レース及びトリミングと刺繍その他

1・レースについて

（A圖）・レースに、ギャザーをほどこすときは、端の耳糸一本を、引つぱつて、望みの長さに縮めて、ギャザーを作ります。

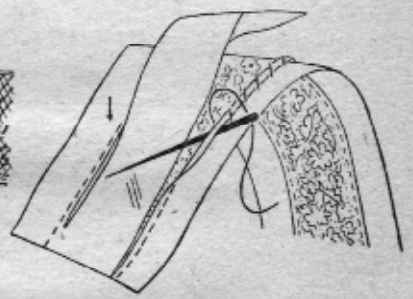
（B圖）・レースを布の間へはさみ、縫いつけるときは、角では圖のように糸を引いて、中は一方へ重ねて、角にギャザーを作ります。

（C圖）・レースと、レースを接ぐ場合は、模様がうまく合うように重

A

B

C



ねて、接ぎ合わせる線を（模様と模様の間）切ります。そして裏側でかゞり合わせるのです。終つてから、かけるステッチは、ヂグザガー（ミシン附屬器具の項參照）を用いると、美しく仕上ります。ヂグザガーを用いる場合は、レースをあらかじめ、セロハン紙に、假縫いしてからにいたします。

D

（D圖）・レースを、布へ中表に合わせて、ミシン又は手縫いで、兩端を縫つてから裏へ返して、圖のように、かゞる餘裕をのこして布を切りとります。

2・ヂグザグ（ZIG-ZAG）・トリミング

A

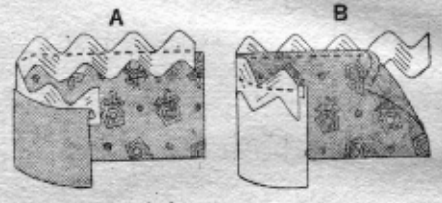
（A圖）・圖のように、ヂグザグ型に縫い取つて、この糸を引つぱると、トリミングが出來ます。

3・リック・ラック

（A圖）・布の端を、外側へ折りまげて、この上へリック・ラックを重ねて縫いつけます。

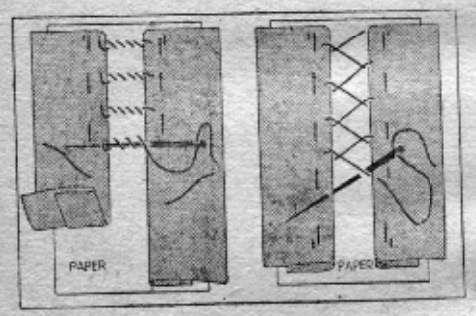
（B圖）・リック・ラックで、パイピングする場合で、布端はこの場合、内側へ一度か二度、折りこんで、この上へ縫いつけて、パイピングにいたします。

A　B



4・バー・ファゴティング

A　B



（A圖）・兩布は縫代を折つて、紙の上へ假縫いします。左上端の上へ出した針は、右布の上から通して、糸をからませて、左へ抜きます。

（B圖）・これは、（A圖）の場合と反對に、右側の上端から、はじめます。

5・紐を入れたトリミング・バンド

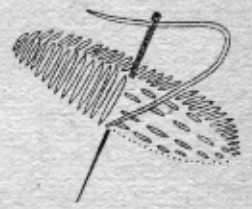
A

（A圖）・トリミング・バンドの兩側へ、紐を包みこんで縫い、糸を引きながら、紐の上で、布を後へ送つて、圖のように仕上げるのです。

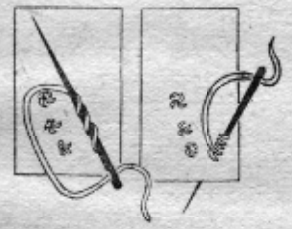
6・刺繍その他

アウトライン・ステッチ

スティン・ステッチ

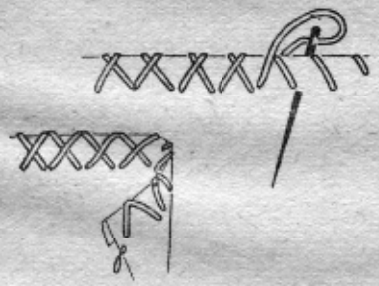


フレンチ・ノッツ



トゥイステッド・ランニング・ステッチ

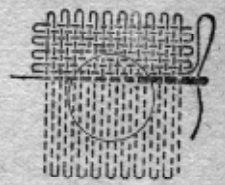
ダブル・オーバーキャスト・ステッチ



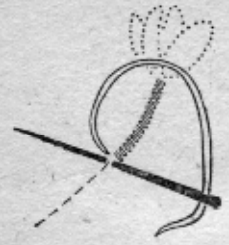
チェイン・ステッチ

キャンドルウィック・タフティング

穴縫の仕方



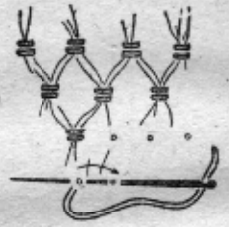
ステム・ステッチ



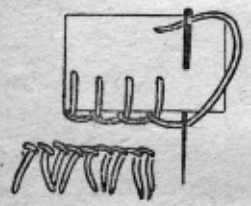
レイズイ・デェイズイ

クロス・ステッチ

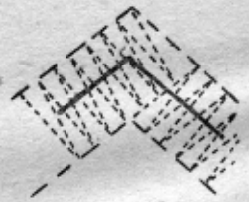
スイード・スモッキング



ブランケット・ステッチ

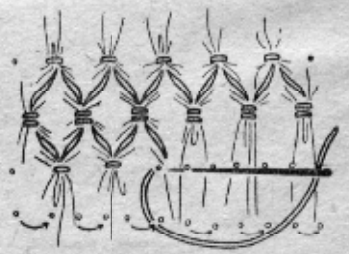


鈎ぎぎのミシン縫理法



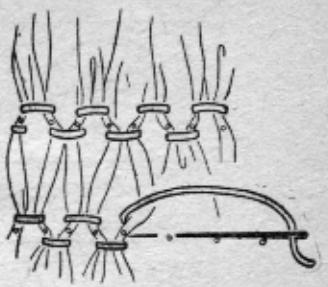
バリィオン・ステッチ

ダイヤモンド・スモッキング

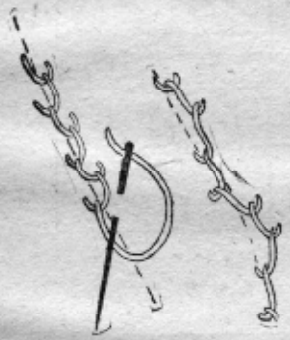


ブランケット・ステッチによるスキヤロップ

ケーブル・スモッキング

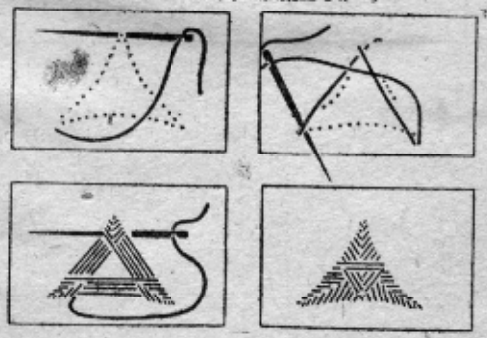


フェーザー・ステッチ

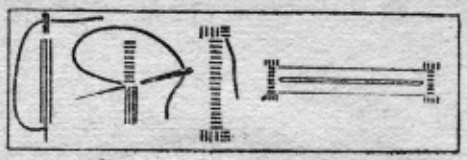


タツシエルの作り方

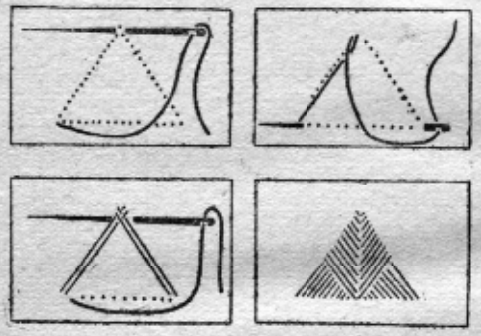
クローズ・フット（松葉止その一）



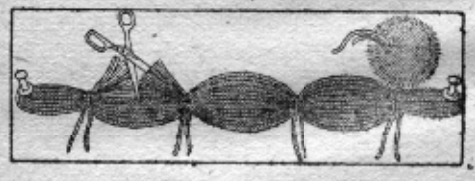
バーータック



アローヘッド・タック（松葉止をのニ）



ポンポンの作り方



■附錄・洋裁用語選■

【ア】

アイレット 鳩目穴のこと。または小穴か、紐通し穴。

アイロン 火熨斗のこと。電氣、ガス、ガソリン、炭火などのものがあるが、この他に蒸氣アイロンがある。

アウトサイド インサイドの反對で、外側のこと。

アウトレットシーム 籤代または縫込みのこと。

アタッチド・カラー 共衿のこと。Yシャツなどの衿つきのもの、または共生地のダブル・カラーなど。

アップリケ 衣服の外側へ裝飾として、圖案模樣などを切りぬいて貼りつけること。

アーティフィシヤル・ファイバー 人造纖維。

アナイト 穴糸、穴かがりに使う太目の絹糸のこと。

アフターヌーン・ドレス 午後に用いる服裝のことで、婦人の訪問服のこと。用布は絹か薄地の毛織物を使う。

アーム・ホール 袖ぐり、または袖つけのこと。

アンサンブル 婦人服の上下が、組合わされて、配合よく統一されたもののこと。

アンダー・ウェア 下着類。

アンダー・カラー 裏衿または下衿のこと。

【イ】

イブニング・ドレス 夜間に用いる禮服のことで、婦人の夜會服、男子の燕尾服またはタキシードのこと。

イブニング・ラッパー ラップコートのこと。婦人のイブニング・ドレスの上に着る外套。

イヤー・リング 耳かざり、耳輪のこと。

イラスティック ゴムを織りこんだテープ、ゴム紐。

イラスティック・キャンバス 彈力性のある亜麻製の硬芯地、オーバー、背廣やスーツの上衣の衿芯に使うもの。

インサイド・カラー 內衿。

インサイド・ベルト 內側のベルトで、スカートなどの上部の裏側につけるもの。

インサイド・ポケット 內側のポケット、上衣などの裏側へつけるポケットのこと。

インバーテッド・プリーツ 內襞、逆襞のこと。

インビジブル かけ接ぎ。

インファンツ・ガーメント 幼兒服のこと。

インフォーマル・ドレス 略式のもの、正式でないドレスのこと。

インレース レースで縁かざりなどすること。

【ウ】

ウィーブン・レース 手編みのレースのこと。

ウィンター・オーバー 冬季に着るオーバーのことで、防寒が目的のもの。用布は厚地ラシヤ、毛皮などが多く使われる。

ウエスト 下胴、細腰のことで、上半身で一番細い部分で、ズボン、スカートのバンドをしめる位置のこと。

ウエディング・ドレス 結婚式のときの婚禮服、色は大てい純白で、スタイルはイブニングともがつて、殆んど肌をみせないもの、用布はクレープ・デシン、クレープ・サテン、シフォン、ジョーゼットなどの絹ものかレースを使う。

ウエルト・ポケット 箱ポケット、胸ポケットなどに作られる箱型のもの、または縁ポケットのこと。

ウオーキング・コスチューム 婦人の運動服のこと。普通スポーツ・ドレスという。

ウオーター・プルーフ 防水加工をほどこした毛織物のこと。

ウオッシング 洗濯のこと。

ウ ー ル 羊毛、綿毛、毛糸、毛織物などのこと。

【エ】

エア・ライト 防水加工をほどこした綾織綿布で、コットン・ギャバーディンと同じもの。

エクストリエンヌ 乗馬用スカートのこと。

エス・ビー シングル・ブレストの略稱で、片前のこと。

エッジング 縁、縁とり、縁飾りなど。

エブリデイ・ウェア ふだん着、平常着。

エプロン 前かけ、膝かけなどのこと。

エプロン・ドレス エプロン型の婦人服で、家庭着として、働きやすくつくつたもの。

エルボゥ・ライン 肘の線で、製圖上の肘の横線のこと。

エンブロイダリー 刺繍、または刺繍をした生地のこと。

【オ】

オイル・スキン 薄地織物の裏側に特殊の油を塗つて、防水加工したもので、一般に雨外套のことをいう。

オーダー・メード 註文をして身體に合せて仕立てた服、あつらえた服のこと。

オータム・コート 秋に着る外套のことで、合着用の半裏のもの、スプリング・コートとほぼ同じ程度のもの。

オーナメント 裝飾、飾り。

オーバー・ガーメント 外套、ケープなど、外衣として着るもののこと。

オーバー・キャスト 卷縫い、縁など縫うときあらくかがるステッチのこと。

オーバー・サック 半長の外套、普通のオーバーより少し短いもの。

オーバー・ステッチ 縫目の上にほどこすステッチのこと。

オーバー・コート 背廣、スーツ、體服などの上に着る外套の總稱をいう。

オーバー・ハンディング かがること。

オーバー・ラップ 上衣の前身頃の打合せのこと。

オーバー・オール 外衣の一種で、ズボンの肩上に胸當がついていて、普通仕事着か子供の遊戯用に多く用いるもの。

オープン・カラー 開衿。

オープン・シーム 縫目を割ること。

【カ】

ガ ウ ン 長い上衣で、婦人が室内着として用いるが、主として大學教授、法官、僧侶の禮服として着用するものをいう。

カウントリー・ウェア 田舍着、野外着といつたもので、スポーティなもの。

ガーズ・コート 背中に襞を取つたバンドつきのオーバーのこと。

カッター 裁斷師のこと。

カッティング 裁斷、洋服などを裁つこと。

カ ツ ト 裁つ、切る、切り落すことなどをいう。

カ フ ス 袖口、袖先。

カーディガン カーディガン・ジャケットの略稱で、衿なしの上衣で、前身頃の打合せは、ボタン掛けにするもの。

カバード・バトン 包み釦のこと。

カーブド・ライン 曲線、屈曲線。

カ ラ ー (Color) 色。

カ ラ ー (Collar) 衿。

カラー・オープニング 衿あき。

カレッヂ・スタイル 學生服、通學に適した若い人の洋服。

カンバーティブル・コート 晴雨兼用の外套。

【キ】

キ ッ ド 仔山羊の革で、手袋、靴などに使用される。

キモナ・スリポン 和服用の袖の深いラグラン型の外套のこと。

ギャザー いせ襞、細かく縫いちぢめて、襞をよせる一種の裝飾。

キャスケーディング 波狀に飾り布を垂れさせる裝飾の一種で、イブニングなどに使うもの。

キャップ・スリーブ 袖山の上へ身頃の肩がのるように出ている形のもの、これは特殊な裁斷法による。

キャメル・コート ラクダの毛を織り込んだ生地で作つた外套のこと。

【ク】

クラバート・衿飾り、ネクタイ。

クレープ・デ・シン 薄塩絹の縮緬、婦人用のドレス、ブラウスなどに多く用いる。

クロス・ステッチ 千鳥縫い。

クロス・ポケット 横ポケット、口を横に切つたポケット。

クローズ・フッド 松葉留め、糸を三角形にくんで、閂（カンヌキ）としたもの。

クロック 縫い取模樣の裝飾のことをいう。

【ケ】

ケ ー ス ミシンの下糸のボビンを入れるケースのこと、ボビンケースという。

ケ ー プ 普通マントともいつて、上衣の上に着る外衣で、袖がないもの、衿はステンカラーが多い。丈は長いものと、短いもので肩まわりだけのものもある。

ゲンケイ 原型、型紙の基本となるもので、この原型をもとにしてデザインをする。

【コ】

コインドット 水玉模樣のこと。

コスチューム 服裝、衣服、衣裳のことで、舞臺衣裳のことにも使う。

コーセット 婦人が洋裝するとき、下着の下につけるもので、裝體を美しく整えるもの。用布は綿布、絹布、ギャバヂィンなどで、ゴム織にしたものが多く、横腹のよらないように、鯨の軟骨か鋼鐵骨などが入れてある。

コ ー ド 紐、丸紐。

コード・ステッチング 紐を使つて、縫い飾りをすること。

コード・パイピング 紐を通した縁のことで、ポケットなどに使う。

コトン・スレッド 木綿糸のこと。

コンビネーション 上衣とズボンが一

つに組合された仕事着、また下着などのこと。

【サ】

サイズ 寸法のことで、型、番號などにも使う。

サイド 脇。

サイド・ポケット 兩脇につける腰ポケットのこと。

サーキュラー・スカート 裾巾の廣い圓形のスカートで、斜め布に裁つて接ぎ合せることが多い。

ササベリ 衽縁のことで、バイヤスなどで、細い縁をとること。

サスペンダー・スカート 吊りスカート、バンドを使わないで、肩から平紐で吊るスカート。

サック・コート 婦人の箱型外套のことで、ボックス・コートともいう。

サンプル 見本。

サンマー・コート 夏に着る外套、裏なしの單衣で作つた生地の薄いもの。

【シ】

シーク（シック） しやれた、氣のきいた、いきなという意。

ジッパー ファスナーの俗語、またチャックともいわれ、細かい金具の連續したもので隙間するところにつけられるもの、上衣の胸あき、シャツ類の胸あき、またはポケット口、婦人用ズボンの脇あきなどに使われる。

シフォン・ベルベット 薄いビロード織地、地織を絹、綿または絹綿交織としたもので、婦人服に多く用いられる。

シュミーズ 婦人用の下着、用布は木綿ものか絹もの、色は白か淡色が主に使われる。

シーム 縫目、合せ目、はぎ目。

シャーリング いせ襞、いせ込み襞、裝飾のためにするギャザーの一種。

ジャケット 短い上衣のこと、またはジャケット・コートのことにもいう。

シャーツ（シャツ） 下着、肌着のこと。

シヤツ・ブラウス Yシャツ型に作られた婦人用のブラウスのこと。

シャトル（シャットル） ミシンの重要な部品の一つで、普通内釜という。

シャム・ポケット 飾りポケットの一種で、ポケットのように見せかけて、切替縫などに作るもの。

ジャンパー 肩のゆるい作業用の上衣で、腰をゴムまたはベルトで絞るもの。

ジャンパー・ドレス 女學生の制服などに多い袖なしのドレスで、ブラウスの上に着るもの。

ジャボ ブラウス、ドレスの胸飾りのこと、鳥の餌袋の意から轉じたもの。

シューティング・コート 狩獵服のこと。

ジュニアー・スタイル 若い人向きの仕立てのこと、少年服、少女服。

ショート・パンツ 短い膝までの半ズボン。

ショール 肩かけ、婦人の防寒用または裝飾用として用いるもの。

ショルダー 肩。

シルダー・パット（パッディング） 肩台。

シルク 生糸、絹糸、絹布。

ジレー チョッキ、胴着、胸當。

シングル 單一の、片前の。

【ス】

スェーター 普通セーターまたはジャケットともいう、毛糸編の胴着のこと。

スカート・レングス スカート丈のこと。

妻大圖

スカーフ 衿あき、普通薄地もので、裝飾用のもの。

スカラップ 帆立貝、扇形の飾りのこと。

スキーイング・コスチューム 婦人用スキー服。

スクェアー・ショルダー 角肩、上り肩。

スクェアー・ネック 角衿、衿明きが角形のもの。

ステッチ 縫うこと、縫い合すこと、普通飾りミシンをかけることにもいう。

ステップ・カラー 折衿。

ステン・カラー 二重衿。

ストレート・スカート 裾の開かない眞直ぐなスカート。

スナップ 押ホックのこと。

ストラップド・カフス レインコートなどの、バンドつきの袖先。

スモッキング 飾り襞の一種で、スモックともいう。

スラックス ズボンの異稱。

スリップ 婦人用下衣、下着類の中で、一番上に着るもので、用布は木綿か絹の薄地もの。

スリー・ピース 三つの部分から出來ている揃いのもの、例えばブラウス、スカート、ジャケットなど。

スリーブ 袖、袖つけ。

スレッド・マーク 切り躾（しつけ）のこと。

スワガー・コート 婦人用オーバーの一種で、ゆるやかに仕立てられたもの。

【セ】

セィラー・カラー 水兵型の衿。

セット・イン・ポケット 切りポケット。

セット・オン・ポケット 貼付ポケット、パッチ・ポケットのこと。

セミ・イブニング・ドレス 略式の婦人夜會服。

セミ・ラグラン 半ラグラン型。

セルフ・トリミング 婦人服につける共生地の飾り、造花や絲結びなど。

センター・シーム 背中の縫目。

【ソ】

ソーイング・マシーン 裁縫ミシン。

ソックス 短い靴下。

ソフト・カラー 柔かな、糊をつけないダブルカラーのこと。

【タ】

タイト きつもりとした。

タイト・スカート ギャザーや襞の入らない、眞直ぐなスカートのこと。

タキシード 夜間の略式禮服（男子用）。

タック 縫い襞のこと。

ターバン 回教徒の用いる頭巾で、一般には、婦人が裝飾として頭に巻くもの。

ダブル・カラー 二重立衿、詰衿の二重になつたもの。

ダンシング・ドレス 婦人の舞踏服。

タンスンシキ （短寸式）製圖樣式の一種。

【チ】

チェイン・ステッチ くさり縫い、裝飾用のステッチの一種。

チェスト 胸圍、胸廻り、上胴。

チューニック 婦人用の長い上衣で、丈は膝位のもの。

チュール ベールのこと、絹網のうすいもの。

チョウスンシキ （長寸式）製圖樣式の一種。

チョッキ 短衣、上衣の下に着る袖

なしの調衣。

【ツ】

ツィード スコッチ織のことで普通ホームスパンのことをいう。平常着またはスポーツ向きに用いられるもの。

ツノボタン （角釦）水牛の角のものは上等品、その他獣骨、馬爪などのもある。

【テ】

ティ・ガウン お茶の會に着るドレス、午後の訪問服のこと。

ディナー・ドレス イブニング・ドレスの一種で、晩餐用の婦人襟服のこと。

テイラード・スーツ 男子服型の婦人用スーツ。

デコレーション 裝飾、飾りつけ。

デザイナー 意匠家、洋服などのスタイルを立案する人、または圖案家のこともいう。

デザイン 立案、意匠、圖案、企劃など。

【ト】

ドッテッド・ライン 製圖用語の一種で、點線または切取線のこと、ブロークン・ラインともいう。

トッパー 半コート、ゆるやかな仕立てのもの。

トップ・コート 半コート、婦人用のスワガー・コートともいう、丈の長いものもある。

トライング・假縫いの着せつけ、フィッティングともいう。

トリミング 裝飾、附屬品、または調和をよくすること。

ドルマン・スリーブ 袖刳をきわめて大きくしたもので、袖口は細くする型の袖。

ドレス 衣服、服裝、衣裳。

ドレス・メーカー 婦人服の裁縫師。

ドレッサー ドレスの着せつけをする人、または仕上げをする人、芝居の衣裳方にもいう。

ドレッシー 優美な、はなやかな、やわらかみのあるという意。

ドレープ 自然に出來た襞などによつて、ふくらみを出すこと、また飾り襞などにもいう。

ドローイング 製圖。

【ナ】

ナイト・ガウン 寢室着、ねまきのこと、丈の長いゆるやかな仕立てのもの。

ナース・ユニフォーム 看護婦の制服。

【ニ】

ニッカーズ 裾口をバンドでしめる半ズボン。

ニードル 針、縫い針。

ニュー・ルック 米國の新しい流行用語で、最新流行の意。

【ネ】

ネインスーク 薄い平織綿布のさらしたもので、下着類に多く用いられる。

ネック 頸、衣服の衿、またはくびまわり寸法のこと。

【ノ】

ノーフォーク・ジャケット 襞を取つた背廣、またはスポーツ向きの襞のある上衣。

【ハ】

ハイ・ネック 衿の高いこと、上り衿。

バイアス・シーム・バインディング 縫目にあてる斜め布のふち取り。

パイピング 玉縁縫い。

パイプド・エッヂ 差し込みの玉縁。

パジャマ 寢衣、ねまき、上衣とズボンとからなり、ゆるやかな仕立てのもの。

バスト 胸圍、特に婦人服の胸まわり寸法のこと。

バー・タック かんぬきどめ。

パターン 型、型紙。

バック・ステッチ 返し縫い。

バッチ・ポケット 貼付けポケット。

パッディング・ステッチ ハ刺し、芯または裏布などを、刺し縫いすること。

パネル・スカート スカートの前後に各二本づつの縦線を入れたもの。

パフ・スリーブ 袖口へタックかギャザーを作つて、ゆるやかなふくらみを出した袖のこと。

ハーフ・ライニング 半裏、裏布が半分のもの。

【ヒ】

ピークド・ラペル 尖り衿、折り衿の先のとがつたもの。

ピコ・ミシン ミシンの一種で、絹ものなどの裁ち目がほつれないようにかがるミシン。

ヒップ・ライン 太腰廻り線。

ピンキング 厚地ラシヤなどの布端を三角形がならぶように切り込みを入れること。

【フ】

フアー・オーバー 毛皮外套。

ファッション 流行、はやり。

フォーマル 本式の、正式の。

フード 頭巾、オーバー、レインコートなどに取りつける帽子のこと。

ブラジェア 婦人の乳おさえ。

ブラストロン 婦人服の胸當、胸飾り。

プリーツ 箱襞、襞、おがみ襞。

フリル 襞のある縁飾りのこと。

フレアー・スカート 裾のひらいたスカート。

ブレザー・コート 戸外のスポーツ服。

ブレシング アイロンによる仕上げのこと。

ブロード・ショルダー 肩巾の廣く張つた形。

【ヘ】

ベスト 胴衣、チョッキ。

ペティコート 下着の一種で、ドレスの下からのぞく裝飾用のもの。

ペプラム ツー・ピースの上衣などを、ウエスト線で切かえて、下になる部分にフリルを出して浮かせたもの。

ヘム 縫、裾の折り込みなど。

【ホ】

ボーグ 流行、人氣のある意（フランス語）。

ボックス・プリーツ 箱襞。

ボディ 身體、胴、衣服の胴部のこと。

ボレロ 短い上衣で、前身頃が合わさらずに離れているもの。

【マ】

マフラー 頸まき、防寒用、裝飾用がある。

マントー 外套の一種で、袖のないもの。

【ミ】

ミット 拇指だけ別になつていて、他の四本の指は一つになつている手袋のこと。

ミンク 貂の一種の毛皮で、オーバーの衿やカフスに用いられるもの。

【ム】

ムコウダチ （向う裁ち）、裁斷助手のこと。

ムコウギレ （向う布）、ポケット口な

どに使う。

【メ】

メリケン針 洋服用の手縫い針。

メンド 補修すること、直すこと。

【モ】

モード 流行風、様式。

モーニング・コート 男子の晩間の礼服の一種。

【ユ】

ユニフォーム 制服、一様の揃いとしてきめられた服。

【ヨ】

ヨーク 肩当、身頃の肩の部分だけ切り替えたもの。

【ラ】

ラウンジ・コート 背廣服、散歩服。

ラウンド 皺をつけること。

ラッパー （ラップ・コート）胴まわりがゆるやかに仕立てられた婦人用外套の一種。

ラッフル 襞縁、これは固く畝つたものを、眞直ぐにつけて畝狀のひだを出したもの。

【リ】

リネン 亜麻糸、亜麻布。

リノン 寒冷紗、ローン。

【ル】

ルシアン・ブラウス ロシアのルバシカ風のブラウス。

ループ・ステッチ 細狀のかがり縫い。

ルーレット 墨線器、型紙をつくるときしるしをつけるもの。

【レ】

レッギングス 脚絆、脛當。

レデイ・メード 既製品、出來合いの服のこと。

【ロ】

ロー・カラー 低い衿。

ロール・カラー 糸巻衿、ショール・カラーともいう。

ロング・スカート 長いスカート。

ロンパース 上衣とズボンがつづいている、ゆるやかな仕立ての子供の遊び着袖なしのものもある。

【ワ】

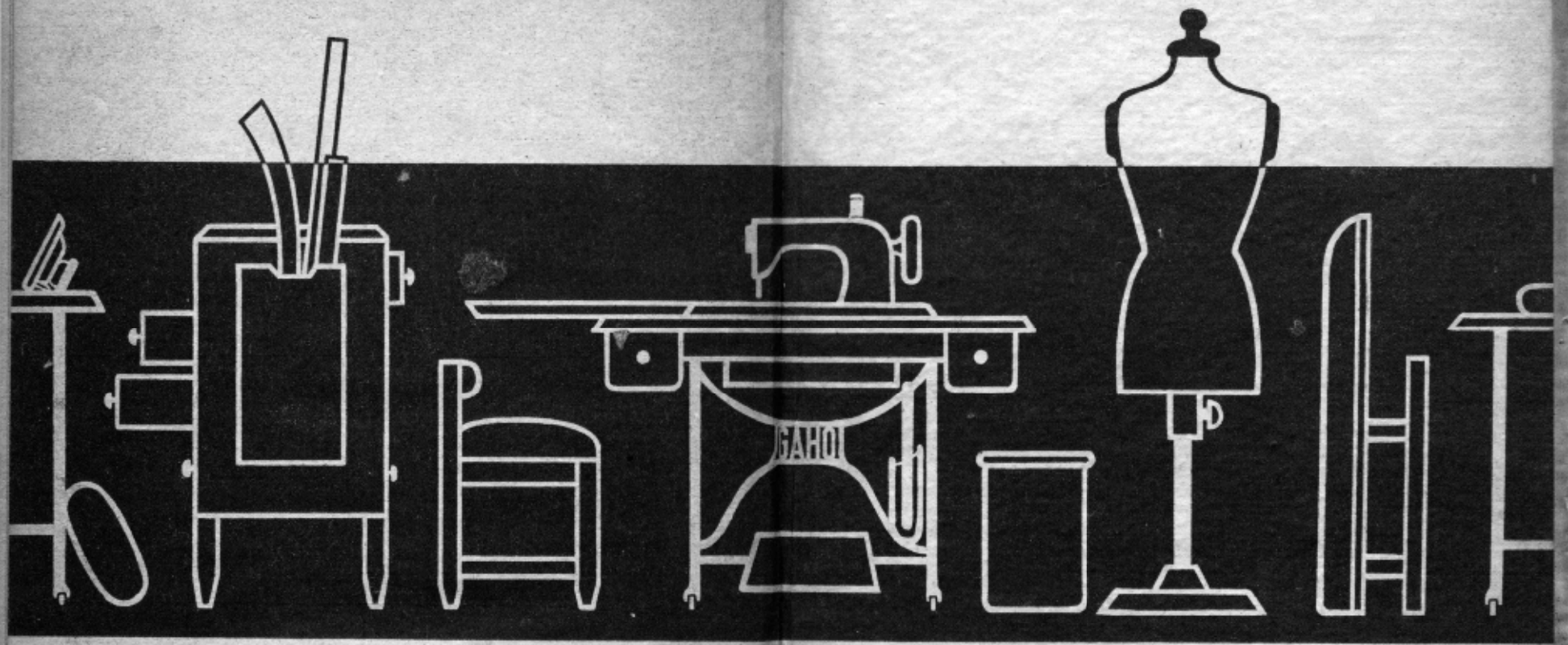
ワンピース・ドレス 上下が一つに續いている婦人服のこと、ツー・ピースに對するもの。

昭和二十四年一月二十五日印刷　昭和二十四年二月一日發行

家庭洋裁入門講座

定價 160圓

著者　大妻コタカ
發行者　柳沼澤介
印刷者　川上貞司
印刷所　東京都台東區上野山下町二　鐵道弘濟會印刷所
發行所　東京都港區芝田村町三ノ八　株式會社　婦人画報社
配給元　東京都千代田區神田淡路町二　日本出版配給株式會社


GAHOI

婦人画報社版